

オタ提督と艦娘たち

みなかみしょう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

基本的に戦わないオタクな提督の鎮守府日常ものです。

一部艦娘の性格が改変されていることがあります。主に青葉。

一話完結、どこからでも読めるようになっている……つもりです。

毎回わかりにくい登場人物紹介付きです。

※p i x i vでアップしているものと同様の内容になります。

目次

オタ提督と艦船模型	1
オタ提督と休日の過ごし方	13
オタ提督と夏の思い出	25
オタ提督と荷受する艦娘	34
オタ提督と青葉レポート	45
オタ提督と年末年始	58
オタ提督と駆け抜ける改二情報	71
オタ提督と重要な会議	85
オタ提督とゲーセン通いの艦娘	100
オタ提督と取材される艦娘	122
オタ提督と製菓会社の陰謀の日	135
オタ提督と大量の花々	146

オタ提督と画策する艦娘	157
オタ提督と相談に来る艦娘	173
オタ提督と秘書艦の一日	185
オタ提督と謎の建造物	199
オタ提督とお部屋訪問	221
オタ提督と秋祭り	238
オタ提督と謹賀新年	250
オタ提督と夜の見回り	262
オタ提督と艦娘たち	274
オタ提督と瑞雲祭り	290

オタ提督と艦船模型

「結局、球磨にするクマか？」

「まあ、他を選ぶ理由も無いし」

某鎮守府、提督執務室。

オタ提督（以下、提督）は秘書官の球磨と共にモニターの前で何やら相談していた。

二人が見ているのはとある通販サイト。そこには提督によつて検索された球磨の艦船模型が表示されていた。

室内をよく見ると、表紙に「艦船模型入門！」の文字が踊る模型誌があり。いくつか挟まれた付箋がそれなりに読み込まれていることを物語っている。

色々な事情が重なり外出しにくい提督業、彼は提督として着任してから外出が必要なオタク活動には早々に見切りをつけ、ネット上や通販を中心としたオタ活動に切り替えしていた。

そして提督業に慣れてきて若干の余裕が出てきたこのタイミングで自身の部下である艦娘達の艦船模型に興味が出てきた、というわけである。ちょうど模型誌で特集もされていたし。

とりあえず、最初ということで日頃秘書艦として世話になっている上に、出来が悪くても怒らなような球磨の模型を選び、今まさに注文しようとしているという状況である。

「道具は、これとこれでいいのかな？ あんまりプラモは作ったことないんだけど」「別に出来が悪くても球磨は気にしないクマよー」

談笑しながら提督が商品の購入ボタンをクリックしようとした時だ。

異様な気配を感じた。

「ゲエッ!？」

「どうしたクマー!」

二人の視線は外。というか、目の前の窓で止まっていた。

そこにいたのは重巡洋艦、青葉。鎮守府のパパラッチ、歩くデマ拡散器、災厄を振りまく者、呼び名は色々あるが、とにかくそんな存在だ。

彼女はなんというか、効果音で言うところの「ぬちゃあ」という感じで窓に張り付いていた。

「あ……青葉……?」

震え声の提督の問いに青葉が答えた。

「アオバア……ミチャイマシタアア……」

窓越しに響く、悦びに満ちたおぞましい声。同時、彼女は音も立てず消えた。

「消えた！ ニンジャかあいつは！」

「ほんとに重巡クマか!? 球磨にも見えなかったクマ！」

見れば、窓には彼女のいた痕跡一つ無い。その存在感を除けば完璧な仕事ぶりだ。出来れば出撃した海域でその力を発揮して欲しい。

そして提督は思った。

間違いなく青葉は今のことを鎮守府内にばら撒くだろう。それも、面白おかしく脚色して。

青葉のいなくなった窓の向こうは素晴らしく澄み渡った青空だった。

その空と同じくらい澄んだ目をしながら、提督は球磨に向かって聞いてみた。

「なあ、球磨。なんか面倒な予感がするんだが」

「わかるクマ。でも球磨にはどうすることもできないクマ」

球磨の達観した態度が少し羨ましい提督だった。

その日の昼食、食堂に入った瞬間、提督は青葉の情報拡散が速やかに行われたことを確信した。

球磨を伴って食堂に入るなり、その場にいる艦娘の間に目に見えて緊張が走ったの

だ。

空気の読めないことで定評のある提督にすら、何やら牽制する雰囲気がある。場の支配を察することが出来た。

なんとも居づらい状況である。

「提督、日替わり定食でいいクマ?」

「お、おう」

球磨に促され、日替わり定食の乗ったトレイを貰い、空いていたテーブルの席につく。いつもなら提督が席につくなり誰かしら寄ってくるものだが、今日はそれが無い。

昼食時でいっぱい食堂の中、提督と球磨の座ったテーブルだけが、ぽつんと空き、なんとも妙な空間が出来てしまった。

「青葉の奴、どんな噂を流したんだ……」

「詳しく聞くと精神衛生上良くないかもしれないクマよ?」

涼しい顔で食事を始める球磨。他人事とはいえ、もう少し心配して欲しい。

提督が言い知れぬ不安に支配されつつあったその時、後ろから声をかけられた。

「提督! 話は聞いているぞ!」

長門だった。手には昼食を持っている。普段は提督の趣味について嫌味ばかり言うくせに、妙にフレンドリーな雰囲気をもとっているのが嫌な予感を煽る。

「話ってなんのことだ？」

問いに対して天下のビッグ7は和やかに、そして食堂全体に聞こえるように言い放つた。

「艦船模型を作るのだろう！ 提督にしてはなかなか良い心がけだ！」

「お、おう。よく知ってるな。つか、普段は俺の趣味に文句つけるのに意外だな」

「艦船模型ならば話は別だ。私も無関係ではないからな。そうだ提督、最初に作るのは連合艦隊旗艦にして栄光のビッグ7である、この長門の模型なのだろうな？ なに、隠さなくてもわかる。こう見えて昔も今も人気者だからな。模型の種類も多いと聞くから、不慣れな提督向きのももの取り揃えているだろう。なあに、多少出来が悪くても何事も積み重ねだ。それに提督とこの長門の記念の品にちようど良かろう。ハハハハハ！」

かつてない勢いで一気にまくし立てる世界のビッグ7。ちなみに目が笑っていないので凄く怖い。

「け、検討中だ。何分、初心者だからな」

提督は全身に嫌な汗を浮かべながらそう答えるのが精一杯であった。

「……………ふむ。そうだな、熟考を重ねるのが良いだろう。なに、聡明な提督のことだ。正しい判断を下すことと私は確信しているぞ！」

食堂全体に響き渡る大声でそう宣言した後、鋭い目つきで提督を睨みつつ、長門は提督の近くの席についた。

直後、次が来た。

「ヘーイ、提督ウー！ グツタイミンネー！」

声をかけてきたのは金剛だった。やはり彼女も昼食らしい。見れば隣に妹の比叡もいる。

嫌な予感がした。

「聞いたヨー！ プラモデルを作るんだってネー」

「まあ、な」

「最初に誰のプラモを作るのかなー。もちろん、わたしを選ぶんだよネ！ 遠慮しなくってでもいいんだヨ！ 提督からのプレゼント、たのしみネー!!」

朗らかに笑う金剛。どうやら自分の模型が最初に作られることを疑ってもいない様子だ。

その自信がどこから来るのか聞いて見たいと真剣に思った提督だが、そこであることに気づいた。

陽気に笑う金剛の隣にいる比叡、彼女が凄い目つきでこつちを睨んでいる。

やばい目を合わせたら殺される……。

比叡という戦艦は金剛の妹で重度のシスコンだ。提督の見立てでは性別の境をとうの昔に超越しているあつちの世界の人間であることは間違いない、取り返しがつかないのは確定的に明らか。更に困ったことにどうやら比叡は提督のことをライバル視している模様なのだ。

そんな比叡のいるところで「模型を作つて金剛にプレゼントする」なんて言つたらどうなることか。

本気で死を覚悟する提督だが、比叡は人を殺せそうな眼力で睨む以上のことをする様子はなない。今のところは様子見で、提督が実際に何かの模型を作つたら行動に出るつもりなのだろう。

とりあえず、提督なりに今後何が起きるか考えてみた。

金剛の模型を作る↓金剛が喜ぶ↓嫉妬に駆られた比叡に半殺しにされる。

金剛の模型を作らない↓金剛が悲しむ↓怒つた比叡に半殺しにされる。

バッドエンドしか無い。完全なクソゲーだ。

「ま、まあ、落ち着け金剛。知つての通り、俺はそれほど器用じゃない。まだ作ることから検討中の段階だ」

「オーウ。それはソーリーね！でも、提督からのプレゼントなら、いつでもウエルカムだからネー！」

「……チッ」

金剛は強烈なウインク。比叡は舌打ちを残して、食事のトレイを持ったまま、近くの席に座った。

提督にとつて残念なことに、更に次が来た。

次に来たのは加賀だった。珍しいことに一人で、いつも通り大量の食事を持っていた。

先ほどまでの話を聞いていたらしく、加賀は提督の前に来るなりこう言った。

「提督。まずは五航戦の模型を作ってはいかがでしょうか？」

食堂内が一斉にざわついた。まさか、五航戦嫌いで有名なあの加賀がという感じだ。

提督の聴覚がすすり泣きみたいな音を捉えたが、これは翔鶴だろうか。

「加賀……お前……」

雪解け。そんな言葉が脳裏に浮かぶ感動的な場面だ。これで艦娘の人間関係に胃を痛めずにすると思つた提督の尻尻に涙が浮かぶ。

直後、加賀はいつも通りの無表情で言った。

「まずは五航戦の模型作りで練習を重ね、提督の腕前が熟練した段階で赤城さんや私の模型に着手していただければと思います。……練習で作った出来の悪い五航戦の模型は全て処分してください」

ベキイ、という音が聞こえた。恐らく瑞鶴が箸を折った音だろう。

「では、私は食事に集中しますので」

提督が何かいう前に一方的に会話を打ち切ると、加賀はやはり近くの席に座った。

「……………」

重い沈黙が食堂内に立ち込める。提督の箸はまるで進まない。周囲に座った連中が自分を監視しているのを感じる。胃が痛くなってきた。試しに球磨に「助けて」の視線を送るが、彼女はどこ吹く風で食事中だ。なんとという秘書艦か。

だが、その沈黙を破る者がいた。

「しれえ！ お困りのようですね！」

「雪風か」

提督の前にびよこんと現れたのは、小動物めいた駆逐艦の艦娘だった。幸運艦と名高い、雪風である。

「意見具申です！」

「おお、申してみろ」

「じゃんけん、で決めてはどうでしょう！」

こいつ文句が出ない上に確実に勝てる方法で来やがった。

提督のみならず、食堂にいる全艦娘が戦慄した。というか、扶桑姉妹を始め何人が

膝から崩れ落ちて見えた。かわいそう。

「たった一言で戦艦の心をも折るとは、雪風、恐ろしい子……」

「なんのことですか？」

怪訝な顔をする雪風。もしかしたら完全な善意からの発言なのかも知れない、尚更たちが悪いが。

「い、いや何でもない。じゃんけんは無しだ。そもそも、俺が趣味で作るんだから。自分で決めない」と

「そうですか！ わかりました！」

あつさり引き下がる雪風。どうやら完全に善意からの提案だったらしい。なんと恐ろしい子だろうか。

「さて……」

無理やり昼食を胃に押し込んだ提督だが、席を立てずにいた。

周囲の艦娘のプレッシャーが凄すぎてこのまま執務室に帰れる空気では無いためだ。

この場で誰の模型を作るか決める。場の空気が完全にそう言っていた。

こんな時ばかり空気が読める自分が恨めしい。自身を呪いながら、提督は死にかけた蚊みたいな声をなんとか喉から絞り出す。

「球磨……助けてくれ」

悠然とデザートを食べていた球磨はあっさりと答えた。

「無理クマ。いつそ全員分の模型を作れば皆喜ぶクマ」

「無茶言うな。うちに何人いると思ってるんだ。模型作りがライフワークになつちまうぞ」

「ライフワークにすれば良いクマ」

「嫌だ。アニメみたりゲームしたり薄い本読んだりしたい……お願いします。なにとぞ、なにとぞ」

「仕方ないクマねえ」

話しながらデザートを食べ終えた球磨がやれやれといった感じで言った。あからさまに余裕な態度を見るに、最初から対処法を考えていたのだろう。——考えた上で提督が追い込まれるのを楽しんだ節があるのは問題だが、今の提督にはそこまで考えが及ばない。

「提督、こういう時は彼女を頼るといいクマよ」

「彼女……?」

「そうクマ。今、遠征に出てる彼女クマ」

「……! そうか、そうだったのか! よし、決めたぞ!」

勢い良く椅子から立ち上がる提督。艦娘達の視線を一身に受けながら、彼は高らかに宣言した。

「最初に作る模型は、我が鎮守府に最初に着任した艦娘である『吹雪』とする！」
提督のその宣言に、異議を唱える者はいなかった。

駆逐艦、吹雪。鎮守府最初の艦娘であり、秘書艦。そして、今回のようにいない時に限って話題の中心になるという、微妙な影の薄さと、不憫さを持った子であった。

オタ提督と休日の過ごし方

オタ提督（以下、提督）にとって休日は貴重だが、今回のそれは更に特別な日であった。

「……始まったな、俺の休日が」

部屋のカーテンを僅かに開ける。差し込んでくる朝日が、休日の始まりを告げていた。

時刻は早朝。いつもならば休日は遅めに起床する提督だが、理由あってこの時間に目覚めた。

今日は某アイドルアニメの劇場版を見に行く予定なのだ。

「何としても、映画館にたどり着かなければ……」

静かな決意と共に、提督は呟いた。

提督が休日一人でする難易度は正直かなり高い。外出する前に同じく非番の艦娘に捕まり、一日が潰れてしまうことが大半だからだ。

しかし、今日はそんな展開を許すわけにはいかない。映画を視聴した後グッズを買い漁り、そのまま流れるように同人ショップに立ち寄り薄い本を買い込んで、それらを漫

画喫茶で食べるように読みふけり、帰りがけに実家へ荷物を送付した上でその辺でジャンクフードを食べて鎮守府に帰るといふ独身男性（20代後半オタク）の休日を満喫するのだ。

勝負は鎮守府の外に出るまでだ。

提督はこの日のために色々和小細工を試みた。その甲斐あって、なんとか金剛と非番の日をずらすことに成功した。これは大きな成果だ。あの英国かぶれと非番が被ると一日中ティータイムに付き合わされる。

「出てきたな……」

僅かに開いたカーテンから見える窓の外、金剛姉妹が寮から出て行くのが確認できた。これで一安心だ。

「では、行くとするか」

手早く荷物を確認した提督は、音を立てないようにそつとドアを開け、細心の注意を払いながら部屋を出た。

私室を出た提督はなるべく人通りの少ない経路を選んで歩く。鎮守府の最高責任者の知識と経験は伊達ではない。彼は艦娘と遭遇することなく、順調に宿舎から離れ、目的地への距離を縮めて行く。

目指すは裏門、そこに辿り着けば自由な休日は確実なものとなる。

裏門への最短ルートである居酒屋鳳翔の裏手に差し掛かった時だった。

「あら提督。奇遇ですねぇ、うえつぷ」

声をかけられた。

「ち、千歳か。つて、酒くせえ。まさか飲んでるのか？」

「やだなあ、提督。飲んでたのはさつきまでの話ですよ」

パーフェクトな酔っぱらいとして現れたのは軽空母の千歳だった。

「千代田はどうした……。いや、この分だと酔いつぶれたか。まさか、隼鷹さんも」

「みんなまだ鳳翔さんのところにいますよ」

想定外の事態だった。目の前にいる千歳は同じく軽空母の隼鷹の酒に付き合っているはずだった。そのために昨夜のうちに相当量の酒（自腹）を隼鷹に渡しておいたのだが、まさか千歳が起きているとは思わなかった。隼鷹ならば何とか相打ちくらいには持ち込んでくれていると思っただが……。

「？　　そういえば提督も非番でしたね。ひつく。今から一緒に飲みませんか」

艦娘とか軍人とかそれ以前に人として完全にアウトな発言をしながら、千歳は提督に腕を絡めようとして来た。常ならば柔らかい感触が腕に当たって色々な衝動を覚えるのだが、あまりの酒臭さに思わず反射的に距離を取る。

「くそつ。策が裏目に出たか」

こんな時、シスコン軽空母の千代田がいれば体を張って間に入って来るのだが、今頃鳳翔の店で酔いつぶれているに違いない。使えないシスコンだ。

どう切り抜けるか、提督が思案した時、向こうからやってくる人影があった。

遠くからでもわかるツンツンしたシルエツトにふらつく足取り。一瞬でわかった、軽空母の隼鷹だ。

「隼鷹さん！」

「へへ……。ていとくうく、私は貰った酒の分は働く女なんだけええ！」

いふなり隼鷹が千歳に飛びついた。

「え？ ちよつとお、何するのよ！」

「行きな提督っ！ ここは私にまかせようおうえええええっ!!」

「きやああ！ やめて汚いなんか私も気持ちわるくうつぶ……」

酔っ払い同士の生み出す最悪な音声が聞こえ始めたので、提督は一目散に走り去った。

「ふう、危なかった……。そして、ありがとう隼鷹さん」

千歳から逃げ切った提督は、色々大事なものを捨て去っていた気がする軽空母に感謝

した。

「さて、とりあえず予定通りに……ん？」

意地でも休日を通り越したい提督の執念が感覚を研ぎ澄ましたのだろうか。なんとなく、周囲の空気がざわついている気がした。

とりあえず、近くの植え込みに隠れてみる。

程なくして、騒がしいのが来た。

「ワレアオバ！　ワレアオバ！」

「いました！　追いかけてください！」

「吹雪！　先回りしなさい！」

「分かりました！　衣笠さん、主砲の用意を！」

「ワレアオバ！　ワレアオバ！」

「逃がしませんよ！　この探照灯で目潰しを……ッ」

そんな風に騒ぎながら、嵐のような一団が提督の前を駆け抜けていった。

「……青葉狩りか」

鎮守府内で何かやらかした青葉が艦娘達に追い回されているのだろう。青葉狩りと呼ばれる日常的な光景で、何故か吹雪や古鷹が中心となって討伐隊が組まれることが多い。

あのパラッチに補足される心配が無いなら好都合だ。

そう思い、提督は彼女達の音が十分に遠ざかったのを確認して植え込みから出た。

「あら、司令官！ 奇遇ねえ！」

植え込みから出た瞬間、駆逐艦の雷に見つかった。

提督にとつてこれはかなり面倒な事態が発生したことを意味する。

何故なら彼女を始めとした第六駆逐隊の面々は本日非番であり、今ぼったり出会った雷は両手いっぱい菓子やらなにやらを持っていて自室で姉妹艦と遊ぶオーラを全開で醸しだしており、更に日頃から提督は割りと頻繁に第六駆逐隊の相手をしていた。

逃げなければ、休日を潰される。

提督は即座に判断した。

「すまん雷！ ちょっと用があつてな！」

「あつ。提督！ 待ちなさい！ 何で逃げるのよー！」

どういふわけか追いかけて来る雷。全力ダッシュで逃げながら提督は叫ぶ。

「なぜ追いかけてくる……っ！」

「用があるならこの雷様が手伝つてあげるわよ！」

どうやら発言の仕方を間違えたらしい。雷の心の琴線に触れてしまったようだ。

「間に合ってるっつーの!」

叫ぶと同時に、提督は近くにあつた建物、駆逐艦寮に飛び込んだ。

「(こらー、待ちなさい!」

「断る!」

駆逐艦寮の中を逃げ回る提督。何度も無闇に曲がつたり階段を昇り降りして雷を少し引き離れた後、ちようど良い感じにドアを発見。

「(こらー)だあ!」

提督は迷わずドアに飛び込んだ。

「ねえねえ、こつちに提督来なかつた?」

「いや、見ておらぬな」

突然部屋に入ってきた雷の質問に、駆逐艦の初春は素っ気なく答えた。

「本当に?」

「本当じゃとも。妻が嘘をついて得することなどないぞ」

「おつかしいわねー。確かにこつちに来たのに」

初春の返答に不審な点を見出せなかつたらしく、訝しげな様子の雷。彼女の感覚では確かにこの辺りで提督の姿を見失つたはずなのだ。

「あの提督のことじゃ、その辺の窓から飛び出してもおかしくあるまい？」

初春の言うことはもつともだった。この鎮守府の提督は奇行が多いことで有名だ。実際、たまに金剛などに迫られては窓から脱出する姿が目撃されている。

「そうね。外を探してみるわ。ありがとう！」

色々と納得したらしい雷は、勢いよく初春の部屋から飛び出して行った。

足音の遠ざかる音がする、どうやら雷は外に向かったようだ。

「もう出てきたも良いぞ」

「……助かったよ、初春」

「なに、気にせずともよい。妾とお主の仲ではないか」

雷に追いかけて回されていた提督だが、何の策も無く駆逐艦寮を走り回っていたわけではない。こんなこともあるのかと、話のわかる駆逐艦の幾人かには話を通してあったのだ。走り回りながら、最も手近にあった初春の部屋に飛び込んだのだが、どうやら上手くいったらしい。

「そう言つて貰えると助かる。それじゃ……」

「待つが良い」

礼を言つて去ろうとする呼び止める初春。いつの間にかその手には雑誌があった。

表紙にスイーツとか何とかそういう言葉が踊っている、そんな類の雑誌だ。

「礼の一つも所望して良いかのう？」

「アツハイ」

抗いようの無い問いかけであった。

「この雑誌は子日を買ったものでの。いつか食べてみたいと妹達と話したもののじゃ」

初春は初春型駆逐艦のネームシップ。つまりは長女で、姉妹達と仲が良い。よく集まって歓談している。

「アツハイ。全員分買ってきます」

全てを受け入れるしかない。もちろん自分の奢りで。提督は全てを受け入れる、澄んだ瞳で返事を返した。

「うむ。良い返事じゃ」

大量の付箋付きの雑誌を手渡されて、提督は初春の部屋からとぼとぼと出て行くのであった。

「ついに来た…。多少の犠牲はあったが、ついに……」

鎮守府の裏口に到達した提督は、門の前で感極まっていた。

数々の難関を乗り越え、今や目の前には自由が広がっている。久しぶりの自分が自分

である時間、それがこれからはじまるのだ。

そんな薔薇色の休日を思い描くだけで、素っ気ない無骨な裏門が輝いて見える。まさに希望の象徴だ。

「おや、提督。偶然クマ」

いざ自由への第一歩を踏み出そうとしたら、聞き覚えのある声が出た。

ギチギチと音が聞こえそうなくらいぎこちない動きで声の方を見ると、秘書艦の軽巡洋艦、球磨がいた。

「球磨、何故ここに……」

「何を言っているクマ。今日は球磨も非番クマ。気晴らしに出かけようとしても少しもおかしく無いクマ」

ニヤニヤと笑いながら球磨は答えた。間違いない、こいつは全て知っていた。腐っても秘書艦、提督の行動スケジュールも行動パターンも把握しているのだ。

「お、お前。俺がここに来るのをわかってたな……」

「そんなこと無いクマ。ちよつと提督が執務中に何を熱心に調べているのか気になったので、覗き込んだだけクマ」

「なん……だと……」

どうやら調べるのに夢中で気付かなかったようだ。完全に自分の落ち度である。

自分の詰め甘さに絶望した提督は自然と肩を落とし、膝を付いた。わざわざ待ち構えていた球磨が自分に何を要求してくるのか、想像するだけで恐ろしい。

恐怖に震え始めた提督。それを見て球磨は溜息を一つついて、手を差し出してきた。

「なんだ？」

「球磨も鬼じゃないクマ。提督の邪魔はしないクマ。ちよつと妹達にお土産を買うためのお小遣いをくれれば十分クマ」

有り難い話だった。姉妹全員を連れてシヨツピングに付き合わせるとか、それに駆逐艦もついてくるとか、そういう可能性に比べれば天国だ。

「くっ、もつてけー！」

財布から最も高額な紙幣を一枚抜き取り、球磨に渡す。

受け取った球磨はほくほく笑顔で言った。

「ありがたく頂戴するクマよ。そうそう、提督」

「なんだ？」

「今度映画を見に行く時は、球磨もちゃんと誘うクマよ。面白そうなら一緒に行くクマ」

そして、今回はこれで見逃してやるクマ、と言いながら球磨は先に外へと去っていった。

「お、おう」

その後、提督は映画を見た後、そこそこに時間を過ごし、予定より早く鎮守府に戻った。

リークされた情報をキャッチしたらしい金剛姉妹が街をうろついているのを、たまたま目にしたからである。

オタ提督と夏の思い出

「提督、司令部からお手紙だクマ」

オタ提督（以下、提督）は、秘書艦である軽巡洋艦の球磨から手紙を受け取ると、手慣れた動作で中身をあらためた。

「……………」

「どうしたクマ？」

司令部からの書類に目を通す提督の手が僅かに震えているのを、球磨は見逃さなかった。

「球磨、ついにAL/MI作戦が発動されるぞ」

「本当クマか！ それは大変なことになるクマね」

「全くだ…………クソツ、なんてこった…………」

提督は握りこぶしで苦悩していた。珍しい光景である。

AL/MI作戦。特にMI作戦は多くの艦娘にとつて心の傷を抉るような作戦名だ。

アニメやゲームの事ばかり気にしているように見えて、案外みんなのことを心配している人だから気に病んでしまうのだろう。

ちよつとだけ優しい気持ちになった球磨は、提督を慰めるべく穏やかに微笑みかけた。

「大丈夫クマ。みんな提督と一緒に戦つて来たクマ。今ならどんな過去だつて乗り越え……」

「夏コミの日程と重なつてる……。俺のこの夏最大の楽しみが奪われるというのか。許せん、深海棲艦！」

「提督、ふざけたこと言つてるからぶつ飛ばすクマ」

提督は問答無用で球磨にぶつ飛ばされた。

○

「以上が、AL/MI作戦の概要だ。出撃メンバーは追つて通達する。……これまでやつて来た我々ならば、必ず勝利し、全員無事に帰つて来れると確信している。諸君の健闘を期待する」

鎮守府の全艦娘を集めたブリーフィングで、提督は厳かにそう宣言した。

アマゾンの箱を片手にだらしない顔で鎮守府内をうろついている、そんないつもの姿とはまるで別人だった。

その様子を見て、艦娘達も自然とこの作戦の重要さを再認識し、姿勢を正した。提督がまともに見えるなんてたゞごとではない。

提督が何故か包帯を巻いていることは、みんな見なかつたことにしてくれた。

○

提督は働いていた。別に普段サボっているわけではないが、かつてない働きっぷりであつた。

仕事の隙を見つけてはアニメや漫画をチェックし、執務室に飾つたフィギュアのポーズを変え、通販のコンビニ受け取りに向かう。

そんな提督の姿はそこには無かつた。歩く時も座る時も、常に艦隊の運営に思考を費やし、秘書艦を始めとしたスタッフを的確に使いこなす。

艦娘への態度も無駄がなく、不思議な凛々しさすら発揮しているように見えた。

その姿を見た戦艦長門などは「ついに奴も心を入れ替えてくれたようだな。人類防衛の責務に目覚めたか。頼もしいことだ」と涙ぐみつつ感心していたほどだ。

とにかく、提督の仕事ぶりは凄まじく、秘書艦の球磨が執務室にいることの方が珍しくらいになつた。

そんな提督が書類仕事をするばかりの執務室を、訪ねる艦娘がいた。

「よおー。提督やつてるねえ〜」

駆逐艦、秋雲である。

「秋雲か、来ると思っていた」

「やっぱり、じゃあ私は何をお願いするかもわかってるでしょ？」

「夏コミへの参加は禁止だ」

「なっ！」

秋雲は絶望と共に提督に抗議する。

「なんでよ！ 私が今年の夏コミをどれだけ楽しみにしてたと思ってるの！ せっかく当選したのに！ 有給ちょうだいよ！」

この艦娘。サークル参加が決定しているのだ。魂の抗議であった。

「知っている。だが、M I作戦中の有給は許可できない。つーか鎮守府の総力戦の中、休めるわけないだろ」

「そ、そうだけど。提督なら私の気持ちをわかってくれると……」

「気持ちにはわかる。だが諦めろ。信頼できる俺の仲間を手配してやるからサークルのことは心配しないでいい」

秋雲の方は見ないでひたすら書類を処理しながら提督は言い放った。

「そ、そんな。つか、提督だって必死に仕事してるけど、どう考えても夏コミまでにこの作戦終わらないじゃん。わかってんでしょ？」

「わかっている」

「それなら！」

「秋雲。俺は夏コミを諦めたわけではない」

「？」

「コミケ4日目というのを知っているか？」

「っ!？」

コミケ4日目。それは夏コミで配布された同人誌が各地のショップに並ぶ日のことを指す。

当然、その日はショップは大盛況となり大混雑。だが、コミケに行けなかった人間が最速で本を入手する手段としてはかなり有りな選択だ。

「スケジュールが限りなく理想的に進めば、夏コミ終了と同時にMI作戦を完了できる。この意味がわかるな」

「……なるほど」

秋雲はすべて理解した。

提督が必要以上に職務に励んでいるのは、AL/MI作戦を何とかしてコミケ4日目までに終わらせるためなのだ。

世界のためにコミケは諦める。だが、少しでも可能性があるならば僅かな希望に全てを費やす。それが提督という男だ。

コミケ4日目のために資材を備蓄し、艦娘を錬成し、作戦計画を立案している。

戦争のせいでコミケ本番にいけなくなったオタクのどす黒い感情が彼の原動力なのだ。

「提督。私に手伝えること、ないかな」

どす黒い感情で動くのは秋雲も同じだった。

「M I作戦の水雷戦隊に参加してくれ。戦えない俺の代わりに勝利を掴め」

「了解！」

提督と秋雲が、力強く握手を交わした。

○

「提督、M I作戦の進行の報告だクマ」

「来たか。どうだった」

「いつも思うけど、そのポーズはどうなんだクマ」

AL/M I作戦が始まってからというもの、提督は常に執務室ではゲンドウポーズで着席していた。

「気にするな。報告を頼む」

「M I作戦は順調に推移。このままいけば明日にでも予定通り完了しそうクマ。ALみたく苦戦しなくてよかったクマ」

「そうか。何よりだ。球磨もALでは無理をさせてすまん」

「ちよつと大変だったけれど、全員無事で勝てたから大丈夫クマよ」

AL作戦を無事に終えてから秘書艦の仕事に復帰した球磨はにっこりと笑った。

ちなみに、鎮守府の殆どの艦娘は作戦発動後の提督の変化については「かつこよくなった」などと前向きに受け入れている。

しかし、秋雲など一部の艦娘は提督の裏でたぎっているドロドロした感情をしつかり把握していたりする。

球磨もその辺を何となく察している一人であったが、仕事をしてくれる分には問題ないので放置しているのである。

「MI作戦参加の部隊には十分な補給と休養をとってから仕上げにかかるように言ってくれ」

「了解クマ。提督がでたらめに備蓄したから安心クマ」

そんなやりとりをして、二人はそれぞれの仕事に戻った。

○

翌日、MI作戦が完了した。

「提督、グッドニュースだクマ！」

「グレイト！」

「まだ何も言っていないクマよ」

「この状況でのグッドニュースなんて一つしかないだろう。まあいい、報告したまえ」
興奮を隠しきれずにゲンドウポーズを取る提督。

その様子に苦笑しながら報告書を読み上げようとする球磨。

今、戦いは一つの大きな山場を越えた。そんな喜びが場を支配しつつあった。
その時だった、

「大変です！ 提督！！」

執務室に飛び込んできたのは、軽巡洋艦の大淀だった。

落ち着いた眼鏡キャラらしくない、異常な慌てぶりだった。ただごとではない。

「何があつた！」

大淀は短く答えた。

「本土付近に深海棲艦の艦隊が！ それも大規模です！」

AL/MI作戦中に本土を攻める。敵ながら見事な作戦だった。

「だ、大丈夫クマ。資材も十分あるし。大和に武蔵にうちの妹も残ってるクマ。戦力的には……」

球磨がそう言って、大淀を落ち着かせた辺りだった、

「……ちくしょう」

「提督？」

「どうしたクマ」

「コミケ4日目行けないじゃないか！ 許さんぞ深海棲艦！ 徹底的に叩いてくれる！」

「結局それかクマ！」

とりあえず球磨にぶつ飛ばされた後、提督は自らの指揮で本土にやって来た敵艦隊を叩き潰した。

ちなみに、M I 作戦帰りで本土近海に出撃できない秋雲は、ちゃっかりコミケ4日目に参加した。

オタ提督と荷受する艦娘

戦艦長門は生真面目な艦娘である。

出撃がなく、訓練を終え、時間が空いた時でも何かしらの仕事を自分で見つけてくる。鎮守府前の掃除も、彼女のそんな仕事の一つだ。最初はわざわざ長門がすることではないと周囲に言われたものだが、今では普通の光景として定着し、他の艦娘と掃除している姿もよく見受けられる。

戦艦娘の代表格である自分が率先して仕事をするので、鎮守府の規律の維持や艦娘同士の交流の役にたつ。長門自身、そんな生真面目な考えを持っていた。

さて、鎮守府前で掃除をしていると、掃除以外の仕事が舞い込んでくる。

来客があれば挨拶するし、必要があれば案内もする。一般市民が訪れた場合などは対応に注意が必要だし、偉い人が来た時も同様だ。

他にも、荷受という仕事が発生することもある。

特にこの鎮守府のオタ提督（以下、提督）は頻繁にネット通販を利用するので、必然的に長門が荷物を受け取ることが多くなる。

「ふむ、特産品か……」

今しがた受け取った荷物を見ながら、長門は思案していた。結構大きめのダンボール箱で、ずっしりとした重みがある。

「特産品」、荷札にはそう書かれていた。

しかし、長門はこの「特産品」の三文字に苦い思い出があった。

この鎮守府に着任して、しばらくたった頃、同じように提督宛の「特産品」の荷物を受け取った。

当時の長門は提督の趣味に関してあまりにも理解が浅かった。彼がプライベートでどのような時間を過ごしているか知らなかった。

だから開けた、「特産品」の荷物を。

そして見た、大量のエロ本（長門は今でも理解できていないが、エロ同人誌）の山を。あの場に駆逐艦がないのが幸이었다。いればきつと精神に傷を負っていただろう。

幸い、現場にいたのは荷物を受け取った自分と、それを見て慌てて駆け寄って来た提督の二人だけだった。

情けないことに、肌色満開の本の山を見た瞬間、長門は提督を殴り飛ばしてしまった。当時の自分の動揺ぶりを思い出すと、うっかり主砲一斉発射しなかっただけマシかもしれない。

普通の人間を普通に殴ってしまったのは、長門にとってあの一回きりである。今でも強く反省している出来事だ。

きっと、提督も反省しているだろう。その後、三日ほど部屋から出てこなかったほどだし（何故か姉妹艦の陸奥に死ぬほど怒られたが）。

とはいえ、それらは全て過去の話である。

あれからいくつもの決戦を乗り越え、長門は成長した。今では提督のこともかなり理解しているし、それなりに尊敬できるところもあるとすら思っている。

例えば先日など、駆逐艦の曙に1時間くらい罵声を浴びせられた後「我々の業界ではご褒美です」と笑顔で言い切る姿を見て、素直に「強い」と感心したものだ。

実際のところ、趣味と性癖に目を瞑れば能力は十分優秀な男なのだ。

何より長門も大人である。寛容な精神でもって過去のことを水に流し、この「特産品」の荷物を提督に事務的に渡すべきだろう。

荷物を持って硬直した状態で長考した長門は、何とか自分自身を納得させて、提督のところに向かう結論を出した。

そんなわけで、掃除道具を片付け執務室に向かおうとしたところで、秘書艦の球磨がこちらにやって来た。

「お、来てるクマね」

「む、球磨か。どうかしたか？」

「提督に頼まれて荷物を受け取りに来たクマ」

提督の秘書官を務める軽巡洋艦の球磨は、珍妙な語尾を除けば非常に優秀だ。提督の奇行をそつなくあしらった上で、業務をこなす得難い能力がある。

今もまた雑務の間間を見て、荷受に来たのだろう。

「これのことか？　ちようどいい、頼んだぞ」

「ありがとうクマ。ビッグ7をパシリみたいに使つて申し訳ないクマ」

「気にすることはない。掃除のついでだ」

こちらとしても助かる話だ。秘書艦経由で提督に「特産品」が渡るなら安心である。

「いつもながら、お仕事お疲れ様クマ。提督も長門さんがしつかりしてるから、鎮守府の規律が保ててると言つてたクマよ」

「そ、そうか。ま、まあ、ビッグ7だからな。皆の規範とならねば」

どうせ褒めるなら直接褒めてくれてもいいのにと思いつつも、長門の中で提督の評価が1ランク上がった。

「そうだ。良ければこの荷物の中身、少し貰つてくクマ？」

「なんだと！」

問題発言だ。提督宛の「特産品」を長門に振る舞おうとするなど。正気の沙汰とは思

えない。提督の毒が球磨に回ったのだろうか。

「提督からの許可は貰ってるクマ。使う前に少しなら配ってもいいって」

「く、配るだと……その中身をか」

「そうだクマ。どうかしたクマ？」

「いや……しかし。あの男、何を考えて……」

提督宛の「特産品」を鎮守府内に配布する。考えるだけでも恐ろしい。鎮守府の風紀が乱れるどころではない、戦わずして崩壊だ。

「何って提督はちゃんと皆のことを考えているクマよ？」

「……考えているだと。まさか、我々のことをそういう目で……」

「？　そういう目ってというのがどういふことかわからないけど。みんなを大事にしようとしてるクマよ。はっきりは言わないけど」

「大事に……、そうか、そうだったのか……」

長門は理解した。提督も男だ。艦娘とはいえ若くて器量良しの女性だらけの鎮守府の中で暮らすうちに、理性と知性が暗黒面に突入してしまったに違いはない。

きつと今の彼は現実と妄想の境を歩く、悲しい存在になりつつあるのだ。

そして、そんな提督の欲望の発露がこうして形として現れつつある。

今、起きているのはきつとそんな状況なのだ。

「長門さん、知らないクマ？ それなら他の子に配るクマよ？ さつき第七駆逐隊とすれ違ったクマし」

「……そ、それはいかん！」

「そうクマか。それじゃあ、長門さんに」

箱を開けようとする球磨。長門はそれを慌てて止める。

「そ、それも駄目だ！」

「どうしたクマ？ そんなに焦って」

ここで提督厳選の春画本など開陳されてはたまらない。人通りがあるし、鎮守府崩壊の序曲が始まってしまふ。

長門が今やるべきこと、それは、どうかして提督のいる場所に赴き。彼を正しい道に導くことだろう。

秘書艦の球磨がこうなってしまった以上、これは自分にしか出来ない役目なのだ。

「そ、そうだ。まずは提督だ。提督宛の荷物なのだから、彼に確認してもらうのが筋だろうと思つてな」

「はー、長門さんは真面目クマねー」

「真面目でなければビッグ7は務まらんからな！ はっはっは！」

背中に冷や汗を流しながら、声高く笑う。どうか第一の危機は回避できそうだった

た。

「それじゃあ、球磨は荷物を持って提督のここに行ってくるクマ。ありがとクマ」
「う、いや。せっかくだから私も行こう。荷物を届けてから休憩に入るつもりだったしな」

「長門さんから提督に会いに行くのは珍しいクマねー」

「た、たまには労ってやらんとな。ビッグ7の癒やしだ」

この時、長門は提督にあつたら癒やしという名の拳を叩き込むことを決めつつあつた。

「じゃ、一緒に行くクマー」

「うむ」

そんなわけで、二人は「特産品」の荷物と共に提督の執務室に向かうのだった。

☆

「おう、球磨、お疲れ。おや？ 珍しいな、長門か」

執務室に入ると、事務仕事をしている提督が軽く挨拶をした。

視線も手も仕事に集中している。アニメを見ている時の緩んだ表情と違い、仕事モードだ。

「言われた荷物を持ってきたクマ」

「私は提督の仕事ぶりを見に来ただけだ。うむ、しつかりしているようだな」

「そうか、気を使わせてすまないな」

「なに、気にすることはない」

今のところ、提督の様子は普通だ。いや、真面目に仕事をしている姿が普段とかけ離れていてちょっと異様だが、一般的に見るとこちらが普通だろう。

だが、油断はできない。長門は拳を握りしめ、いつでも殴れる用意をする。

「そうだ、せっかくだ、長門にもわけてやろう」

球磨から荷物を受け取るなり、提督は「特産品」の荷物を開梱し始めた。

「な、何をする気だ提督！ そのようなかがわしい「特産品」など……！」

長門の叫びを意に介さず、提督は開梱作業を続ける。

一応、長門の声は聞こえているらしく、返事はあった。

「いかがわしい？ ああ、そうか。前にそんなこともあったな」

「前って何クマ？」

長門の心中とは裏腹に、のんびりした口調で言う提督。

興味津々といった様子で問いかけてきた球磨に、提督は語って聞かせる。

「球磨が来る直前のことだ。友人が「特産品」の名目で極めて特殊な資料を送ってくれたんだ」

「エロ本クマね」

「俗な言い方をするとそうなる」

「そ、そうだ！ あの時、私はうっかりその箱を開けてしまった……」

「可哀想クマ、提督の被害者だクマ」

球磨が心底同情の眼差しで長門を見てきた。割と本気で身にしみた。

「私はお前に送られてきた特殊な「特産品」で精神に軽く傷を負ったのだぞ！ それをまた」

「安心しろ長門。今回の「特産品」はちゃんとしたものだ」

言いながら、提督は箱の中身を手渡した。

「ひっ……」

たじろぐ長門の手に渡されたのは、大きく、丸く、柔らかいものだった。

立派なみかんだ。

「故郷から送られて来たものだ。遠方の親戚にみかん農家がいる」

「じゃあ、少し貰って皆に配ってくるクマ」

どこから取り出したのか、球磨はいくつかの袋にみかんを素早く詰めると、執務室を出て行ってしまった。

「み、みかん……。そうか、私の早とちりだったか」

心底安心する長門。全てが勘違いだったのだ。こんなに嬉しいことはない。

提督は小さめの袋にみかんをつめて長門に渡してくれた。

「今度から私宛の荷物を見るときは、送り主に気をつける。男性の名前だったら開けないほうがいい」

ふと荷札をみれば、女性の名前だった。提督の母だろうか。

「そういう見分け方は早めに教えてくれ……」

「今教えたから、勘弁してくれ」

「そのみかんで許そう」

「ビッグ7は心が広いな、この程度でいいのか？」

「なに、十分さ」

みかんを受け取り、穏やかな面持ちで、長門は執務室を退出した。

☆

執務室に一人残された提督は安堵していた。

「……危なかった」

故郷から届いたみかんの荷物には仕掛けがあった。

箱の底が二重になっていて。エロ同人誌の数々が収納されているのだ。

エロ同人誌二重底輸送作戦。

先日、母からみかんを送りたいと連絡があつた時に、慌てて考えた作戦だ。

危なかつた。長門が受け取り、この仕掛けに気づいていたら、また殴られて寝込む羽目になるところだつた。

同じ作戦は危険だろう、今後もあの手この手を考えよう。

一人、そんな決意を固める提督だつた。

ちなみに、みかんは美味だつた。

オタ提督と青葉レポート

【某月某日、重巡洋艦青葉の報告書】

【早朝】

早朝です！ 重巡洋艦青葉です！ 今日も元気に鎮守府の皆さんを取材しちやいます！

朝食前のこの時間でも鎮守府は結構騒がしいです。カメラを片手に外に出れば、太陽が姿を見せ始めた水平線をバックに一部の艦娘がランニングをしています。感心ですね。

おっと、港に人影があります。なんと一航戦の赤城さんと加賀さんではありませんか。荷物を持って、何かを始めるようです。ちよつと取材してみましよう。

「おはようございます、青葉です！ お二人共、何をされているんですか？」

「釣りよ。見ればわかるでしょう」

そっけない対応をしながら釣り道具を取り出す加賀さん。手慣れた様子です。隣の赤城さんは無言で仕掛けを作っています。きつとお腹が空いているのでしよう。

「お二人で良く釣りをしているんですか？」

「食料源です。前に網を使ったら提督に禁止されたので今は地道にやっています」

提督。ナイス判断です。鎮守府近海から魚影が消滅するところでした。

「一航戦の誇り、お見せします！」

赤城さんはこちらを全く気にせず釣りを始めました。というか、隣に調理道具と七輪まで置いてあります。その場で食べるんですね。充実した朝です。

「それで、青葉さんは何か用？」

「私はお腹が空いています」

「いえ、何をしてるか気になっただけです。失礼しましたっ！」

二人共なんか殺気立ってる様子なので、青葉、離脱します！

ちなみに、大漁だったけど、全部二人で食べちゃったらしいです。

【朝食の時間】

さて、朝食の時間です。基本的に朝食は食堂で頂きます。

出撃や遠征している艦娘以外は大体集まっていますね。

おっと、あそこに見えるのは一航戦のお二人です。朝釣りだけでは飽きたらず、ここで二度目の朝食の模様。ホビットみたいですね。

朝食セットを受け取って、空いてる席に座った私の向かいに居たのは、重雷装艦の北上さんと大井さんでした。さっそく、観察してみましよう。

「はい、北上さん、あーん」

「もー、大井っち、恥ずかしいってばー」

朝から大分暑苦しい感じですよ。これ、大井さんはもう諦めるしとて、北上さんが満更でもない感じなのが問題ですよ。

いやあ、しかし、お二人共朝から周囲を気にしないラブイ空間を作ってます。特に大井さんが上機嫌なのが大きいみたいですね。

「……青葉さん、さっきからこちらを見て、どうかしました？」

気づかれました。目の前ですから、遅いくらいですけど。

「い、いやー。今日は二人共いつにも増して仲が宜しいなと思ひましてー」

「え、そう？ いつもこんな感じだよ、大井っち」

「うふふ。最近北上さんの出撃が多かったから、ちよつと嬉しくてそう見えるのかもしれませんね。……だから私達の邪魔するんじゃないわよ、パラッチが」

今約一名本音が漏れてたというか、絶対わざと聞こえるように言ってますよねこの人！

ちよ、ちよつと怖いので、御飯を手早く食べ終えて離脱することにしました。

【午前】

午前中のお仕事の時間です。今日は青葉の出撃の予定はありません。雑務と訓練を

こなしつつ、他の艦娘の様子を見てみましょう。

出撃する艦隊（今日は潜水艦がオリョール海に旅立ちました。長い旅に……）と遠征艦隊を見送った青葉はそのまま港の見回りです。

入ってきた物資を運ぶ人、駆逐艦の教練をする軽巡洋艦、早朝とは違う賑やかさで活気がありますね。

のんびり歩きながら港の外れ、人気のないところまで行くと、駆逐艦の敷波ちゃんと会いました。何やら困っている様子。

「どもー、青葉です。敷波ちゃん、どうかしたんですか？」

「あ、青葉さん！ 磯波を、磯波をみかけませんでしたか？」

「いえ、今日は見てませんけど。何かあったんですか？」

「そ、それが、昨日、磯波が提督に挨拶したんですが、その時に「あれ？ 磯波って前からうちにいたっけ」って言われたのがショックだったみたいで」

「……………」

提督。最低です。磯波ちゃんはこの鎮守府では最古参の一人ですよ。

「それは提督が悪いですね。青葉も一緒に探しますから、安心してください！」

「ほんとですか！ ありがとうございます！」

「任せて下さい！ ついでに提督のツケにして間宮さんのスイーツもごちそうしてあげ

ます！」

「そんなことしていいんですか！」

「後で私から提督に言っておくから大丈夫です！」

「あ、ありがとうございます！」

「では、一緒に探しましょう！」

30分後、港の隅の小屋で魚介類を焼いて振る舞ってる磯波ちゃんを発見しました。たまに気晴らしでやってるらしいです。

敷波ちゃんと慰めた後、三人で間宮でパフェを食べました。精神ケアの必要経費ってことで、宜しく願います！

【昼食】

残念ながら、昼食時は変わったことはありませんでした。

オリョール海から帰ってきた潜水艦の皆さんが慌ただしくご飯をかきこんで、また出撃して行きました。

最近、多いですね。先週まで手違いで大和型がずっと演習に出てた影響ですか？

【午後】

午後です！ 突然ですが青葉ピンチです！

特に理由もなくカメラを構えた状態でトイレの近くにいたら、たまたま古鷹さんに目撃されてしまいました。

古鷹さんったら、震え声で、

「青葉さん、ついにそこまで墜ちて……。流石に看過出来ません！」

つて言った後に鬼の形相で私に襲い掛かってきました。はつきり言つて今回は誤解です。前に着替え中の写真を撮ったことが相当効いてるみたいですけど。

そんなわけで、青葉は全力ダッシュ中です。

「待ちなさい！ 今日という今日は許しません！」

「誤解です！ 誤解ですよ！」

「じゃあ、なんで逃げるんですか！」

「捕まったら酷いことされるじゃないですか！」

「後ろ暗いことがあるからそうなるんです！」

交渉の余地無し。でも、青葉もこれまでの経験から学びました。このまま逃げ回っていると吹雪ちゃんなんか加わって完全に包囲されちゃいます。

そのために、作戦を考えました。

とりあえず、手持ちのカメラを投げ捨てます。

「誤解ですつてば——！」

「あ、ちよつと！ カメラ！」

投げ捨てたのは予備のカメラです。中に入っているのは無難な写真ばかり。いえ、無難じゃない写真を撮影してるわけじゃありませんが。

古鷹さんのことだから、カメラの中身を確認（提督から頂いたデジカメです）すれば安心するでしょう。性格的に後で私に謝罪に来るかもしれませんが。

提督からの戴き物を投げ捨てるのに抵抗はありますが、これも生き延びる術。涙を飲んで実行しました。

「よし、追撃なし。大丈夫です」

しばらく様子見した感じ、追ってはありませんでした。青葉、久しぶりの勝利です！と、そんな風に勝利に酔いしれていたなら、珍しい光景が目前に展開されていました。逃げているうちに鎮守府入り口近くに来ていたのですが、そこにはいつものように荷受をしている長門さんが見えます。

そこまでは普通の光景ですが、荷物を受け取りにやって来た艦娘が意外です。

長門さんから荷物を受け取ったのは軽空母の龍驤さんに、装甲空母の大鳳さんです。

当鎮守府で一番多い荷物は提督宛、次いで夕張さんです。それ以外の艦娘はあんまり荷物を受け取りません。

これはレアケースなんじゃないでしょうか。こちらに近づいて来ますし、ちよつと取

材してみましよう。

「どもー、青葉です。珍しいコンビですなー、何の荷物か聞いてもいいですか？」

「うわっ。あんたいきなり出てくるな。どっから見たんや」

「えへへー、たまたま見かけまして。珍しいなーと」

「べ、別に大したもんやないで。なあ、大鳳はん」

「は、はい。ただの衣類ですよ。ほら」

お二人共、何やら焦りながら私に荷物を見せてきます。どうかしたんでしょうか。

「ふむふむ。確かにそう書いてありますね。私服でも買ったんですか？」

「そうそう。うちら、艦装以外の服、あんま持つとらんからな。試しに通販してみたん

や」

「ほ、ほら、サイズも近いですし」

「なるほどー。確かにお二人共、身体のシルエットが似通っていますからね」

「……………」

「……………」

あれ？ お二人共、突然黙りこんでしまって、どうかしたんでしょうか？

何はともあれ納得です。戦う兵器と言えど女の子。お洒落したい心はよくわかります。

「理解しました。今度、私服の写真を撮らせてくれると嬉しいです！」
「ま、まかしとき。綺麗に撮ってや」

「ちよつと恥ずかしいけど、お願いしますね」

「お任せください！ それじゃ、青葉、ちよつと外の撮影に行きたいんで、失礼しますね」

「お、おう。ほなねー」

「そ、それではー」

そそくさと荷物を持って去る二人。何か怪しいです。そして青葉、きっちり送り主の会社名を記憶したので、手持ちのスマホで軽く検索してみました。

お二人が衣類を買ったのは、矯正下着のメーカーさんでした。特に、胸回りの矯正に定評のある。

青葉、見なかったことにします！

【夜】

夜になりました。午後の演習と出撃も特別な事なし。全て順調で良いことだと思いません。

青葉は今、談話室にやって来ています。

今日は重巡洋艦の高雄さん主催のアニメ上映会があるからです。

高雄さんは提督の趣味を理解するために、時々アニメを借りて談話室で見ているんですね。

最近では第六駆逐隊の子たちと一緒に鑑賞しています。

本日の作品は「魔法少女まどか☆マギカ」の第3話です。何でも提督に有名どころを貸してくれとお願いしたら、出てきたタイトルらしいです。

青葉も2話目まで一緒に見ましたが、今のところはちよつと敵のデザインが気持ち悪い以外はそれほどでもって感じですかね。

おつと、上映が始まります。駆逐艦の子たちとお茶を飲みながら、楽しく視聴ですよー！

……………。

あの、金髪の子が頭からぱっくりいっちゃったんですが……………。

これ、死んで……………なるほど、確かに話題性はありそうですね。

つてか、駆逐艦の子たちが涙目です。暁ちゃんとか震えて恐慌状態になってます。ちよつと刺激が強すぎたんじゃないでしょうか。

あ、高雄さんが顔を真っ赤にして談話室を飛び出しました。怒ってます、顔が真っ赤です、あと高雄さんも涙目でした。提督に八つ当たりしに行く気ですね、あれは。

提督、大丈夫でしょうか。

第六駆逐隊の子達には精神ケアとして間宮でスイーツを奢っておきますね。勿論、提督のツケで。青葉、お手柄です。

☆

就寝前、青葉の姿は執務室にあった。

秘書艦の球磨はおらず、室内にいるのは青葉とオタ提督（以下、提督）の二人だけである。

「青葉、今日も御苦労だった」

提督は青葉から渡された書類に目を通し、満足した様子で彼女に労いの言葉をかけた。

「任せて下さい！ 青葉、頑張りました！」

「うむ。今後も宜しく頼む」

青葉は毎日、提督に鎮守府の様子をレポートとして提出している。

これは、彼女の重要な任務である。

鎮守府が大所帯になるにつれて提督一人では艦娘達の状況が把握できなくなり、苦肉の策として信頼のおける艦娘に部隊の様子を報告させるようにしたのだ。

この任務は青葉だけでなく、吹雪や鳳翔といった何人かの艦娘にも依頼されている。

今のところ、試みは概ね上手くいっていると云えた。

「しかし、あの古鷹がどうしてお前にだけは厳しい対応をするのか以前から疑問だったのだが。ようやく理由がわかったよ」

「いやー、やっぱり下着姿を撮影しちゃったのは不味かったですねー。カメラを持って近づくくと、物凄いわ警戒されちゃいます」

「そうか。昔のことを気にしているのかと思っただが」

「それは大丈夫ですよ。あの古鷹さんですから」

「なら良い。ところで、その写真とやらは……」

「残念ながら、海の藻屑です」

「そうか……残念だ」

心底残念そうに提督は言った。実際、とても残念だった。

「それはそれとしてだ。青葉、一つ言っておきたい」

「何でしょう」

「以前、重巡以上に俺のツケで奢るのはやめろと言ったな」

「はい。言いつけは守ってますよ?」

「いやお前、駆逐艦を間宮に連れてった時、ちゃっかり一緒に食べてるだろ。しかも一番大量に。請求書を見ればわかるぞ。一日に何度甘味を食べるつもりだ」

「あ、いやー、せっかくですし、報酬代わりにいいかなーと」

「報酬代わりにそう安くはないカメラを買ってやっているだろう」

「……………」

「……………」

静かな緊張と共に見つめ合う二人。

珍しくマジ顔な提督と、誤魔化す笑顔の青葉。

先に動いたのは青葉だった。

海上でも見せたことのないくらいの高速で、部屋の出口に向かってダッシュした。

「あ、こらっ。逃げんなー！」

「青葉、離脱します！ すいません！ 反省はしてます！」

そう言い捨てて、青葉は部屋から消えた。

「全く……………」

提督はため息を一つついてから、受話器を手に取り、内線である艦娘を呼び出した。

「古鷹か。俺だ。青葉がまた余計なことをしてかした。悪いが捕まえてくれ。夜だから

川内を使っても構わん」

20分後、中破状態の青葉が執務室に連行される姿が目撃された。

オタ提督と年末年始

年が明けた。

オタ提督（以下、提督）の鎮守府においては今年も一人の艦娘も失うことなく新年を迎えることが出来た。

まこと、めでたいことである。

元旦の朝、提督は秘書艦の球磨と共に、港で心地よい朝日を浴びながらその喜びを噛み締めていた。

今日は出撃も演習も休みである。流石に当番に偵察はさせているが、いつもよりもリラックスできる状況なのは事実だった。

「提督、今年も年末もほとんど鎮守府にいたクマね。てつきり有明方面に行つて影も形も無くなるかと思つてたクマ」

「有明には行つたが、顔見知りには挨拶をしてすぐに帰つてきただけだ」

「意外クマ。現地にいったらバミューダ・トライアングルに消えるみたいに出てこなくなると思つてたクマ」

失礼な物言いの球磨に、提督は遠い目で答えた。

「俺も大人になったということだ。……買い物は全部秋雲をはじめとした参加者に依頼した」

「提督好みの薄い本を駆逐艦に買わせるなんて、深刻なセクハラになる気がするクマ」

「なに、全員勝手を知っている者だから大丈夫だ。それに、口止め代わりに一泊分の温泉もつけておいた」

「相変わらず豪快にお金を使うクマね」

「普段、金を使う機会がなくて貯まってるからな」

「悲しい職業病クマね」

「自分で選んだ道だからな。納得はしている」

そうクマか、と返そうと思った球磨だが、ここで一つの事実に気づいた。そういえば、秋雲達が泊まりで出かけると聞いて、重巡洋艦の高雄が引率についていくことになった気がする。提督がちょうど有明に出かけているタイミングだったし、大して重大な決定でもなかったので球磨が秘書艦権限で許可を出したのだ。

「提督、新年早々報告があるクマ」

「なんだ？」

「実は、秋雲達の引率に、高雄さんがついて行ってたクマ」

「ああ、今理解した。てか、見えてる」

見れば、温泉宿から帰宅したらしい高雄が、顔を怒りで真っ赤にしてこちらに猛然とダッシュして来ている。右手は握り拳だ。間違いない、秋雲達の引率として有明にも行った後だ。

「これは俺の落ち度になるのかな、秘書艦よ」

「これは球磨の落ち度なので素直に謝罪するクマ。ごめんなさい」

「そうか……」

全てを受け入れる穏やかな顔で、提督は全身の力を抜いてその時に備えた。

☆

高雄の説教は2時間あまり続いた。勿論正座で。

「提督、お疲れ様だクマ」

「我々の業界ではご褒美です」

「すごいけどキモいクマ」

「合わせてすごいキモい、か……。褒め言葉と受け取っておこう」

今年最初のご褒美から開放された提督は笑顔でそう言い切ると厳かに立ち上がった。ちなみに高雄は自室に戻っていった。これから自棄酒だろう。

「ちよつと見回りをしてくる」

「了解したクマ。報告なんかはまとめておくクマね」

「頼む」

短い受け答えの後、提督は冷えた空気と朝の日差しが合わさった心地よい空気の中、鎮守府の建物が並ぶ敷地内へと向かって行った。

☆

「やはり大変なことになっているな……」

提督がそう感想を漏らしたのは空母寮の前を通った時である。

艦娘の中でも酒飲みと大食らいが集まった空母娘の寮であるここは、年末年始における宴会の爆心地になっていた。

提督は年末から一度も足を踏み入れていないが、外からでも大変なことになっているのは十分にわかった。

何故なら、今この時も1階にある宴会場から、喧騒が聞こえてくるからだ。

「あいつら……いつから飲んでるんだ」

「そうですね、休みながらも3日目ってところですね」

「ぬおっ……ほ、鳳翔さん」

「提督、今年も宜しくお願い致します」

「お、おう。今年も宜しく」

気配もなく提督の話しかけて来たのは軽空母の鳳翔だった。鎮守府のおかんの異名

は伊達ではなく、空母寮の宴会に付き合っているはずなのに疲労の様子すらない。また、その手に持つ酒瓶が宴会の継続を静かに主張していた。

「あ、あいつらまだ飲む気なのか？」

「先程まで休んでいたんですよ。年が明けると同時に加賀さんと瑞鶴さんが喧嘩を始めて、隼鷹さんが飲み比べで勝負させたらそのまま全員酔いつぶれたので」

それでもまだ飲む気なのかよ……、と提督は戦慄した。というか、宴会の許可は出したがやりすぎだ、鎮守府の運営に支障が出ないだろうか。

「ご安心ください。行き過ぎたらこの鳳翔がちゃんと止めますから」

「鳳翔さん……」

年末からの宴会を手伝っている貴方が言っても説得力がありませんと言いかけたが、その言葉は何か飲み込んだ。味方は多い方がいい。

「まあいいや。鳳翔さん、程々にして切り上げてくださいね。それと、巻き込まれると不味いんで俺はそろそろ……」

退散しようとしたその時だった。

宴会場の窓から偵察機の彩雲が飛び出してきた。

「提督発見！ 千歳！ 突貫します！」

叫び声と共に軽空母の千歳が飛び出してきた。間違いなく酔っている。着衣が乱れ

ていて艶かしい肌が見え隠れするものの、それすら打ち消すめんどくさい泥酔っぷりだ。

「ち、ここで捕まるわけにはいかん！ 隼鷹頼んだ！」

叫びとともに、提督は懐からあるものを取り出して、宴会場の中に投げ込んだ。

美しい放物線を描いて宴会場に投入されたのは高級ウイスキーの瓶だ。

「ヒヤッハー！ 酒だ酒だー！」

窓から飛び出してきた隼鷹が瓶をキャッチし、そのまま流れるように空中で方向を変え、千歳を確保した。物理法則すら無視する酔っぱらいの機動に脱帽である。

「さあ、千歳く飲み直そうぜ〜」

「ちよつと、やめてよー」

「隼鷹、後は任せた！」

「お気をつけてー」

「鳳翔さん、本当に程々に切り上げさせてくださいよ！」

「承知しました」

叫びながらも後ろは振り返らずに提督はその場を走り去った。

☆

「無駄に高価な酒を常備していなければ即死だった……」

提督は息を整えながらそう述べ懐した。空母寮の予算に関してはとりあえず考えないことにした。何とかなるはずだ。掃除なんかは責任をもってやらせるが。

「駆逐艦寮は静かだな」

逃げた先は駆逐艦寮の前だった。もう早朝という時間ではないが静かなものだ。みんな大晦日で遅くまで起きていたからだろうか。

「まあ、当番以外は休みだし、元旦くらい寝ててもいいだら……」

「いや、私は起きてるぜ。司令官！」

横から元気よく話しかけて来たのは駆逐艦の深雪だった。

突然の声に対し、提督は驚くことなく応対する。

「お前は元気だな、深雪」

「なんだ気ついてたのか。驚かせようと思ったのに」

「さつきから見えてたしな。む、白雪も一緒か」

「司令官。あけましておめでとうございます」

深雪の横で静かに佇んでいた白雪が丁寧にお辞儀をした。見た感じ、かなり眠そうだ。大晦日で夜更かしした上に早朝から深雪に付き合わされているのかもしれない。

「ああ、今年も宜しく。二人共、ちゃんと休んでるのか？」

「深雪ちゃんが初日の出をどうしても見るって言って」

「夜明け前から待機してて、これから休むところさー！」

「そうか。風邪を引かないようにな」

「ありがとうございます」

「ありがとなー！ あ、そうだ、司令官！ せっかくあつたんだから、お年玉くれよー！」

びくん、と提督の全身が痙攣した。

お年玉、この三文字を提督は何よりも警戒していた。

仮に提督が艦娘にお年玉をあげるなどということになった場合、対象を駆逐艦に絞つただけでもとんでもないことになるからだ。

昨年の年越しは何とか誤魔化したし、駆逐艦娘達も空気を読んでその辺りを口にしないでいてくれた。

しかし、

「司令官ー。おとしだまーおとしだまー」

いたのだ、ここに。空気を讀まない輩が。

「せっかくだからお年玉くれよー、他のみんなには黙ってるからさー、ねえねえー」

「こいつ……全部わかって……」

深雪は提督や他の面々がお年玉について言及していないことをわかっていて、あえて口にはしている。恐ろしい奴だ。

「いや、しかしな、流石にそれをやると正直收拾が……」

「だからここだけの話。ここだけ。ね、私と白雪しかないんだから大丈夫でしょ」
「くっ……」

もはやこの緩やかな脅迫に屈するしかないのか。提督が女騎士めいたうめき声をあげた時だった。

「おとしだまー、おと……」

「深雪ちゃん……」

深雪の動きが止まった。

止めたのは、一緒にいた白雪だ。大人しいお下げ髪の彼女が常に無い雰囲気、深雪の後頭部を鷲掴みにしている。

「な、なんだよ白雪。わたしは……」

「それ以上司令官を困らせたなら……私怒るよ」

滅茶苦茶怖かった。深雪だけでなく提督まで震え上がった。

「司令官、すみません。深雪ちゃん、寝てないんでテンション上がったままなんです」

「いや、わかってくればいい。すまん、お年玉も出せない甲斐性無しで」

「いえ、流石にそれは無茶だってわかってますから。ねえ、深雪ちゃん？」

「ハイ、ソウデス。スママセンデシタ」

「そうか。気を使わせてすまん」

ロボットのめいた反応を示す深雪をあえて無視して、提督は感謝の念を示した。

「そういえば、吹雪は一緒じゃないのか？ よく三人でいるじゃないか」

「吹雪ちゃんならさつきまで一緒にいたんですけど、鎮守府の中を少し回って提督に挨拶してくるって言っていましたよ」

「む、そうか。執務室にでも向かったかもしれんな」

「司令官を探してるかもしれせんね」

「せっかくだし、俺も吹雪に挨拶してから休むよ。二人共、気をつけてな」

「はい。司令官」

「オキヲツケテ」

白雪に後頭部を掴まれたまま引きずられてゆく深雪を見送った後、提督は次なる場所へと向かうことにした。

☆

その後も軽巡洋艦隊の前を通ったら年末年始で昼夜の区別がなくなつた川内が神通にシメられるのを目撃したり、重巡洋艦隊で泥酔した高雄が鳥海に運ばれるのを目撃した。ちなみに戦艦は空母との宴会に合流したようだった。新年早々、予算関係で胃が痛くなりそうな出来事だ。

ともあれ、鎮守府内をひと通り見回って、執務室に戻ると、そこには先客がいた。

「明けましておめでとうございます。司令官」

駆逐艦の吹雪だった。彼女は提督にとつてとりわけ特別な艦娘である。

彼女は最初に出会い、共に戦っている戦友なのだ。

「ああ、今年も宜しく頼む。吹雪」

「宜しければお茶でもどうですか？」

「ああ、頼む」

ちやつかり自分の分のお茶を入れた吹雪と共に、テーブルを挟んで椅子に座ってお茶を一杯。

新年らしい、静かな空気が執務室内に訪れた。まるでたった二人でこの鎮守府に着任した直後のような静寂だった。

「吹雪と会って、二人で始まったここも大所帯になったな」

「最初は司令官の私物を見てうっかり砲撃しちやつたり、色々ありましたねえ」

「ああ、あれは死ぬかと思った」

実際、しばらく松葉杖で職務を行ったものだ。当時は辛かったが、今となつては過去の話だ。

あの静かで閑散としたこの鎮守府が、今では賑やかになったものだ。

「司令官、今年はきつといいことがあると思うんです」

「ほう？」

「例えば私が物凄く目立つような出来事があったり、さらなる改装があったり」

「そうか、すごいな（棒）」

「あ、信じてませんね！ 当たったら土下座ですよ土下座！」

「土下座くらい今すぐにでも出来るが」

「躊躇なすぎですよ、司令官！」

土下座しようとする提督を手で制する吹雪。相変わらず真面目だ。

相変わらずですね、と吹雪は苦笑していた。今のようなやりとりも懐かしい、まるで昔のままだった。

「司令官には本当に感謝してます。みんな無事にここまで戦ってこれましたから」

「そんなことはないよ。俺は見てることしか出来ない、ただの人間だ」

「そんなこと言っちゃ駄目ですよ。ちゃんと仕事はしてるんですから」

「そうか、じゃあ、そういうことにおこう」

そのまま二人共、お茶を飲み切るまで無言だった。

お茶を飲みきり、吹雪が片付けを始めたところで、提督が口を開いた。

「そうだ吹雪。近いうちに秋雲から駆逐艦寮宛に荷物が来るはずなんだが、何も言わず

に俺の部屋に……」

「燃やします。念入りに」

初代秘書艦は、提督の私物には厳しかった。

オタ提督と駆け抜ける改二情報

駆逐艦初雪は鎮守府の多くの艦娘達から怠惰な艦という印象を抱かれています。

実際、その印象は間違っていない。本人の戦意は決して高いとは言えないし、必要がなければ極力自室から出ない、外でみかけても彼女が前向きな発言をしている場面を見ることが稀だろう。

しかし、それはあくまでも印象の話だ。客観的に初雪の行動を観察すると、訓練や演習に出撃といった艦娘へ課された義務は十分に果たしており、日常のそれらの業務をこなしているということはそれなりに活動的な日常を行っているということの証左でもある。

結論を言うと、初雪は怠惰というのはあくまで彼女の言動などからくる印象に過ぎないわけである。非番の日以外ならば鎮守府内で彼女を見かけることは意外と多い。たとえば、本人がそれを望んでいないといえど仕事である以上そうならざるを得ない。

にも関わらず、鎮守府内で初雪を見かけると多くの艦娘はこんな台詞を言うのである。

「あれ、初雪ちゃん。今日は外に出てるのね」

この日、初雪にその台詞を投げかけてきたのは軽巡洋艦の阿武隈だった。初雪は彼女の発言が一方的な印象から来ているものにすぎず、現実との剥離が著しいことを指摘しようかと一瞬考えたが、やめた。めんどくさいからである。

それに、印象とは逆に自分が勤勉な艦娘だと思われるのも不味い。余計な仕事が回ってくる恐れがある。

だから、初雪はこう返答した。

「任務と遠征があつたから、仕方なくです……」

「サボってないなら何よりです」

笑顔で言いながら、阿武隈は初雪の向かいに座った。

今、初雪がいるのは食堂である。時刻は昼過ぎ、午前の仕事を終えた艦娘達がばらばらと訪れている。珍しいことに、初雪は一人だった。仲の良い吹雪、白雪、深雪などより初雪の仕事が終わる時間が遅かったためだ。

初雪も阿武隈も、今日の昼食はカレーうどんだった。

「他の人はどうしたの？」

「私だけ仕事が遅く終わったんで……」

「そっか……。いつも一緒だから気になつて」

「お気遣い無用です。……仲よしだから」

「いいなー。仲良し」

「阿武隈さんも、北上さんと……仲良し」

「ぶふおっ！」

阿武隈がむせた。阿武隈は重雷装艦の北上とよくじゃれあっているから、なんとなく言ってみたのだが、意外な結果だ。

「わ、私と北上さんは仲が良いわけではないのよ。向こうから一方的に絡まれてるとい
うか……」

「でも、阿武隈さん、いつも嬉しそう……」

「カハツ」

何故か阿武隈がテーブルに頭を叩きつけた。効果は抜群だ。何の効果かわからない
が。

「初雪ちゃん、この話はやめましょう。あんまり北上さんのことを話すと、怖い人がいる
でしょ？」

「大井さん……怖い」

初雪は恐怖で顔を引きつらせながらコクコク頷いた。北上は同じく重雷装艦の大井
と大層仲が良い。それは良いのだが、その大井という艦娘は北上が好きすぎてよく問題
行動を起こしているのだ。

「そ、そうだ。初雪ちゃんはもう知ってると思うんだけど」

「なんででしょう?」

口元のカレーうどんを丁寧に拭きながら、阿武隈は聞いてきた。

「吹雪ちゃんの改二が来るって話、本当?」

☆

初雪は鎮守府の廊下を走っていた。驚くべき事態だ。すれ違う艦娘が何事かと立ち止まるが彼女は気にしない。

彼女が走る理由、それは情報だ。

先ほど、食堂で得た情報を一刻も早く仲間達に伝えねばならない。先に仕事を終えた仲間達は、部屋にいるはず。

「グッドニュース!」

勢い良くドアを開けるなり、珍しく大声を出した。

「は、初雪ちゃん、どうしたの?」

「びっくりしたー、そんな大きな声出せるんだな」

「良かった、吹雪いない」

室内にいたのは白雪と深雪の二人だ。誰がいるかも確認せずに叫ぶミスを犯したが、吹雪はいなかった。これは助かる。

「? 吹雪ちゃんなら司令官のところに行つたよ」

「ほつ。良かった」

白雪の言葉に安心すると、深雪が怪訝な顔で聞いてきた。

「それで、何のニュースなんだ?」

「それが、吹雪に改二が来るって聞いて」

「!?!」

二人が驚きで身を固くした。

改二。それは一部の選ばれし艦娘に与えられる更なる改装。

改二が為された艦娘はより強力な性能と、個性を手に入れる。

これまでに何人かの駆逐艦に改二が施され、その度に強く、そして個性的になった。

吹雪は、駆逐艦に改二の噂が出まわる度に、ちよつと精神の均衡を失つたり、一喜一

憂したりしていた。

この鎮守府に着任した最初の艦娘であり初代秘書艦という立場にも関わらず、微妙に影が薄い存在であることを非常に気にしているのだ。

その吹雪に改二が来るとなれば、一番の仲間である初雪達のとるべき行動は一つしか無い。

「お祝い……しない」と」

「そ、そうだね。準備しなきゃ」

「お、おう。私達だけでもお祝いしなきゃな」

「とりあえず、私は間宮さんに行つてくる。伊良湖さんの最中……」

「じゃあ、私は酒保に行つてくるね。深雪ちゃんは？」

「私も酒保に行くぜ、色々買い込もう」

いつに無く素早く打合せた三人は、勢い良く部屋から飛び出して行つた。

☆

初雪は駆け足で甘味処間宮に到着した。

狙いは甘味の持ち帰り。今日の彼女にはちよつと一服という選択肢すら無い。

いつにない様子の初雪に驚いた間宮さんが話しかけて来た。

「あら、初雪ちゃん。慌てて来るなんて珍しいですね」

「ちよ、ちよつと急ぎの用件があつて。……伊良湖最中とシークリームを4つずつく

ださい」

「あら、そんなに沢山？ おやつ券足りるの？」

「引きこもつて貯めた分とみんなから預かつた分があります」

懐からおやつ券の束を出して言う。間宮さんが驚いた顔で疑問を口にした。

「あらあら。そんなに沢山なに使うのかしら？」

「ちよつと吹雪にいいことがあつたらしいから」

「い(い)と?」

「改二、来るらしいです」

その言葉を聞くなり、間宮さんは顔を明るくした。見ていてこちらまで嬉しくなる、朗らかな笑顔だ。

「まあ、それでみんなでお祝いなのね。仲良しで羨ましいわ」

「吹雪、大分気にしてたから」

「ちよつと待つててね、準備するから……あら?」

「どうしました?」

「最中はあるんだけど、シュークリームが」

そこで、話の途中で割つて入つてくる者がいた。

「それは先ほど私が頂いてしまったな」

「日向さん! あ、シュークリーム」

遠くから話に割り込んだのは航空戦艦の日向だった。

見れば一人でテーブル席につき、積み上げたシュークリームをむさぼり食べている。

「今日の出撃で私の瑞雲が大層活躍してな。一人静かに祝っていたところだ」

よく見ればテーブルの上に瑞雲が置いてある。日向は隙あらば瑞雲を推してくる人

物だ。それが艦載機を搭載できない駆逐艦であろうと例外はない。面白いが、めんどい人だと初雪は思っている。

しかし、今はそのめんどい人と話す必要がある。

「そ、そのシュークリーム」

「話を聞かせてもらった。2つしか残っていないが、良ければ差し上げよう」

「ほんとですか!」

話が一瞬でまとまった。これは瑞雲の活躍に感謝すべきかもしれない。

「今日は良い日だからな。なにせ私の瑞雲が活躍した上に吹雪の改二の話まで聞けた。そうだ、今日の瑞雲の活躍を……」

「その話はまた今度お願いします」

「では、せっかくだからこの余っている瑞雲を進呈……」

「駆逐艦には積めないから遠慮しておきます!」

「そうか、仕方ないな」

言いながら間宮にシュークリームを渡す日向。間宮は心得たもので箱に入れて包装を始めた。勿論、伊良湖最中も一緒だ。

「そういえば、吹雪の改二は具体的にいつになるんだ?」

「詳しくは……」

日向の疑問に答えられない初雪。そういえば、情報ばかり気を取られて、確証を得るのを忘れていた。

「なんだ、知らないのか。だったら提督に確認するといい。もしかしたら吹雪も知らないかもしれないしな」

「お、おう。そうですね。聞いておきます」

日向の言うとおりだ。この後、白雪達と合流した後、提督のところに行こうと決める。

「初雪ちゃん、出来たわよ」

「ありがとうございます！」

間宮さんから渡された甘味入りの箱は、丁寧に包装された上、リボンまでつけられていた。ちよつとしたサービスだ。

「いい感じだな。そうだ、ここに瑞雲を加えれば更に彩りが……」

「ありがとうございます！」

初雪はダツシユで間宮から脱出した。

☆

白雪、深雪と落ち合った初雪は、食べ物部屋に隠してから提督の執務室に向かった。念のため、吹雪の改二について確認にきたわけである。

菓子と情報、確認する順番が逆な気もするが、もし吹雪の改二が大分先の話だったと

しても、お菓子を食べる回数が増えるだけだから問題はない。三人はそう結論していた。

「どうしたクママ？ 珍しい三人組クマね」

執務室に入ると、オタ提督（以下、提督）と秘書艦の軽巡洋艦球磨がのんびりコーヒーなどを飲んでいた。見れば提督は片手に薄い本を持っている。ちようど休憩中だったらしい。

初雪達は提督の持つ本の表紙（肌色全開）をなるべく視界に入れないように気を使いながら、話しかけた。

「ちよつと、確認したいことがあって」

「確認クマか？」

「なあなあ司令官！ 教えて欲しいんだけど！」

「なんだ？」

「吹雪ちゃんに改二が来るって本当ですか！」

「……………!？」

その言葉に二人は何故かびくん、と痙攣のような反応をした。

そして無言でコーヒーに口をつける二人。提督など震える手で薄い本を机に置いた。ありえないことだ、イベント後の内容確認に命をかけているはずなのに。

まさかデマか、と三人は戦慄した。これだけ騒いでそのオチはないと思いたかった。

「……司令官、球磨さん？」

白雪の問いかけに、二人はしばし視線を交わした後、

「……この話は提督がするべきクマ」

「うむ……そうだな」

そんな短いやりとりをして、提督が立ち上がった。球磨の方もコーヒーを机に置いて、真っ直ぐこちらを見てくる。

「なんだよ二人共。そんなに改まって」

「もしかして、聞いたら不味い話でしたか？」

「三人共、落ちて聞いて聞いて欲しい」

「はい」

自身を落ち着かせるためか、少し時間を置いてから提督は話した。

「吹雪の改二の話は事実だ」

その言葉に、三人は胸をなでおろした。少なくとも、デマに踊らされたという最悪の事態は回避できた。

「……良かった」

「あんな反応するから、ガセかと思ったよ」

「それで、いつ頃の話なんですか」

「うむ。いいか、三人共、取り乱すんじゃないぞ」

「もったいぶらなくていい」

初雪の言葉に、白雪と深雪も首肯で同意する。

「先週のことだ、吹雪の更なる改装が可能になった」

「そ、それじゃあ!」

改装可能になってるのに、特に目立った話題にはなっていない。

なにせ吹雪は初代秘書艦だ。ある程度人を集めて改装を行うのだろうか。

そんな無駄な推測が初雪達の中に生まれたりもした。

「そして、その日のうちに改装は行われている」

「え?」

一気に三人の血の気が引いていった。球磨は沈痛な面持ちでこちらを見ている。提督の表情もいつになくシリアスだ。

「あの、それってつまり」

「つまり、今の吹雪はすでに改二になっているということだ」

「そんな。改二っていうのはもっとバードと見た目が」

「よく見れば変わってるぞ」

「……吹雪、何も言つてなかつた」

「本人はサプライズで皆を驚かせてやろうと改二になつたんだが……その、な」
「誰も気付かなくて落ち込んでるクマ」

初雪、白雪、深雪の三人は思った。

『これは不味い』と。

「あ、あの、吹雪ちゃんはどこへ？」

「今日も誰も気づいてくれませんでした、と寂しそうにここで呟いてから港の方に向かつたぞ。最近はいつてもあそこで黄昏れてる」

「司令官、なんでもっと早く教えてくれなかつたんだよ！ 吹雪が可哀想だろ！」

「なんかあいつも意地になつてゐるみたいだな。すまん」

「出来れば三人で上手く慰めてあげて欲しいクマ。ほら、提督」

「少ないが、これで美味しいものでも食べてくれ」

球磨に促されるままに提督が財布から現金を出した。結構な金額だ。
遠慮無くそれを受け取つた初雪が言葉を放つ。

「急いで港に行こう！」

頷いて、三人が港に向かつた。

一時間後、三人は港の片隅でひっそりと黄昏れている吹雪を発見。

その後、提督の金で間宮で豪遊した。

オタ提督と重要な会議

オタ提督（以下、提督）は真剣に仕事をしていた。仕事をしているのは提督だけではない。秘書艦の球磨に、手伝いで呼ばれた駆逐艦の吹雪までもが、執務室内でそれぞれ机に向かってしている。

彼らのいつにない仕事ぶりは近いうちにある大事な会議のためだ。

その会議は規模はそれほど大きなものではないが、参加者がちよつと面倒臭いではないくらいいメンバーという厄介なものなのである。

会議の結果次第で鎮守府の予算や今後の方針、艦娘の配置などに影響が出てしまうため、報告を行う側である提督達には入念な準備が必要とされる。

おかげで提督達はこの一週間、通常の業務に加えて資料作成に必死だった。

「俺って、割と仕事してるよな……」

「言われてみれば、あまりお仕事を投げ出すことはありませんね。でも、その印象が無いのは何故でしょう？」

「そんなの簡単クマ。日頃の奇行の印象が強すぎて、普段の仕事ぶりを誰も気にしなくなっただけクマ」

「そうか……そうだったのか」

「あ、じゃあ、普通にしていれば鎮守府の皆に好かれて人気が出たりするんじゃないですか?」

吹雪の発言に提督はまんざらでもない様子で返答する。

「む、そうか。そういう方向性も。……いや、みんなが金剛みたいになったら、それはそれで大変そうだから今のままでいい」

「進んでモテる可能性を捨て去り、雑な扱いを望むクマか」

「それが俺だ」

「自慢気に言うことではないかと」

「球磨としてはちゃんと仕事してくれるなら何でもいいクマ」

話しながらも資料の準備は進む。なんだかんだで定期的に発生するイベントなので、三人共、作業に慣れているのだ。

「よし、出来た。後は青葉の方なんだが」

「写真の準備は出来てるって言ってたクマ」

「青葉さん、こういう会議用の資料写真も撮影してるんですよね。皆にはあんまり言いませんけど」

感心した様子で吹雪が言う。重巡洋艦の青葉はこの鎮守府における記録係だ。出撃

や訓練など日頃の活動を写真で記録するなどで積極的に活動している。……積極的に過ぎてたまに問題も発生しているが。

「もつと堂々と取材をしてもいいと言ったんだが、今くらいの扱いでいいと言っていたな。よくわからん」

「提督と同じで変わり者なんだクマ。大義名分を得るとやる気が出なくなるクマよ」

球磨の言葉に提督は納得したようだった。

「なるほど。変態か」

「変態クマ」

「自分でいいですか」

「褒め言葉だからな」

「変態……」

そんな感じにちやつかり青葉を変態扱いしつつも（吹雪は疲れていて突っ込む気力も無かった）、何とか資料は完成した。

「後で青葉の資料写真を確認しておこう」

「了解クマ。会議の出席メンバーはいつも通りクマ？」

「その予定だ」

「あの、長門さんが一緒に行きたがってましたが」

「護衛としてはいいかもかもしれないが、あの堅物だとちよつと難しいところがあつてな」

会議の出席者は本部の重鎮だ。全員に取り扱い注意な要素があり、生真面目な長門がどこかで地雷を踏む可能性はかなり高い。柔軟な対応が出来る上に、何度か出席している球磨と青葉が同行するのが一番無難だろう、というのが提督の判断だった。

「吹雪達にはいつも通り留守番を頼むよ」

「了解しました!」

☆

会議当日、朝。提督と球磨、青葉の三人は鎮守府の正門に居た。

提督達を見送るのは吹雪と長門だ。二人は提督と秘書艦不在の鎮守府を任される立場である。

「では、行ってくる。吹雪、長門、すまんが後は頼む」

「留守は私達に任せて、安心して会議に行ってくるがいい」

「頑張ります!」

長門は力強く自信たつぷりに、吹雪は元氣よく言った。それぞれ二人らしい態度だ。

「わからないことがあつたら大淀を頼るクマ」

「青葉がいなくて古鷹さんが寂しがってたら慰めてあげてくださいね」

「それはないな」

長門のきつちりした否定の言葉を聞き、青葉がちよつと凹んだのを確認してから提督達は出発した。

正門に残ったのは、吹雪と長門の二人となった。

「行つたな……」

「行つちやいましたね」

提督達が視界から消えたのを確認し、二人は職務を果たすべく執務室へと向かい、歩き始める。

「しかし、私はともかく吹雪まで今回も留守番とはな」

「いつもあの人選ですよね」

「私は融通が効かないから同行させて貰えないというのはわかる。しかし、陸奥ならば平気ではないかと思うのだが……」

「今度聞いてみましょう」

「うむ。噂に聞く限りでは相当厳しいようだからな」

二人が聞いている会議の噂は恐ろしいものだった。

何気ない発言が出席者の地雷を踏んでしまい最前線送り。

やむを得ない事情で遅刻したにも関わらず、翌年の予算を削られた。

出席者同士の縄張り争いのとばちちりを受けて、鎮守府が一つ潰された。

他にも多数、「もうその会議を開くこと自体が害悪なんじゃないのか？」と言いたくなるような噂ばかりだ。

提督は二人の艦娘を引き連れて、毎回そんな会議に出席してはちゃんと帰って来る。本人は「みんなの活躍のおかげだ」などと言っているが、かなり頑張っているはずだ。吹雪と長門の二人も、それぞれが自分なりにそう解釈していた。

「長門さん、私、頑張ります！」

「うむ。微力ながら私も力を貸そう」

そんな決意表明をした上で、二人は業務を開始した。

☆

二人が鎮守府の臨時提督として働く一方、難しい会議に出席した提督達は……。

「いつも遠くからいらっしやって頂いてすみませんねえ」

「あ、どもー。何か待遇よくして貰って恐縮です」

「何故か来る度に部屋が良くなってるクマね……」

球磨と青葉は、司令部の一室に通されていた。

案内されたのはお金はかかっているが趣味の悪さを感じさせない部屋だった。

室内では座り心地の良いソファとテーブルいっぱいのお菓子や飲み物が二人を歓迎するべく用意されていた。

「提督さんの会議が終わるまで不便なく過ごされるように、とのことです。申し訳ありませんが、外出は許可できませんが」

世話係ということで紹介された女性がそう説明してくれた。

物凄い好待遇である。間違いなく鎮守府よりも快適な空間がそこにあった。

「それは構わないクマ。そもそも提督の護衛兼秘書として同行してきたのに、会議に出なくて大丈夫クマか？」

「事前に頂いた資料は十分精査いたしましたし、特別問題もありませんでしたので。提督さんだけで良いとのことですよ」

「神経すり減らさずにすむのはありがたいですけど、毎回これでいいんですかねー」

実はこの光景、毎回のことである。会場にある司令部にやってくると提督だけが会議室に通され、球磨達は至れり尽くせりの歓待を受けるのだ。

大変な会議に出てくるという部分に嘘はない。色々と大切なことが今日この場で決まっているのは間違いない。それにしても、噂とのギャップが物凄いのは事実だ。

「普段命がけて戦っている艦娘さんを、最大限もてなすようにと言われていますから

……」

「ありがたい話だクマ」

「ほんとですわねー」

もぐもぐと菓子などを食べながらそう漏らす二人。

扉の向こうでは提督が長い会議をしているはずだ。「寝ないように気をつけない」と言っていたから、会議の雰囲気も大体想像がつく。

こうなると正直、球磨と青葉以外の誰がついてきても同じだと思われそうだが、毎回メンバーが固定なのはちゃんと理由がある。

真実を知る者は少ない方が良いのだ。

「クマー。幸せだクマー」

「青葉、毎回会議の後は体重が増えているので複雑な気持ちです……」

数時間後、会議を終えた提督が球磨達のところに戻ってきた。

「無事に会議も終わったぞ。実にタフな内容だった」

物凄く眠そうだった。

お菓子と飲み物の攻勢で気持ち体形が膨らんだ球磨達は、あえてそこに突っ込まずに話を進めた。

「それで、この後はいつも通りクマか？」

「うむ。懇親会だ。明日には護衛付きで戻るから二人は先に鎮守府に帰っていい」

「了解です。では、これを」

青葉が懐から分厚い封筒を取り出して提督に渡した。球磨はそれを出来るだけ見な

いように視線を外す。

「いつも助かる……。鎮守府に戻ったらこれを吹雪達に渡してくれ」

提督が封筒を取り出し、球磨は視線を戻してから受け取った。

「了解クマ。一応聞いておくけど、球磨達の助けは必要クマか？」

「必要ない。これからは大人の男だけの時間だ」

提督は厳かに言い切った。彼は都合の良い時だけ、大人とか男とか言うタイプの人間だ。

「そうクマか。それじゃあ、帰るクマね」

「あ、お土産頂いちゃいましたんで、提督の分もとっておきますね」

「ああ、頼む」

男の顔で見送る提督を置いて、お土産を持たされた球磨達は鎮守府へと戻ったのだ。た。

☆

鎮守府に戻った球磨達は吹雪と長門が出迎えてくれた。

さっそく執務室に向かい、吹雪がお茶を入れてから雑談が始まった。

「二人とも、お疲れ様でした」

「難儀な任務だったようだな」

「長門さんと吹雪の方こそお疲れ様クマ」

「いやー、やつぱり鎮守府に戻ると落ち着きますねー」

「何だか満足気ですね、二人共」

「提督が帰る前に奢ってくれたんですよ。美味しかったですー」

「なるほど。そういうことですか」

「二人の分も預かっているクマ。これで間宮さんか鳳翔さんのお店に行ってくれのとこのクマ」

帰ってくる前に受け取った封筒を球磨が取り出した。中身は現金である。

「あいつは躊躇なく金を使うな。いや、上手い使い方をしているとは思うが」

「ふふ、他に使い道が無いっていつも言ってますけどね」

「提督は案外その辺しっかりしてるから大丈夫クマ。遠慮無く使うといいクマ」

「そうさせてもらおう。ありがたい」

「提督のお帰りは明日でしようねー」

さっそく土産を開封し始めた青葉が言った。彼女はまだ食べる気らしい。

「そういえば、いつもの懇親会に参加しているんですよね？」

「ええ、偉い人達と食事したりお酒を飲んだり、大変らしいですよ」

「そうか。大変そうだな。せめて参加できれば酌の一つくらいするのだが」

「け、結構難しい席みたいですよ。私達も帰されますし」

「でもでも。ちよつとくらいお手伝いしたいですよ」

「うむ。せめて提督を激励するくらいしたいものだな」

なるほど激励か、そう思った球磨は携帯電話を取り出した。

「ちよつと待つクマ。提督に電話してみるクマ」

「へ、平気なのか？ そんなことをして」

「秘書艦からの電話なら十分理由になると思うクマ」

それでも懇親会中は繋がらない可能性が高いクマが、と前置きしてから提督に電話をかけてみた。

驚いたことに着信した、更に通話状態に移行した。

「つ、繋がったクマ。あ、提督、電話して大丈夫クマか？」

球磨の問いかけに対する返答はなかったが、携帯のスピーカーからこんな音声がかえってきた。

『さあ、次はお待ちかね、我が鎮守府の大天使、古鷹さんのお宝画像ですよー』

『おお……古鷹たん、改二になって更に魅力的に……。このぴっちりインナーが健康的なエロスを醸しだしておるわい』

『写真はあくまで健全なレベルなのでバレても大丈夫な仕様になっています、ご安心を。』

ただ、拡散されるとまずいので現品限りです』

『ありがたい、ありがたい。これでしばらく生きていける。拡散などせんよ。しかし、健全写真なのが侘び寂びをわかっておるのう』

『褒められても何も出せませんよ。……それはそれとして、最近は大規模な戦争をしたがつてる連中がいるみたいですが』

『わかつておる。あれだけ若者が死んだのにちよつと勝つたくらいで調子に乗りおつて。……近いうちに動きがあるよ』

『お手数おかけします』

『て、提督君。私の頼んでいた飛鷹たんのお宝画像は？』

『こちらにございます。年末年始のどさくさで着てくれたドレス姿ですよ』

『おお、何という自然な笑顔……これは貴重だ。私達が直接行くとガチガチの軍人みたいな表情しかしてくれないからな……』

『彼女達はなんだかんだで軍属という意識が強いですからね』

『君のような人材は貴重だ。うむ……補給に関しては任せたまえ』

『ありがとうございます』

『……提督君。頼みがあるのだが』

『はっ、なんなりと』

『朝潮たんのスクール……いや、競泳水着の写真を用意することは可能かね?』

『……それは、かなりの高難度ですね。最悪、強権を発動する必要がありますが……』

『それはいかん!』

『っ!?』

『わしが求めているのは朝潮たんが自発的に競泳水着を着用し過ぎしている、ありのままの姿の写真だ。権力によって無理矢理など無粋の極みだ』

『し、失礼しましたっ』

『いや、君を責めているわけではない。責任感が強いのは結構なことだ』

『可能な限り、入手するように努めます。自然な感じで』

『それで良い。成功の暁には、わしに可能な限りの便宜を図ろう』

『了解です! それはそうと、私がこの日のために作成した生写真利用の改二記念、駆逐艦吹雪の抱き枕が……』

限界だったのでそこで通話を切った。

「ど、どうだった?」

ただならぬ気配を感じたらしく、心配気味に聞いてきた長門に、球磨はシリアス顔で答える。

「電話越しに現場の空気が伝わってくるくらい緊張感だったクマ。吹雪だったら失神

しかねないと思うクマ」

嘘は言っていない。

「ひええ……良かったです、ついていかなくて」

「凄い修羅場だな。あんな男だが、伊達に提督ではないということか……」

吹雪は怯え、長門は感心し誇らしげに今は無人の提督の机に目をやる。

あの場の参加者がかなりの権力者であり、会議と懇親会の内容次第で鎮守府に対する待遇が変わるのは事実だ。

そんな中で提督は実に上手く立ち回った。まさか時間をかけて上層部を片っ端からオタクにするとは思わなかった。着々とオタク化していく上層部を見て、球磨は初めて提督を恐ろしいと思ったものだ。

ともあれ、なんだかんだで提督は上手くやっている。

が、球磨まで一緒に人に言えない秘密を抱えてしまっているのは釈然としない。釈然としないが、納得するしかない。

これが大人になるといふことなのだろうか。

「青葉さん」

「なんででしょう?」

同じく秘密を抱えているはずなのに、どこ吹く風の青葉。

彼女にだけ聞こえるように呟く。

「大人って、めんどくさいクマね」

「人生楽しめてるなら、いいんじゃないでしょうか？」

物凄く割り切った返答を聞いて、彼女を少し見習ってみようかと思う球磨だった。

オタ提督とゲーセン通いの艦娘

休日です。

日夜深海棲艦と戦い続ける私達艦娘にも、ちゃんと休日はあるのです。

「巻雲さん、今日もお出かけですか？」

「はあい、ちよつと街の方まで行つてきます」

巻雲の所属する鎮守府は提督の方針もあつて、休日の艦娘の外出に関しては比較的緩い方向で制限されています。

話しかけて来ているのは同じ夕雲型駆逐艦の夕雲。巻雲は夕雲姉さんと呼んでいま

す。夕雲姉さんはロングの髪が綺麗な、駆逐艦とは思えないほど大人っぽくて優しい人です。

「ちゃんと時間までに帰るんですよ」

「了解です！ 大丈夫、巻雲は時間を守る子ですから」

「それはわかっていますか……」

「どうかしたんですか？」

「先日、門限を守れなかった陽炎型の子が、神通さんに物凄く訓練されていたのを見たから……」

「絶対に門限を守ります」

神通さんというのは軽巡洋艦の艦娘で、物凄く厳しい訓練をすることで有名な人です。普段は夕雲姉さんみたいな優しい美人さんなんですけど、訓練になると人が変わるのです。あれは鬼です、悪魔です。

「それじゃあ夕雲姉さん、行つてきます」

「気をつけてね、巻雲さん」

いつもの袖余りの制服ではなく、私服に着替えます。今日の巻雲は可愛らしいワンピース姿です、選んだのは夕雲姉さんです。というか、巻雲の私服は全部夕雲姉さんのチョイスです。もうちよつと大人っぽい服とか着たいんですけど、凄い顔で「まだ早いですわ」と止められてしまいます。まあ、いいんですけど。

ともあれ、いつもコソコソしている司令官様や青葉さんと違って、正門から堂々と、巻雲、休日に出撃です！

☆

鎮守府から少し離れたところにちよつと大きめの町があり、艦娘が休日に遊びに出かけるとなると大体そちらに行くことになります。

今日もその例に習って、巻雲は町に向かうバスに乗りました。

こうして、いつもと違う服を着て、お出かけするのは良い気分転換になりますね。

町の中心部の賑やかな場所から、少し離れたところで巻雲はバスを降ります。

そこには、巻雲の行きつけの店があるのです。

「着きましたあ。今日も皆さんいるでしょうか?」

着いた場所は、ゲームセンターです。司令官様が言うには「それほど大きな規模ではないよ」とのことでしたが、他の場所を知らない巻雲にとっては十分大きく見えます。

巻雲が一人で出かける休日は、大体このゲームセンターで遊ぶことに時間を費やされます。

きっかけは休日に出会った司令官様が案内してくれたことでした。このゲームセンターは司令官様の知り合いが良く遊びに来るのです。

巻雲はその方々にゲームを教わりつつ遊ぶうちに、何となく休日になったらこの場所に足を運ぶようになってしまいました。筋がいいって褒められたのも理由の一つです。

夕雲姉さんはちよつと心配していましたが（一応、秘密にしています）、趣味の合う仲間と楽しく遊ぶのは良い気晴らしです。

「皆さん、良くしてくれますしね」

そんなことを呟いて、店内に足を踏み入れました。

「あれ？」

入った瞬間に、店内の空気がいつもとちよつと違うことに気づきました。戦場？ という程ではありませんが、空気がちよつと張り詰めている気がします。いつもはもつと和やかな雰囲気です。皆さんゲームを楽しんでいるのですが。

「おお、巻雲ちゃん、久しぶりだねえ」

「あ、佐藤さん」

お店の一角、談話スペースになっているところから巻雲に声をかけてくれたのはモヒカン頭の佐藤さんです。

佐藤さん、休みの日はモヒカンサングラスに革ジャンと大分怖い格好をしているんですが、普段は真面目な格好の銀行マンをやっています。司令官様のお友達です。

「お久しぶりです。最近忙しかったのでご無沙汰してしまいましたあ」

「いやいや、心配したんだよ。最近姿をみかけないから」

「まったくだ、いや、あいつから巻雲ちゃんの無事は聞いてたがな」

「こんにちは。志村さん。」

談話スペースに入った巻雲に新しく話しかけてきたのは巨大アフロの男性でした。こちらも司令官様のお友達で、志村さんといえます。普段は公務員をされているそうです。

二人共、このゲームセンターでよく遊んでいるゲーマーで、巻雲にとっては師匠のような存在です。

談話スペースの椅子に座ると、志村さんが飲み物をくれました。ミルクティーです。巻雲の姿を見るなり、買っておいでくれたんでしょう。

「あいつは来ないのか？」

「司令官様は今日はお仕事です」

「大変だねえ」

「司令官様はなかなか外出できない立場ですから」

「そうだな。……しかし、司令官様か。あの野郎……」

「女の子にそんな呼ばれ方をしながら仕事するなんて、羨ましい話だねえ」

「？ 巻雲の呼び方が何か変でしたか？ 漣ちゃんって子なんかはご主人様と呼んでい

ますけど」

「なん……だと……」

「許せん。怒りが湧いてきた」

巻雲はなんとなく察しました。この二人の前では金剛さんや千歳さんや大鯨さんの話はしない方が良さそうです。

頂いたジュースを一口飲んでから、とりあえず司令官様のフォローを試みます。

「でもでも、たまに曙ちゃんや高雄さんに凄いお説教されてるから、そんなに良い目にあつてゐるわけじゃないと思いますよ」

「……ただのご褒美じゃないのかねえ、それ？」

「艦娘は全員、美女か美少女だからな。喜んでゐるあいつの姿が目には浮かぶ。やはり許せん」

司令官様、巻雲はフォローに失敗したようです。……気心の知れた仲間って良いですねえ。

「ま、まあ、そんな司令官様の話は良いとしてですね」

「そうだねえ、どうでもいい男の話だよ」

「全くだ、死ぬ程どうでもいい話で巻雲ちゃんの貴重な時間を浪費してしまった。心から謝罪する」

話題を変えることに成功しましたので、先ほど気になったことを聞いてみることにしました。

「さつきお店に入った時、なんかいつもと雰囲気が違うなーと思つたんですが。何かあつたんですか？」

「そ、そんなに違つたかい？」

「ちよつとだけですけど、緊張感みたいのを感じました」

「流石だな」

ちなみに二人共、巻雲が艦娘であることを知っています。司令官様はあれで信頼できる人にして艦娘に関する話をしないので、そういう人達ということですよ。

「巻雲ちゃんが見えなかったこの一ヶ月位で、ちよつとしたことがあつてね」
「端的に言うと、ゲーセン荒らしとでもいうべきか」

一ヶ月位前、巻雲が遠征任務で忙しくなった頃からのことだそうです。

このゲームセンターにちよつと変わった乱入者が現れるようになりました。

乱入者が遊ぶゲームは一番人気のロボット格闘ゲーム。最近流行のやつで、巻雲の得意なのです。

対戦ゲームですから乱入自体は珍しいことではありません。

問題は、その乱入者のプレイスタイルだそうです。

乱入者はかなりの腕前な上に、卑怯な戦法を次々と繰り出して、嫌がらせのようにプレイヤーを潰すそうです。

「一番酷かったのは、お小遣いを握りしめて目をキラキラさせながらゲームをはじめた小学生男子を瞬殺した時だったな」

「あれは酷かったねえ。3回連続でボコボコにして子供が半泣きになっていた」

「うわあ……」

それは酷い。巻雲にも情景がありありと伝わってきます。

「一番人気のゲームが頻繁にそんな荒らされ方をされるもんだから、店に活気が無くなってきたねえ」

「困ったものだ」

「むう、それは困りますね。それで、その乱入する人の特徴とかはあるんですか？」
「女の子だな、髪型はツインテール、いつも帽子を目深に被っているし、ゲームが終わるとすぐ帰ってしまうから話せないの、詳しくはわからない」

「それと、ゲームが滅茶苦茶上手いね。プレイスタイルはともかく、普通に対戦をやつての結果だから、何も言えなくてね」

「情けないことに俺達も負けてしまったよ、と二人は言いました。巻雲の師匠である二人が勝てないとは相当ですね。」

「困ったものです、と思っていると、店内の一角からざわめきが聞こえてきました。な、なんでしよう?」

「来たねえ……」

「今話していた女の子が来て、ゲームを始めたのだろう」

ゲームの筐体が置いてある方向から、悲鳴混じりの歓声が聞こえてきます。

「今日も駄目みたいだな」

「だねえ。また人が減るかなあ」

人が減る。それはつまり、このゲームセンターにとって良くないことです。

このゲームセンターで日々の戦いの疲れを癒している巻雲にとって、それは由々しき事態です。

どうにかしなければなりません。

「巻雲、その人と勝負します！」

立ち上がった巻雲を見た二人は、驚くこと無く、不敵な笑みを浮かべていました。

きつと、巻雲がこういう行動に出ることを予想していたのでしょう。賢い人達ですから、モヒカンとアフロですが。

「もしかしたら、巻雲ちゃんなら勝てるかもしれないねえ」

「え、巻雲がですか？」

「一ヶ月前の時点で、俺達よりも大分強くなっていたからな」

「う、そ、そうだったんですか」

「自信を持っていいよ、巻雲ちゃんは、このゲームセンターでも屈指のプレイヤーだ」

二人に励まされて、巻雲は全身に力が漲ってくるのを感じました。鎮守府近海に何度も出撃した後に得られる、あの感覚に近いです。

これなら勝てる、そう思わせてくれるテンションと共に、巻雲は二人に宣言しました。

「巻雲、頑張ります！ 勝ってきます！」
負けました。

「うう……巻雲は役立たずです。駄目な駆逐艦です」

「いや、いい勝負だったじゃないか」

「そんなに落ち込まなくても良からう……」

「でも、巻雲の後に挑んだ人達も全員やられて、帰っちゃいましたし」

巻雲は例の人とそれなりの勝負をしましたが、惜しい所にすら届かず敗北しました。その後、他の常連さんが何度も挑むも惨敗。

やる気を削がれた人達と例の人が帰ってしまい、店内は大分寂しくなっています。

「これは、ちよつと寂しいねえ」

「そうだな。あの子に悪意があるのかわからないのかもわからないが、良くないな」

「……………」

このままでは、本当にこのゲームセンターに致命的な影響が出てしまいます。
解決する方法は一つ、ゲームで強くなること。

選択の余地はありません。

「巻雲、特訓します！」

「特訓？」

「あのゲーム、確か司令官様が一式持っていました。1ヶ月、いえ、2週間程修行をして、必ず勝ってみせます！」

「お、おい、巻雲ちゃん。意気込みはいいけどさ」

「あの子が2週間後も通っている保証はないんだぞ？」

「大丈夫です！ 1ヶ月もネチネチと通い続けるような陰湿な輩ですから、きつと来ます！」

「お、おう。そうか。意外と言うねえ」

「二人共、2週間後を楽しみにしててくださいいね！」

そう言って、返事も聞かずに巻雲はお店を飛び出したのでした。

☆

鎮守府に帰った巻雲は、一直線に司令官様の執務室に向かいました。

そして、司令官様に事情を話し、夜に一緒にゲームをする約束を取り付けました。

たまたまその場に居合わせた金剛さんが凄い顔をしていたけど巻雲はスルーです。緊急事態ですから。

そして、

「すまん。アーケードのゲームは得意じゃないんだ……」

ゲーム一式は持っているものの、司令官様はあんまり強く無かったです。

卷雲の20連勝でした。ゲームセンターに通いすぎて強くなりすぎてしまったようです。

こういう時こそ頼りになると思っていた司令官様がこのザマでは、卷雲に勝ち目はありません。絶望です。いきなり万策尽きました。ちよつと泣きそうです。

「こんな、こんなんじや、司令官様の存在意義が無いじやないですか!」

「いや、俺はこの鎮守府の最高責任者が存在意義なんだが……」

「オタクなんだから、こんな時くらい活躍してくださいよお……」

「卷雲……お前、俺を何だと思つて……。いや、答えなくていい、何か怖い」

「このままじゃ、卷雲は自分の大切な場所を守ることが出来ません……ぐず」

「……………」

司令官様は泣いてぐずる卷雲を、瞬き一つせずにしばらくじつくりと眺めてから言いました。

「安心しろ。策は考えてある」

「策?」

「卷雲が休みの度にゲーセンに通っていることは夕雲から聞いている。それも詳細に」

「あの、怒られると思つてゲームセンターのことは夕雲姉さんに話したこと無いんですけど」

司令官様は巻雲の言葉を無視して話を続けました。

「佐藤と志村の二人にこのゲームを教わったなら、俺より上手くなっているのは想像に難くない。俺はゲーム以外にも色々手を出してるからそんなに上手くないしな」

「それは先程の20連勝で良くわかりましたが。どんな策があるんです？」

「この鎮守府で、一番ゲームの上手いやつを呼んである。もうすぐ来るはずだ」

「そ、そんな人が……。一体……」

誰なんですか？ と問う前に本人がやって来ました。

その人物は元氣よく部屋の扉を開けて入るなり、こう叫びました。

「メイジン・カワウチ参上!!」

軽巡洋艦の川内さんでした。夜だからいつも通り大分テンション上がってます。何よりサンングラスをかけているのが意味不明でした。

「おい川内、ふざけてんのか。それともついに狂ったか」

「ふわあ、川内さんが来るとは驚きですう」

司令官様と巻雲の反応を見た川内さんは、「チツ」と舌打ちをしてから再び力強く叫びました。

「違う!」

「ふえっ!」

「今の私は、メイジン・カワウチ！」

「メ、メイジン？ し、司令官様、川内さんがおかしいですよー！」

「お前、暇つぶしに見たアニメに影響されたな……」

後で聞いたのですが、川内さんはテンションが天井知らずに上がる夜になると誰も相手をしてくれないため、提督からアニメや漫画を見せてもらっているそうです。たまに影響されて迷惑を被っているらしいですが、今回もその一端ということでしょう。

「まあいいや。巻雲、こいつは今は川内じゃなくてメイジン・カワウチということにして
おけ。その方が話が早い」

「は、はい。メイジン・カワウチですね」

「そうだ。ゲームで強くなりたいものがあると聞いてやってきたんだが、まさか巻雲と
はな」

「はい。巻雲、強くなりたいです！」

「時間がないから厳しい訓練になる。このメイジンに付いてくる覚悟はあるか！」

「は、はい！ で、でも川内さん……」

「メイジン・カワウチだ！」

「メイジンは本当にゲームが強いですか？」

巻雲は川内さんが部屋に来てからずっと思っていたことをようやく口にしました。

「それは俺が保証しよう。ここ数ヶ月は騒いで怒られる前に俺の部屋でゲームをさせて、大人しくなってる間に神通を呼ぶという生活パターンになっていてな……」

疲れた様子で司令官様は言いました。大変な仕事です。

「その生活習慣のおかげで私のネットランキングは全国でトップクラスに入るまでになった!」

「お前どんだけやってんだよ。ちゃんと仕事してんのか」

川内さんは提督の指摘を無視して巻雲に問いかけてきます。

「どうする、巻雲、やるか!」

是非ありません。答えは一つです。

「は、はい! お願いします」

「あんまり夜更かしすると不味いから、日付が変わるまでな。それでも特別なんだからな」

提督の言葉に川内さんは振り返って抗議します。

「えー、提督ー、ケチなこと言わずに夜通しやろうよー」

「本業に影響が出たら困るだろうが」

「えー」

「巻雲に無茶させようとしたら迷わず神通に連絡するからな」

「はいはい、わかりましたー」

条件付きとはいえ、消灯の規則を破るのを黙認してくれるなんて、巻雲感謝です！

「司令官様！　メイジン！　巻雲、頑張ります！」

「よし、練習だ！」

「俺は執務室にいるから何かあつたら呼んでくれな」

巻雲と川内さんがゲーム機に向かい、練習開始です。

そして、司令官様は自室から出て行きました。なんでも、ゲーム中の川内さんは五月蠅いので執務室で寝ることになっているそうです。

☆

二週間がたちました。

巻雲と川内さん。いえ、メイジン・カワウチは時間の許す限り、ゲームの練習をしました。

流石に出撃や演習に影響を出すわけにもいきませんので、毎日とはいきませんが、相
当な時間を費やしました。

メイジンのゲームの強さは本物でした。流石は全国トップレベル、巻雲でも歯が立ち
ません。司令官様などミジンコ並に思える実力者でした。

そんなメイジンに毎晩特訓をして貰ったおかげで、巻雲の實力は確実に上昇し、最終的にはネットランキングでメイジンに近いランクまで到達したのです。

そして今日、巻雲は決戦のために旅立つのです。

「行つてきます！　メイジン！」

「よし、行つてきな！　あと、戻つてきたら川内でいいから。なんかこれ飽きてきた。疲れるし……」

「あんまり続けない方がいいと思いますし、良いと思いますよ」

「やっぱり？　まあ、気をつけてね。あと門限は守るようにね」

「はい、わかりましたー」

そんなやり取りの後、鎮守府発のバスに乗り、見送る川内さんに手を振りつつ、巻雲は二週間ぶりのゲームセンターに向かいました。

「おお、来たか巻雲ちゃん」

久しぶりのゲームセンターに入るなり、佐藤さんが出迎えてくれました。今日のモヒカンはピンク色です。銀行員つてこんなフリーダムな髪型が許される職場なんですね。

「佐藤さん。お久しぶりです。巻雲、訓練を重ねて帰つて参りました！　びしー！」

敬礼する巻雲をしばらく見つめた後、佐藤さんは言いました。

「こいつあブヒれる……じゃない。最高のタイミングだよ。今、志村の奴が対戦してる」

「本当ですか!」

「本当だ。すぐ行こう」

「わかりました!」

巻雲達がお店の筐体前に到着すると、ちょうど志村さんが負けたところでした。

心なしか自慢のアフロをしばませながら、申し訳無さそうに志村さんが言ってきました。

「巻雲ちゃんを驚かそうと、練習してから挑んだが、駄目だったよ……」

「志村……お前、本来は音ゲー専門の癖に……」

「俺も男だから、いいところを見せたかったのさ……」

「志村! 志村ー!」

そう言つて志村さんは崩れ落ちました。何でも激務の合間に無理してゲームをしてたための睡眠不足だそうです。

「巻雲ちゃん、志村の、志村の仇を取ってくれ!」

佐藤さんの願いに、巻雲は自信たっぷりに答えます。

「大丈夫。任せて下さい!」

巻雲は勝ちました。

勝つて勝つて勝ちまくりました。具体的に言うとなら36連勝です。

川内さんのおかげで巻雲は滅茶苦茶強くなっていました。せっかくだからと執念でリトライしてくる相手を徹底的に正面から叩き潰してやりました。

そして、流石にそろそろ巻雲も観客も飽きてきた頃に、筐体の向こう側から「ぶぎい」といううめき声が聞こえて、対戦は終わりになりました。

対戦相手は席を立つ様子がなかったので、せっかくだから「ふん、雑魚め」くらい言うてやろうと思ひ、巻雲は立ち上がって相手側の筐体に歩いて行きました。

向かいの筐体に座っていたのは、話に聞いた通り女の子でした。

髪の毛をサイドでまとめた上に帽子をかぶり、男の子のような服装をしています。

うつむいてきて顔はわかりませんが、背はそんなに大きくなく、駆逐艦娘くらいです。

「うう……こんなのつてないよ……」

「しつこすぎですよ。これまで散々暴れていた報いです」

「うう……あつ」

女の子は顔を上げて、巻雲の方を見るなり、またすぐにうつむきました。

「……………」

巻雲は少し考えてから、次の行動を起こしました。

「えいっ」

「ああつ！　なんてことをっ！」

頭の帽子を取りあげると、女の子はこつちを向きました。

「秋雲お！　なんでこんなことしてるんですかあ！」

帽子をとられてこちらに顔を向けているのは、陽炎型駆逐艦の秋雲でした。

巻雲とは因縁浅からぬ仲であり、毎日顔を合わせている相手なので、髪型を変えたくらいじゃ見間違いません。

「え、えへへ。ちよつとゲーム強くなったから、道場破り気分で暴れてた」

「あきぐもお……」

「ひつ。すいません！　すいません！」

巻雲が睨みつけたら秋雲が必死に頭を下げてきました。

「巻雲ちゃん、知り合いなのかい？」

「知り合いです。身内の問題なので、ちよつと待つててくださいいね」

事情を知りたがる佐藤さんを制して、巻雲は携帯電話を取り出します。

「あ、司令官様ですか？　巻雲です。はい、はい。ええ、勝ちました。ありがとうございます
ます」

「あの、巻雲さん？」

秋雲の質問は無視して、とつと司令官様に本題を伝えます。

「それで、犯人は秋雲でした。そこら中のゲームセンターを荒らしてたみたいです。

ちよつと神通さんに鍛えなおして貰いたいんですが」

「げっ。それだけはやめて！　お願い！」

携帯電話を取ろうと飛びかかってくる秋雲を押し返して話を続けます。

「はい。じゃあ、お手数ですがお願いします。司令官様」

そう言つて電話を切ると、そこには筐体に突っ伏して真つ白になった秋雲がいました。

☆

どうでもいいことだが、オタ提督（以下、提督）はどちらかというところコーヒー派である。そのため、英国生まれの戦艦娘金剛が襲来するなどの特別な理由がなければ、執務中の休憩時間は基本的にコーヒーを飲む。ちなみに自分で用意する。秘書艦の球磨の分もだ。

この日は、特別な理由がなかったので提督はコーヒーをいれた。

「ふう、ようやく落ち着いたな」

「おつきい作戦が近づくと大変クマねー」

忙しい職務の合間に生まれた和やかな空気。貴重な時間を提督達は過ごしていた。

「さて、短い休憩だが今週のアニメのチェックでも……おっ」

「どうしたクマ？」

「いや、神通が駆逐艦の訓練に出て行くのが目に入ってな」

「そうクマか。神通の訓練はちよつと引くくらい苛烈だから大変クマね」

「そうだな。よし、少し休んだらまたまた仕事だ。今期アニメ、ちゃんと見られるかなー」

「それが儂い夢なのが悲しいところクマね」

執務室から見える海。訓練に出発する神通達の一団の中に、死んだ魚の眼をした秋雲の姿があつた。

巻雲の通報をきっかけに無断外出も判明した秋雲は、一ヶ月程たつぷりと神通の訓練を受けることになったのだった（今年2度目）。

オタ提督と取材される艦娘

「提督、お知らせだクマ」

「うむ。……なるほど、取材か」

オタ提督（以下、提督）は、秘書艦の球磨から渡された書類に目を通しながら、これといった感慨も無い様子でそう呟いた。

深海棲艦との戦いが進行し、鎮守府の規模が大きくなり、情勢が安定してくるにつれ、こうした取材の申し込みは割と多くなっていた。

今回も「艦娘と鎮守府の様子をレポートさせてくれ」というテレビ局からのありがたい依頼だった。

「あー、面倒だなあ」

マスコミからの取材というと最初はテンションが上がったものだが、何度か経験した今となつては提督にとって面倒な業務の一つになっていた。

とにかく、取材というのは断りにくいのが問題だ。

この手の取材はだいたい「人々に艦娘のことをより知って貰うため」というお題目を抱えている、そうなると鎮守府としては断りにくい。大体、軍隊というのはある程度友

好的に見せていないと色々な方面から叩かれてしまうものだ。

鎮守府を運営していく上で世間とそれなりに上手く付き合っていることは必須なのである。

「どうするクマ？ 近いうちに大規模作戦があるクマし。適当な理由はつくと思うクマが」

「前にそう断ったら、きつちり作戦終わった後に取材の申し込みがあつたこともあるかな。時間を作ってどうにか……て、なんだこれ」

「どうしたクマ？」

「これを見ろ」

そう言って、提督は読んでいた書類を球磨に渡した。表計算ソフトで作成したと思われるその書類には次のようなことが書かれていた。

「えっと。新鮮な番組作りのためにメディア露出の少ない艦娘のレポーターでの出演をお願いしたく思います。つきましては以下の艦娘の方の出演はなるべくご遠慮したく」
書類には大和型、長門型、正規空母といった有名どころの艦娘が一通り網羅されていた。

「このリスト通りにやると戦艦と正規空母、それに神通や雪風といった人気者は大体駄目クマね」

「その通り。これまで取材や出演したことのある艦娘をほぼ全員網羅してやがる……並外れた執念を感じたぞ」

提督が若干の恐怖と共に呟いた時、執務室の電話が鳴った。

「はい、球磨だクマ。……提督、電話だクマ」

「はい。お疲れ様です。はい、はい。取材の件ですか？ それはもう滞りなく。ただ、一緒に届いたりリストが。はい、朝潮は出来れば自然にカットに入る感じに？ ……善処します。はい。ありがとうございます」

短いやり取りの後、提督は電話を置くと疲れた様子で言った。

「あの爺。ついに手段を選ばなくなってきたな。メディアにまで手を回しやがって。公私混同じゃないか」

「提督がそれを言うクマか……」

「さて、どうしたものか。案内役と寮とか食堂とかで説明する艦娘を別途に御希望みたいなんだが」

「重巡か軽空母の誰かに案内させればいいクマ。それに軽巡も駆逐艦も無難に仕事をこなせそうな子なら沢山いると思うクマよ」

「そうだな。この話がどこかで漏れる前にも決めてしま……」

台詞を最後まで言いかけて、提督は気づいた。

執務室のドアが、ちよつとだけ開いている。

「どうしたクマ？」

「いや、ドアが開いてるなーと」

「ほんとだクマ。気づかなかつたクマ」

「全く、こんな時に……」

言いながら立ち上がった提督が、ドアの前に立つた瞬間だった。

「アオバ、ミチャイマシタア」

それまで影も形も無かつた青葉が、ドアの隙間、その向こうに現れた。

「うおおお！ 青葉お前！ なんでホラー風の登場を！」

「普通に怖いクマ！」

青葉は提督と球磨に返事もせずに一瞬で姿を消した。まるで風のような。

ドアを開け放ち、通路を確認する提督。

「もう消えやがった、重巡の早さじゃないぞ」

「海の上であのスピードが出せれば相当クマね」

呆れた様子で言う二人の胸中は一緒だった。

「これは面倒なことになる。」

「なんか久しぶりだな。このパターン」

提督の呟きに、球磨は無言で頷いた。

☆

何があつても出来る限り食事はちやんと取るのが、この鎮守府の提督の方針である。

そんな方針に従つて提督と球磨は食堂にやつて来たのだった。

いつも通り日替わりランチを注文し、二人は席に着く。

「やはり、情報は既に広がっているらしいな」

「一時間もたつてないのに凄いクマね」

食堂内は微妙な緊張感をはらんだ空気で満ちあふれていた。

取材は珍しいものではないが、対応する艦娘は大体決まっている。しかし、今回はこれまでもとは違うのだ。

一度くらい取材を受けてみたい。自分もメディア露出するチャンスかもしれない。めんどくさい。巻き込まれたくない。今回は助かった、誰が取材を受けるんだろう。

そんな様々な情念が食堂内に満ちていた。あまり食事を楽しむ雰囲気ではない。

それを全て把握した上で、提督は昼食を食べながら取材に件について堂々と相談をはじめることにした。

度胸があるのではなく、開き直つただけである。

「それで、取材の件だが。球磨は適任者の候補はあるか？」

「メインで出張る艦娘クマね？　うちの妹とかどうクマ？」

「木曾以外全員駄目じゃないかそれ？」

「北上を使つて調子に乗せた大井なら上手くいくと思うクマ」

重雷装巡洋艦の大井は球磨の姉妹艦である。同じく姉妹艦の北上が大好きすぎることを除けば清楚なお嬢様系として押し通せなくもない。

問題は少しでも北上が絡んだ瞬間、全てが崩壊することだ。

正直、危険すぎる。どこで地雷を踏むかわかったものではない。

「大井は駄目だ。何がきっかけでいつもの病気になるかわからん」

「じゃあ、多摩だクマ。きつとソツなくこなすクマ」

「語尾が問題だ。視聴者に鎮守府を面白い場所だと思われると困る」

「球磨達に対する酷い侮辱だクマ。傷ついたクマ。それならいつそ提督が自分でやればいいクマ」

拗ねた感じで言い捨てた球磨の台詞に対して、提督は意外な答えを返した。

「実は前にやったことがある」

「本当クマか！　知らなかったクマ」

「本当だ。球磨が着任する前、艦娘が少ないこともあり、俺が出演したんだが……」

「上手いかなかったクマか？」

「いや、取材自体はすこぶる上手くいった。メディアの方とも良好な関係を築くことが出来た」

「それは良かったクマ。不吉な話し方をするから心配したクマ」

「問題は視聴者への受けが悪かったことだな。番組に対して「もつと艦娘を写せ」とか「おっさんを見続けるのは苦痛」といった苦情が寄せられてな……あれは辛かった」

「辛い思い出だったクマね」

ともあれ、これで球磨も提督出演という方針が駄目であることを把握した。

さてどうしたものかと考え込む二人、そこに話しかけてくる艦娘がいた。

「提督、お困りみたいですね。困った時の秘密兵器、伊401ですよー」

「伊401。帰ってたのか」

「鎮守府にいるのは珍しいクマね」

二人の前に現れたのはスクール水着を着た快活な印象を与える艦娘だった。

潜水艦、伊401である。

性格も実力も日常生活にも問題ない艦娘である。潜水艦部隊のエースでもあるし、取材を受ける人材として申し分ないだろう。

ただ一つ、フルタイムスクール水着という出で立ちを除いては。

「悪くないんだが……流石にその格好はなあ」

「ちよつと不味いクマ」

「そんなあ、提督指定の水着に何か問題があるんですか！」

「潜水艦とは言え水着姿の少女に案内させるわけにはいかん。つーか、前から思ってたんだが俺はその水着を指定した覚えはないんだが……」

「そうだったクマか。てつきり提督の趣味だと思つて納得してたクマ」

「良い趣味だとは思うが、俺にここまで堂々と指定する勇氣はない。それに伊401は秘密兵器でもあるわけだし、今回は見送りだ」

「うう……残念です。提督の力になれると思つたのに。……どうしても困つたら声をかけてくださいいね」

寂しそうに言いながら、伊401は去つていった。きつとすぐにどこぞの海へ出撃するのだろう。

「大変みたいですね、司令官」

「吹雪か」

次に声をかけてきたのは駆逐艦の吹雪だった。初代秘書艦であり、今でも何かと提督の仕事を気遣つてくれている。

「事情は把握しています。青葉さんから聞きましたから」

「後で捕まえたいって欲しいクマ」

「それは古鷹さんがやってくれました」

既に過去形になっているのが恐ろしい。

「そうか、古鷹には世話をかけるな」

「直接古鷹さんに言つてあげてくださいね」

「わかった。それはそれとしてだ」

青葉がどんな目にあつてゐるかは気にしないことにして、提督は話を進めることにした。

吹雪には頼みたいことがあるのだ。

「吹雪。駆逐艦寮の案内はお前に頼みたいんだが」

「えっ？ 一度でもメディアに出たことのある艦娘は駄目だと聞きましたが」

「そうだクマ。吹雪は結構取材受けてるから駄目クマよ」

「そうですよ、司令官」

吹雪は何だかんだで秘書艦だったのでメディア露出は多い方だ。出演の話が振られることはありえないはずだった。

「いや、確かにそうなんだが。実は、何故か吹雪だけリストから外れててな」

「ほんとですか！ 何かの間違いでは！」

「本当だ。球磨、書類持ってたよな。確認してみろ」

「わかったクマ」

懐から用紙を出して目を通す球磨。たつぷり三回はリストを眺めてから厳かに言った。

「……本当だクマ。何故か吹雪だけ抜けてるクマ」

「そ、そんな馬鹿な。何かの間違いです。今すぐ直して貰わないと!」

駆け出そうとする吹雪。

素早く提督がその肩を掴んで言う。

「何を言う。チェック漏れだろうが吹雪の存在を忘れてようが、どちらでもいい。むしろ好都合。吹雪の出演は決定だ」

「確かに、取材慣れしてる吹雪なら安心クマね」

「そ、そんなあ。一応有名人なのに」

「まあ何だ、頼りにしてるぞ」

「こんな時だけ言っても有り難みが無い台詞クマね」

こうして出演者の一人が決定した。

そして、その出演者が言う。

「あの、司令官。なんだか皆の視線が痛いんですけど」

「うむ。やたら注目されているな。どうしたことだ」

「……思うに。今の会話の流れから、この場で出演者を決めると思われたんじゃないクマか？」

「なっ」

提督に集まる視線。それには出演の可能性のある艦娘達の様々な思惑が自分に集中していた。

良くない流れだ、どう対応しても何かしらの禍根を残しかねない流れを感じる。

見れば、食堂の離れた席では空母と戦艦がニヤニヤしていた。絶対的安全地帯にいるゆえの余裕だ。提督の得意技でもあるが、凄むかつく。今後は気をつけようと提督は強く思った。

「くっ。不味いことになった」

「観念するクマ。とりあえず無難な人選をすればいいクマ」

「大丈夫ですよ、皆さん、良い人ですから」

「確かにそうだな。いつそダイスでも振って決めてしまおうか」

「それはやめるクマ。うっかり地雷を踏みそうな艦娘に当たる気がするクマ」

曙、霞といったあからさまに地雷を踏みそうな艦娘が提督の脳裏を過ぎる。考えてみれば千歳や大鯨など無駄に自分に対して好感度の高い艦娘も危険な気がする。公共の電波に乗せると不味い発言をしかねない。

「提督、前にダイス運が悪すぎて「俺はもう固定値しか信じない」って考えるようになった昔話をしてましたね。細かい意味はわかりませんが、運任せは良くないのでは？」

「確かに……いや、しかし、どうする」

テレビ出演を期待している艦娘も、その逆もそれなりにいる。その中で出来るだけ不満の出ない形で納める必要がある。難題だ。出来れば全員がある程度納得できる形で事態を収束させたい。

「ダイスは駄目か……いや、待てよ」

その時、提督の脳裏に閃くものがあつた。なかなか悪くない、魅力的な思い付きだつた。

「やはりダイスで決めようと思う」

「しよ、正気ですか！ ダイス運悪いのを今認めたのに！」

「提督、そこそこの付き合ひだったけど楽しかったクマよ……」

驚愕の吹雪と菩薩のような笑顔で別れを告げる球磨。

その二人にドヤ顔で提督は言った。

「安心しろ。ダイスを振るのは、雪風だ」

そんなわけで今回の取材の人選は、幸運艦と名高い駆逐艦雪風のダイスに委ねられ

た。

そして、雪風がダイスを振った結果、

総合案内役：最上

駆逐艦寮などの案内：吹雪

食堂など：由良

という実に無難な感じに今回の取材対応の編成は落ち着いたのだった。

オタ提督と製菓会社の陰謀の日

「あー、今日はバレンタインなんですねー」

のんびりと鎮守府の廊下を歩きながら、駆逐艦吹雪は一人そう呟いた。

今日は2月14日、バレンタインデーである。

鎮守府ではオタ提督（以下、提督）が着任して以来、「バレンタイン禁止令」が発令されて久しい。

うっかり気を利かせた艦娘達が提督宛に義理チョコを与えまくったら大変なことになるからという配慮と、提督の私情から出された命令である。

せつかくのイベントをと思わなくもないが、わからないでもない理屈なので大抵の艦娘は命令に従っていた。

ただし、何事にも例外は付きものだ。

「へーい、ブツキー！ 今日も元気ですネー！」

「あ、金剛さん。おはようございます」

「オー、ブツキー、提督がどこいったか知りませんカー？」

話しかけてきたのは戦艦金剛だ。どういうわけか、ごく最近、彼女は吹雪のことを

ブッキーと呼ぶようになった。何か心境の変化があったのだろう。

愛称で呼ばれるのは何か嬉しいし、金剛相手に詳しい事情を尋ねるのも無駄っぽいので吹雪はそのまま流している。

「今日はまだ見かけていませんが。どうかしたんですか？」

「勿論、私のバーニンググラブを渡すためネ！」

そう言つて金剛は上品な感じに包装された箱を出して見せた。

考えるまでもなく、チョコレートだろう。

いかに提督がバレンタインを禁止しても、彼女のような人物の衝動を止めるのは不可能なのだ。

「せっかく禁止したのにチョコ渡そうとする人が多いから、司令官は逃げたんだと思いますけど……」

「相変わらずシャイな提督ネー。草の根わけても探し出してやりますヨー」

「あはは……」

テンション高めな金剛が去っていく、後には苦笑いの吹雪だけが残された。

「お姉様は行ったようですね」

「うわ、いたんですか比叡さん！」

突然現れたのは金剛型戦艦の比叡だった。そういえば、彼女にとって今日ほど大事な

日はないだろう。姉に本命チョコを渡す算段をしているに違いない。

実際、艦娘同士のチョコの交換は禁止されていないのでそこら中で行われているのだ。吹雪も先程、何人かとチョコを交換した。

「あの、比叡さんもチョコを？」

「勿論です！ 姉様と、一応提督にもです」

そう言つて、二つのチョコを取り出して見せる比叡。一つは市販のもの。もう一つは不器用ながらも手作業でラッピングされたものだ。

「あ、この手作りのが金剛さん用ですね。相変わらずの姉妹愛ですねえ」
「違いますよ」

「え？」

「この市販のものが金剛姉様の分です。提督には、こっちの失敗作こそ相應しい……」

姉とは別ベクトルながらも、元気でテンション高めの彼女らしからぬ暗い瞳でそう言い捨てた。

比叡は気合いを入れて料理すると大変なことになると評判だ。金剛用に気合いを入れてチョコを作り、結果として提督用になつたのだろう。

「あの、あんまり司令官の体に悪い物は……」

「大丈夫。死にはしないから。む、お姉様が見えなくなりましたね。提督に接触する前

にどうにかしなければ！」

吹雪の言葉に適當に答えると、比叡は風のようにその場から去っていった。

「あー、まあ、大丈夫、かな？」

経験上、比叡のこの手の行動は成功率が低いので、吹雪は気にしないことにした。

☆

次に会ったのは正規空母の加賀だった。

場所は駆逐艦寮の近くだ。空母の艦娘と遭遇するのは割と珍しいエリアである。

「吹雪さん、提督はこちらにはいないようね」

「あ、加賀さん。加賀さんも提督にチョコですか？」

「どうやら加賀も提督を捜して鎮守府内を徘徊しているらしい。吹雪は彼女がここにいる理由を、そんな風に察した。」

「何を言っているの？ 規則で提督にチョコを渡すことは禁止されているでしょう」

「そ、そうですね。それじゃあ、何の用ですか？」

吹雪の問いに、加賀は無駄に誇らしげに宣言した。

「規則を破って提督にチョコを渡す子が沢山いるだろうから。お裾分けしてもらいに来
ました」

「そこは予想してるんですね……」

「勿論です。赤城さんもお腹を空かせて待っています」

「一航戦って……」

「何か問題でも？　そういえば、吹雪さんは赤城さんに憧れていたような覚えがあるのだけれど。チョココの用意などしていないの？」

「？　何のことですか？　空母の皆さんは勿論尊敬していますけど。私が憧れてるのは扶桑さん達ですよ」

鎮守府の制空の要である正規空母は尊敬している。赤城も加賀も立派な艦娘だ。

しかし、吹雪が憧れているのはどちらかといえば扶桑姉妹なのである。

吹雪の言葉を聞いた加賀は、膝から崩れ落ちた。

「……そんな馬鹿な。情報に誤りが」

「あ、なんか、すいません……」

頭を下げる吹雪。

対して加賀は素早く立ち上がり、短く咳払いをすると、いつものクールで済ました口調で言う。意外と切り替えが早い人なのだ。

「いえ、いいの。私の思い違いだったようだから。とにかく、提督宛のチョココがあったら私達に少し回してくれると嬉しいわ。特に赤城さんが」

「はあ、わかりました」

相変わらず、たまに態度と発言の内容が噛み合わない人だ。吹雪はぼんやりとそんなことを考えた。

☆

次に出会ったのは秘書艦の軽巡洋艦、球磨だった。

場所は食堂近く、執務室で仕事をしているだろう時間だったので、珍しいタイミングだ。

「吹雪、ここにいたクマかー」

「あ、球磨さん。どうしたんですか？」

「どうもこうも無いクマ。提督がいなくて困ってるクマ」

なるほど。珍しいタイミングで会うわけだ。

吹雪は球磨の事情を瞬時に把握した。

事情は違えど、彼女もまたバレンティンから逃げ回っている提督を捜しているわけである。

「やっぱり逃げましたか、司令官」

「察しが早くて助かるクマ。メールとかで指示は来るクマが、トラック泊地の件なんかで溜まった業務が滞って困るクマ」

球磨が話しているのは先日発生したトラック泊地襲撃のことだ。久しぶりの大規模

作戦になり、鎮守府にもまだその影響が色濃く残っている。特に提督の残務処理などが。

そんな中で行方不明になられて、球磨はさぞかし迷惑しているのだろう。

「明日になれば出てくると思うんですけど、今どこにいるのやら」

「全く、困ったものクマ」

「あはは。そうですね。そういうえば、球磨さんは提督にチョコをあげたりしないんですか？」

「こーう見えて、球磨は規則には従うクマ。秘書艦が率先して規則を破るわけにはいかないうクマよ」

「確かに、そうですね」

口調で誤解されがちだが秘書艦を任されるだけあって、球磨は意外と真面目なのだった。

「仕方ない。今日は提督無しでできるだけ仕事を片付けることにするクマ。提督は明日会ったらぶっ飛ばすクマ」

「て、手加減してくださいね」

「そこは大丈夫クマ。それじゃあ吹雪、頑張るクマよ」

「わかりました」

そう言つて球磨は去つて行つた。

☆

鎮守府の各所には提督の隠し部屋がある。言うまでもなくそれらの部屋には提督自慢のあれこれのコレクションが納められており、質も量も万が一艦娘に見つかったらちよつとただではすまないレベルだ。

そんなわけで提督は巧妙かつ慎重に隠し部屋を増設しているのだが、ある例外が存在した。

「パスワード。変えてませんよね」

吹雪である。

彼女は提督の私室の屋根裏部屋にある隠し部屋。そこにつけられた電子ロックのパスワードを入力していた。

提督との付き合いが長い彼女は、いくつかの隠し部屋とその入り方を把握していた。勿論、そのことを提督は了承している。無駄に付き合いが長いからこそその信頼関係だ。

「良かった。開きました」

入力したパスワードを受けて、電子ロックが解除されたのを確認し、吹雪は安堵の溜息をつく。

時刻は深夜、そろそろ日付が変わりそうだ。

提督は結局、バレンタインを完璧に逃げ切ることに成功した。

「こんばんは。やつぱりここにいたんですね」

「なんだ、来たのか」

「そろそろ日付も変わりますから。様子くらい見ておこうかと」

隠し部屋は外の様子が見える小さな窓と大量の段ボールがあるだけの、殺風景で狭い場所だった。その窓にしても、灯りが漏れないように暗幕が引かれている。

この部屋は提督が鎮守府で一番最初に作った隠し部屋だ。提督が鎮守府内を逃げ回る場合、最終的にここに来ることを、吹雪だけは知っていた。

くつろいでいたらしい提督の隣に座ると、吹雪に缶コーヒを一本くれた。

「チョコ、受け取ってあげればいいじゃないですか。金剛さんとか凹んでましたよ」

「すまないと思うが。下手に受け取って面倒なことにならないか心配だ」

「今更バレンタイン解禁とかしたら、大変なことになりそうですね」

「最初から軽く宴会でもする行事にしておけば良かったかもしれないな」

缶コーヒを開けて、飲みながら話す二人。

鎮守府が大所帯になり賑やかになるにつれ、提督と吹雪はたまにこの部屋で話すようになった。

そして、二人で鎮守府にやってきた頃の静けさと穏やかさに思いを馳せるのだ。

最初にたまたま吹雪がこの部屋を見つけ、エロ同人誌を読んでいる提督を殴り飛ばしたのも今では良い思い出だ。

「さて、川内も静かになつたようだし、そろそろ戻るかな」

「あ、ちよつと待つて下さい」

提督を呼び止めると、吹雪は包装された小さな箱を取り出した。

箱の中身は、チョコレートであることは明らかだ。

「おい、チョコは」

「もう日付変わつてますから。これはバレンタインのチョコじゃなくて、日頃の感謝の気持ちです」

提督はチョコの箱をしばし見て、苦笑しながら言う。

「そういうことなら、ありがたく貰つておこう」

「そうしてください」

提督がチョコを受け取ると、二人は部屋の外へと歩き出した。

抜け駆け気味にチョコを渡した吹雪だが、球磨だけはこの件を察していたように思う。会つた時、去り際に「頑張るクマよ」と言っていた。

そういえば、提督は逃げ回っている間、何をしていたのだろうか。

目的を果たした満足感とちよつとした好奇心から、吹雪は聞いてみることにした。

「そういえば、提督は今日一日何をしていたんですか？」

「コレクシヨンの整理だ。最近忙しくて薄い本を読む暇が無かったからな。それはもう久しぶりだから盛り上がって後半は仕事を忘れたね」

とりあえず、吹雪は提督を殴り飛ばした。

オタ提督と大量の花々

「これは困ったことになったな……」

「困ったことになったクマ」

鎮守府の庭でオタ提督（以下、提督）と秘書艦の軽巡洋艦球磨は頭を抱えていた。

二人の目の前には大量の花があつた。色とりどりの花束や鉢植えが文字通り山のよ
うに置かれているのだ。

「中に置ききれなかつた分はこれで全部のようだな」

「そうみたいクマね。そして、この外に出ている分はどうにかする必要があるというわ
けクマ」

「そうか……」

遠い目をして、お花畑と化した庭を見つめる提督。

鎮守府のこの状況は、以下のような手順で発生した。

一番初めは、ささいな善意だつた。南の方の小国の大使館から、艦娘達の活躍のおか
げで航路が安定したお礼として花が鎮守府に届けられたのだ。

南国のものを交えたその花々は結構な量だつたので、鎮守府の花壇に植え替えること

にした。勿論、作業は艦娘が行った。

そして、お礼として艦娘が花壇の植え替えをしている様子を撮影した写真を送った。良くなかったのは、その写真がうっかり雑誌に掲載されてしまったことだ。

深海棲艦と戦う艦娘はヒーローでありアイドル的存在だ。その外見もあつて人々からの人気も高い。

それが楽しそうに花壇の世話をしている写真が世に流れてしまえば、それ相応のことが起こる。

結果として、日頃の感謝の名目の下、鎮守府に大量の花が届くようになってしまった。悪いことではないのだが、とにかく量が問題だ。日々届き続ける花々は、確実に鎮守府のスペースを圧迫している。

提督と球磨は、その対処を相談しているところである。

「とりあえず、向こうで明石さん達が新しい花壇を作ってくれてるんで、植え替えできるやつは持つて行くクマ」

「すまん。頼む。じゃあ、俺は地道にこいつを処分するか」

そう言つて、提督は近くに置かれていたリヤカーに花束などを乗せ始めた。結構な量なので、花の移動販売に見えるレベルだ。売っている人物が適任とはいえないが。

「個室の方にあんまり持ち込んでない子がいるから、頑張つて引き取つて貰うクマよ」

「わかった。前向きに善処する」

「出来れば任せろと言つて安心させて欲しいクマ」

「ちよつと量がな……。ま、大規模作戦の合間で良かったぜ」

「もう花壇作りは飽きたクマよ……」

疲労を滲ませながらも、二人はそれぞれの仕事に取りかかるのだった。

☆

提督が最初に遭遇したのは重雷装巡洋艦の北上だった。

彼女は第六駆逐隊と一緒にいた。駆逐艦が苦手な彼女にしては珍しいことだ。ちなみに相棒の大井は見あたらぬ。その辺に隠れているか、本当にいないのか。提督には判断がつかなかった。

「お、やつほー提督。どうしたの？ 花なんて運んで。似合わないよー」

「貰い物だ。北上が駆逐艦の相手とは珍しいな」

「あー、なんか捕まっちゃつてねー」

「司令官、またお花を貰ったんですか？」

電の問いかけに、提督は頷いて答える。ちなみに、事の発端になった写真に写つていたのは彼女達、第六駆逐隊である。

「まあな。今みんなに配つてるところだ」

「なるほどねえ。大変だねえ」

「他人事みたいに言わないで、少し貰ってくれと嬉しいんだが」

「駄目よ提督。レディに花をあげる時はもっとロマンチックにしないと」

駆逐艦の暁がそう言うのと、北上がニヤリと笑いながら言つて来た。

「そうだねえ。提督がいい感じに花を渡してくれるなら貰つてもいいかなー、なんてね」

北上の言葉を聞くと、提督はポケットから出した本に目を通してから、リヤカー内の花束を一つ手に取り、言つた。

「敬愛する北上さんにこのダリアの花束を受け取つて頂きたい。花言葉は……感謝です」

「司令官、素敵よ!」

「なのです!」

淀みなく話す提督に対して素直に賞賛する暁と電。

北上は驚きの表情で花を受け取りつつ言う。

「おー、提督、あんな気持ち悪い感じの台詞がスラスラ出るなんて意外とやるじゃん」

「ぐふふ、こう見えて普段から鍛えているからな。しかし、今のやり取りを大井に見られてたら大変なこと……」

「あら、呼びましたか提督?」

大井がいた。当たり前のように。静かに、気配も感じさせずに。

「お、大井さん。あの、全部見て？」

「？ 何を怯えているんですか提督。さつきから一部始終見てましたけれど？」

「そ、そうか」

「それで、北上さんだけでなく、私にもお花は頂けないんですか？」

「お、おう」

再びポケットから本を出し、がさごと花を選ぶ提督。動きに少し焦りが見える。

今、話している相手は基本的には良い子なのだが、時々洒落にならないのだ。

「麗しの大井さんにこのイトシヤジンの花を。花言葉は……服従です」

「うふふ。ありがとうございます。……命拾いましたわね」

命拾いした提督は、その場を去ることにした。

☆

リヤカーを引く提督が次に遭遇したのは龍驤だった。

「なんや提督。ついにクビになって花屋でも始めたん？」

「失礼な。俺は今からワールドビジネスサテライトを見るなどして意識を高めようとして

いるところだ」

提督の反論に苦笑しながら独特のシルエットを持つ軽空母は言う。

「微妙にツツコミにくいボケをすんなや。花を満載したりヤカー引きながら」

「お前が洒落にならんジョークを飛ばすからだ」

「ふう。まあ、ええわ。見たところ、また花を貰ったみたいやな」

「うむ。正直、処理に困ってるので助けて下さい」

「提督のそういう正直なところが好きやで。あー、花なら元商船の二人組が喜んで寮中に飾り付けてくれるから、後で話しておくわ」

「飛鷹はともかく隼鷹さんもなのか。花から酒でも造るのか？」

マジ顔で聞く提督に呆れ顔で龍驤は答える。

「失礼やな。ああ見えて結構楽しそうに花の世話とかしとるんやで」

「ほう、興味深い。今度見に行こう」

陸に上がっている時は素面のことが少ない隼鷹が花を愛でている姿というのは非常に興味惹かれる出来事だ。

近いうちに空母寮に行こうと決める提督だった。

「あんまりおちよくって怒らせんようにな。そんじや、ウチは行くけど」

「おう。出来ればついでにここから花をいくらか持って行ってくれと助かります」

「はいはい。ほなな」

小さいひまわりの花束を受け取って、龍驤はどこかへと去っていった。

☆

その後も提督は花を配りながらリヤカーを引いた。幸いにも花の量は少しずつ減つていくが完売まではほど遠い状況だ。

このまま一日中鎮守府を練り歩いても全て捌ける可能性は低いだろう。

ただでさえ飽和状態のこの花々を処理し切るには何らかの工夫が必要だ。

流石に提督もその辺りは把握していたので、ある艦娘を頼ることにした。

「おお、摩耶。ここにいたのか」

「なんだよ提督。あたしに用なんて珍しいな。つて、なんだそりゃ。お花屋さんでも始める気かよ」

提督がやって来たのは重巡洋艦寮だった。

たまたま、中に入るなりお目当ての艦娘に会うことが出来た。幸運である。

重巡洋艦、摩耶。この少しヤンキー入った艦娘こそ、花の処分の鍵を握っていると、提督は考えていた。

「実質的に、もう花屋みたいなもんだ。というか、この花のせいで困ってるんだ。事情は知ってるだろ」

「あー、お花が贈られてくるのまだ終わってなかったのか。ま、悪いことじゃないけど、こうなると受け取る側も大変だよなー」

他人事のように同情してくる摩耶だが、そうはいかない。提督は一気に話を核心に持って行った。

「その通り。そこでお花に詳しい摩耶さんに良い案が無いか相談に来たのだ」

「はあつ。なんであたしがそんなことを。だいたいそういうのはもつと適任なのがいるだろーが！」

突然話を振られて若干キレながら叫ぶ摩耶。その姿はヤンキーそのもので、ちよつと怖い。

しかし、提督も伊達に鎮守府の責任者をしているわけではない。努めて冷静に彼は言い放った。

「いや、お前が一番の適任だと思う」

「なんでだよ！」

「これだ」

「なっ！」

提督が摩耶に見せたのは写真だった。

写真に写っているのは非番の摩耶と妹の鳥海だ。その中ではピンクの花柄ワンピースを着た摩耶が、常には見られない笑顔で花を愛でていた。

驚くしかない、決定的瞬間を納めた写真である。

「てめえ、どこでこんな写真を……」

「偶然見かけて思わず……な」

ちなみに、この写真の撮影に成功したのは重巡洋艦の青葉である。彼女はこの鎮守府でパララッチとしての才能を開花させつつある。

写真をこれ見よがしに摩耶にアピールしながら、提督は話を続ける。

「それで、お花屋さん大好き乙女の摩耶さんのお知恵をお借りしたいのですがねえ」

「ちつくしよう、ぶつ殺してえ。球磨の奴、よくこんなの秘書艦やつてられるな……」

「ああ見えて球磨は優秀だからな。つか、いやほんと、真剣な話、なんとかありませんかね……」

うって変わって真面目な口調で言う提督。

話の持つてき方はともかく、態度からシリアスなものを感じ取った摩耶は一応話題に乗ることにしたようだ。

「つたく、どうせなら鳥海にでも聞けばいいのに」

「それじゃ面白くないだろう？」

そんなこともわからんのかという顔をされて、再びこめかみに青筋を浮かべた摩耶が吼えた。

「マジでぶつ殺すぞ！　つか、いくらお花が好きでも沢山あった場合の対処方法なんて

知るわきやねーだろ。もう誰かよそにやれ！　よそに！

「なるほど。それだ」

「はあ。」

摩耶のやけくそ気味の発言に、思いがけず良い反応を返した提督は、そのまま「何故気づかなかった」とかいいながらぶつぶつと呟きだした。

「軍閥係のお偉いさんとか、鎮守府に関係する他の部署にもちよつと回してしまおう。実際俺達だけで戦ってるわけじゃないしな。そうだ、艦娘からのメッセージでもつければ……」

「おいおい、いいのかよ。鎮守府用にもらったもんだろ？」

摩耶の問いに、提督はしれつと答える。

「枯らしてしまうよりはマシだろう。一度鎮守府で受け取っているから目的は果たしているといえるし、まあ、なんとかなる」

「お、おう。そうか。ならいいけど」

頭の中で色々計算しだした提督に対して、いきなり真面目になられて若干戸惑いながら答える摩耶。

そして、真剣な顔のまま、提督が再び話しかけてきた。

「そうだ摩耶。頼みがあるんだが」

「な、なんだよ。あたしに出来そうなことか？」

「うむ。艦娘に罵られたというドMの集まりな補給隊があつてな。彼らにも花を贈りたいからメッセージカードを書いてもらえんか？」

摩耶は無言で提督を殴り飛ばした。

オタ提督と画策する艦娘

この鎮守府ではオタ提督（以下、提督）が隠し部屋を持っているように、艦娘達にも秘密の部屋が存在する。

「ヘーイ、雷、お待たせしたネ」

「待つていたわ、金剛さん！」

鎮守府の一室、極力外部に明かりを漏らさない工夫を施された部屋で、戦艦金剛と駆逐艦雷は待ち合わせをしていた。

「それで金剛さん、例のものは？」

「フフフ、ばつちりデース」

雷に答えながら金剛は彼女らしくない無骨なデザインのリユックサックを床に置いた。ドスン、と鈍い音が響いたことからそれなりに中身が詰まっているのがわかる。

「すごい……こんなにたくさん」

素早く中身を確認した雷が感嘆の声を上げ、これなら大丈夫ね、と彼女は付け加えた。「大枚はたいて青葉に持ってきてもらったデース」

リユッククの中に入っているのは提督のコレクションである薄い本だ。

この二人は、提督の好みを把握するために、薄い本のコレクションに手を出したのである。

ちなみに青葉経由で持ってきて貰い、後でこっさり返ってきて貰う予定である。金剛はそこまで含めて料金を払った。

「こ、これを読めば司令官の好みの女性がわかるのね……」

「そうデース。提督の女性の好みから夜の好みまでバッチリデース。グフフフ」

あの提督相手に何が二人をそうさせるのか問いたくなる行動力である。本人達としてはライバル達に差をつけるためにやむなくとった作戦なのかもしれないが、提督に好意的な艦娘以外が見れば「なにもそこまで」と言われる状況であろう。

「じゃあ、さっそく……」

ごくり、と喉を鳴らしつつ薄い本に手を出す雷。しかし、その手を金剛が止めた。

「金剛さん？」

雷が見ると、金剛は「雷用」と付箋の貼られた薄い本を持っていた。

「過激すぎる内容だと雷が危険ですカラ、青葉に事前に選別して貰いました。……分別しても内容はそれなりデース。覚悟はいいデスカ？」

一応、青葉や金剛的にも駆逐艦にエロ本読ませることに思うところはあつたようだ。ギリギリのところまで良心を發揮したらしい。

対して、雷は覚悟を決めた女の顔で言った。

「大丈夫。覚悟は出来てるわ」

数時間後。二人は提督秘蔵の薄い本を全て読破。

途中、内容がアレでアレすぎてオーバーヒートしかけたが、二人は並々ならぬ執念でその試練を乗り越えた。

「や、やり遂げたデース」

「うう……裸が……裸が……」

だいぶ心にダメージを受けた様子だ。

「そ、それで金剛さん、提督の好みだけど」

「……いっさらさっぱりわからなかったデース」

提督は作家買いするタイプなのだった。二人にとって残念なことに、提督は好きな作家の描いた薄い本を優先して購入するため、そこに女性の好みは現れにくいのである。

ついでにいうと好きな作家のタイプも「何となく気に入ったから」なので青葉が集めてきた薄い本の内容はエロやらギャグやらシリラスやら大変なことになっていた。

「オー、ゴツデス。私にどれだけの試練を与えれば気が済むのですか……」

「一体どうすれば司令官の好みの女の子になれるのかしら……」

落ち込む二人。

しばらくして、うなだれていた金剛が顔を上げて、座った目つきで言う。

「こうなったら最後の手段、アス」

「最後の手段？」

怪訝な顔をした雷に、金剛は目をグルグルさせながら宣言する。

「普段、提督の近くにいる艦娘から提督の好みを聞き出すアース！」

「そ、それよ金剛さん！　なんで気づかなかったのかしら！」

「当然ネー！　ライバルに頼るわけにはいかないからネー！」

秘書官の球磨、提督と秘書官をサポートする大淀などは一番提督と親しい艦娘といえる。

それは同時に提督争奪戦の一番の強敵であることも意味する。おいそれと頼るわけにはいかない。金剛が勝手にそう思ってるだけだが。

「そ、それもそうね。でも」

「もう手段は選んでられないネー！」

積極的にアプローチするも提督から芳しい反応を得られないので、金剛なりに焦っているのだ。

「そうと決まったら早速行動ネ！　花の命は短いから迅速に行くアース！」

「ま、待ってよ。私も行くんだからー！」

無軌道な情熱の塊となった二人が隠し部屋を飛び出した。

☆

軽巡大淀は提督と秘書艦を支援する立場にある艦娘である。そのため、居場所に当たりをつけるのはそれほど難しくない。

金剛達は資料室に一人入っていく大淀を発見し、素早く部屋の中に飛び込んだ。

「大淀さん、発見！」

「ナイスよ、雷！　へーい、大淀オ！」

「珍しい組み合わせですね。何か御用でしょうか？」

突然の来客に対しても余裕の態度を見せる大淀。普段から提督の奇行を見慣れてい
る故の対応である。

「ちよつと聞きたいことがあるネー」

「なんででしょう？」

「提督の女性の好みのタイプを知りたいの！」

「ふえ？」

二人の言葉は想定外だったらしく、珍しい声を出す大淀。それを気にせず、金剛達は話を進める。

「私達、提督のためにもつと自分を磨きたいネー」

「大淀さんなら提督と付き合っても長いし、知ってると思つて」

「ちよ、ちよつと待つて下さいね。あ、どうぞ、座つて下さい」

そう言つて、大淀は二人を近くにあつたテーブルに案内し、自身はお茶の準備を始めた。

「なるほど。理解しました。つまり、提督とお近づきになるために好みを把握したいと」
お茶とお菓子をひと通り味わいながら話を聞いた大淀は、ようやく得心したようだった。

「その通りネー」

「よろしく頼むわ!」

なぜあの提督に対してそこまで必死に、という顔を一瞬して、すぐに戻す大淀。恋愛は自由だ。

「そうですね。提督の好みのタイプは……えーと……えー……」

「もう、焦らさないでよ、大淀さん!」

「うーん……」

「もつたいぶるのは良くないネ!」

「……すいません。提督の女性の好みについて、全く思い当たりません」

期待に満ちた目で問いかける二人に対して、大淀は心底申し訳無さそうに言った。

どうやら、本当に心当たりがないらしい。

「なん……ですって……」

「どういうことネー！ 提督はよく皆と女の子について話してるはずネー！」

「それです。提督が話すのは主に、漫画、アニメ、ゲーム、小説の登場人物に関してなのです」

「はい？」

疑問顔の二人に対して、大淀はすらすらと答える。

「例えば、先日はメガネについて私に熱く語ってくれました。曰く、『眼鏡がキャラクターの根幹を成している場合、よほど特別な理由なく外すことは、何らかの心理的变化が提供されないと許容することは難しい。また、外見レベルを上げるためだけに最初から眼鏡を外すことを前提として作られているキャラクターには悪意を感じる。そういう輩は敵だと思っている。わかるな、大淀』という感じですよ。わかりません、と即答しました」

「司令官はたまに難しい話をするわね。全然わからないわ」

「私にもちよつと難しいネー」

提督の会話の内容は特に重要ではないのですが、と提督の発言を全て切り捨てた上で、大淀は言わんとする所の説明を続ける。

「つまりですね。提督が話して褒める女性像というのは基本的にフィクションの中の存在なんです」

「ふむふむ」

「ですから、残念ながら私も提督が現実の女性について語っている場面を見たことがありません」

「オーマイガー」

「なんて……こと……」

膝をついて項垂れる金剛と雷。

「大淀さんなら何か知ってると思ったのに。流星は司令官ね」

「難攻不落デース」

「お役に立てなくて申し訳ありません」

「謝ることじゃ無いデース」

「そうよ。私達が勝手に聞きに来たんだから！」

重ねて謝罪する大淀に、金剛達は素早く立ち直って返した。立ち直りの早さは二人の美点だ。

「しかし、提督の女性の好みを把握していいような艦娘ですか。可能性が高いのは、秘書艦の球磨さんなどではないでしょうか」

「確かに、確實そうね」

「クマーは提督の一番近くにいるライバルですが、この際四の五の言つてられませんネー」

大淀の話はいちいちもつともだと、頷きながら二人は次の目標を定める。

「球磨さんなら、ちようど執務室に一人でいるはずですよ。提督は見回りなので」

「チャンスね！ 金剛さん！」

「サンキュー！！ 大淀！ ちよつと執務室に行つてくるネ！ そして、提督のハートを仕留めるネー！」

「仕留めるだと死んじやうわよ！ 金剛さん！」

今が好機だとばかりに、どやどやと部屋から出て行く二人。

後に残された大淀は、疲れた様子で溜息をつくのだった。

☆

執務室についた金剛と雷は、ノック無しで入室した。

「失礼するわ！」

「へーイ！ 秘書艦！ 提督がいないのはわかつてるネー！」

「な、なにクマー！ 球磨の貴重な安息タイムが粉碎されたクマー！」

一人でコーヒータイムを楽しんでいたらしい球磨が、物凄いわびつくりしていた。

「ちようどお茶してるわ!」

「話を聞くのにちようどいいタイミングですネ!」

「こ、金剛さんと雷クマか。何か用クマか? 提督なら見回りだから、その辺にいまするクマよ」

来客者とその目的を素早く察知した球磨が若干面倒くさそうに二人にそんなことを教えてくれた。お前らの大好きな提督は向こうだから球磨を休ませるクマ、という感じだ。

「今日は球磨さんに用があつて来たの!」

「クマ!? クマに用だったクマか!」

意外な答えに驚く球磨に対して、金剛がどストレートな質問を投げつける。

「提督の好みの女性のタイプを教えるデース! 秘書艦ならそのくらい把握してるはずデース!」

質問を受けた球磨は、きよとんとした顔をしてから自身も質問で返してきた。

「提督の女性の好みクマ?」

「そうよ!」

「それは二次元クマか? 三次元クマか?」

「もちろん、三次元デース!」

「じゃあ、知らないクマ」

あつさりとした、そっけない答だった。

「……………」

「納得いかないという顔クマね」

「そりやそうよ!」

「提督と一番長い時間を過ごす秘書艦ならそのくらい何となく把握しているものじゃないんですカー? プライベートな話題だってあるはずデース!」

「ないクマ」

やはりあつさりとした、そっけない答だった。

「は?」

「提督と球磨はあくまでビジネスライクな関係クマ。仕事中に個人的な事情に踏み込まないことで業務を滞りなく進めているクマ」

「オ、オウ。意外とドライですネ」

「必要以上に関わらない、適度な距離を保つ。これが秘書艦を続ける秘訣クマ」

したり顔でコーヒーを飲む球磨。ちなみに提督のコレクションを勝手に入れていたりする。

「どうしよう、金剛さん…………」

「大淀が知らなくてもクマーなら知ってると思ったのに、残念デス」

あまりにも予想外の展開である。明確な答えがないにしろ、何らかの手がかりくらい掴めると思っていたのにご覧の有様だ。二人には提督がどんどん遠くなっていくように感じられた。大抵の艦娘にとってはむしろ望ましい話だが。

「なんだ、他の人にも聞いているクマか」

頷く二人。

「だったら吹雪に聞くのが良いクマよ。提督との付き合いが一番長いし、色々と余計なことまで知ってるクマ」

球磨の一言で、落ち込んでいた二人の顔に輝きが帰ってきた。

「オー！ それデス！ なんでブツキーのことを忘れてたんデショー！」

「ほんと、最初から吹雪ちゃんに聞けば良かったじゃない！」

吹雪本人が聞いたら傷つきそうな発言をしながら部屋を飛び出していく金剛と雷。

それを見送った球磨は、疲れた様子でコーヒーを口に運びながら、他人事のように呟いた。

「……吹雪も大変クマね」

☆

金剛と雷は、駆逐艦寮の庭で花の世話をしている吹雪を発見した。

すかさず二人は突撃する。

「見つけたわ！ 吹雪よ！」

「ブッキー！ 見つけたデース！」

「ふえ！ な、なんですか二人して！ 鬼気迫る様子ですよ！」

「ちよつと私達に付き合うデース！」

「大丈夫！ 悪いようにはしないから！」

ぐふふと笑ってない目で言う二人。ただならぬ様子に吹雪はちよつと怯え気味だ。

「そ、その顔で言っても説得力ありませんよー！」

「いいからいいから」

「四の五の言わずに提督の女性の好みについて話すデスヨー！」

「へ、どういうことですか？」

「つまりですネー」

庭に誰かが設置したベンチに腰掛けて、金剛と雷は事情を説明した。

「なるほど。それで、司令官の好みというのは二次元の話ですか？ 三次元の話ですか？」

「？」

「球磨さんも同じこと質問してきたわ」

「まず次元の話から始まるところが提督らしいデスネ……」

「いや、大事なところなので」

真顔で答える吹雪。冗談ではなく重要なところらしい。

「えっと、三次元の方の好みの話をお願いするわ!」

「わかりました。えっと……ちよつと待って下さい……はて?」

吹雪の反応に、二人は見覚えがあった。大淀は似たような反応をしたし、球磨など最初から「知らない」と切り捨てた、その時と同じ流れを感じさせる反応だ。

「もしかして、一番付き合いの長いブツキーですら提督の好みを把握してないとかいうオチですカー?」

「二次元なら色々と把握してるんですが……。例えば、おっぱいのサイズについて10回くらい熱く語られましたし。でも、三次元の方だとなにぶんインパクトのある記憶がないもので……」

申し訳無さそうにセクハラトークをされた過去について話す吹雪。彼女自身がセクハラだと思っていないところが毒されすぎなのだが、残念ながらそこに突っ込む者がこの場にはいない。

「そんな……吹雪ちゃんなら知ってると思っただのに」

「ごめんなさい。具体的な容姿とか性格のことになるとちよつと……あ、でも前にそれっぽいことを言ってたような」

「さすがブッキー！　ちゃんと知ってるじゃないですかー！」
「教えて教えて！」

最後の希望がもたらされたとばかりに明るい表情になった二人に対し、吹雪が語る。
「私が秘書艦をしている時に、万が一、司令官が結婚するような奇跡が起きるとしたらどんな相手かという話になって」

「奇跡が起きないと結婚できない前提なのね……」

「確か、「我ながら可能性が低い話だが、自分の趣味に寛容でのんびりまったり暮らせる相手がいいな」みたいなことを言ってた気がします」

「オー、それは……」

「ちよつと難しい話よね……普通は」

普通に考ええると「趣味に寛容」という提督の要望を満たすのは難しい。しかし、鎮守府内に限れば提督の理想を実現できそうな艦娘はたくさんいる。

残念ながら、二人にとってライバル達を引き離す材料になるとは思えない情報だ。

「駄目ネー。その話だけだとミー達がぶつちぎりで提督のハートを掴めるだけの情報にならないネー」

「残念ね……」

「あ、なんかすいません」

「後はのんびりまったりという部分ですけど。提督がのんびりしてる姿をあんまり想像できないデース」

「そうね。いつも忙しそうに蠢いているものね」

「え？ そうですか？」

「？ どういうことデース？」

「そういえば吹雪ちゃん、その話、いつ司令官としたの？ いつも忙しそうにしてるのに」

「えっと、確かここに来たばかりの頃、二人で釣りをしながらだったはずですよ。ここに来た当初は割と暇でしたから、司令官とのんびりする時間もあつたんですよ。あ、それと、今でも時間を見て二人で海岸を散歩したりするんですよ。提督、運動不足らしくて、気にしてるみたいなんです」

くすくす笑う吹雪に対して、金剛と雷は引きつった笑みで呟いた。

「どうしよう金剛さん、全部初耳なんだけど……」

「ジーザス……。なんかすごい負けた気がするデース」

ここに至つてようやく、二人は最も注意すべき艦娘の存在に気づいたのだった。

オタ提督と相談に来る艦娘

オタ提督（以下、提督）と秘書艦は常に一緒に業務にあたっているわけではない。鎮守府内の多岐に渡る業務を遂行するため、別行動するケースは割と多い。

この日などは、提督は朝から秘書艦の球磨と別行動であり、昼食後の休憩を一人執務室で楽しんでいた。

執務室の入り口にはライトが仕込まれたプレートが設置されており、提督と秘書艦の不在がはつきりとわかるようになっていた。今、提督が一人でいることは外からも一目瞭然だ。

コーヒーを飲みつつ穏やかな時間を過ごす提督。

提督は知っている、こうして一人で執務室にいる時は、いつもとちよつと違うイベントが発生するものだ。

「提督、少し相談があるんだが」

扉がノックされ、返事をする間もなく戦艦長門が入ってきた。

艦娘の個人的な相談。

彼女達は提督が一人で執務室にいる時を狙い、秘書艦には聞かれたくない個人的なこ

とを相談に来るのである。

「なんだ長門。大規模作戦も終わったし休暇でも欲しいのか」

第十一号作戦と銘打たれた大規模作戦が終わったのは先日のことだ。目の前の長門はビッグセブンの名に恥じない活躍をみせてくれた。

鎮守府の総出の作戦だったこともあり、長門のみならず全員に順次休暇を取るよう推奨している最中である。

「休暇はそのうち頂くつもりだが、今回は別件だ。色々考えたんだが、提督が一番の適任だと思ってるな」

「適任？」

珍しい話だ。いつもなら提督の行動に何かとケチをつけてくる長門が、よもや適任などという言葉を口にするとは。

ビッグセブンは、おごそかに相談内容を口にする。

「うむ。実は私もそろそろパーソナルコンピュータを買う時が来たと思うんだ」

スマホをろくに使いこなせていない長門とは思えない発言だった。

「長門がPCだと……。なんだ、通販でもするのか？」

「違う、世界の軍事情勢について調べるのだ」

「……なるほど。流星は世界のビッグセブんだ」

この際、「軍事情勢についてなら鎮守府に入ってくる情報が一番正確じゃないかな」とどど野暮なツツコミはいれない提督だった。

あの堅物の長門が彼女なりに新たな世界に飛び込もうとしている、それは素晴らしいことだ。

「とういうわけで、私に適当なパソコンを見繕うがいい」

「なんで上から目線なんだ……。まあ、いいか。それじゃあ、予算は？ ノートとデスクトップどっちがいい？」

「む？　む？」

基本的なことを聞いたつもりが高度すぎたらしい。提督はもう更に一段階、質問の仕方をおしくした。

「ああ、悪い。持ち運べるのと部屋に置くタイプ、どっちがいい？　予算はまあ、その後でいいだろ」

「そ、そうだな。持ち運べるので頼む」

「わかった。少し調べるから、明日にでも連絡しよう」

「流石に早いな。よろしく頼む」

提督との応答に満足したらしい長門が、ドヤ顔で頼もしそうな視線を送ってきた。多分、長門にこんな顔をされるのは着任以来初めてだ。

なんかドヤ顔がむかついたので、軽くカマをかけてみることにした。

「これで思う存分ペット動画を検索できるようになるな」

「全くだ。楽しみでならない……貴様！ 何故それを！」

凶星だったらしい。

「この前陸奥に見せて貰ってるのをこっそりと……」

先日、食堂でそんな場面を見かけたのである。

「提督！ 貴様まさか覗きか！ ビッグセブンの名のもとに成敗してくれる！」

大げさに怒る長門に対して、提督は冷静にツツコミをいれる。

「食堂で休んでる時に見かけたことを覗きというのかビッグセブン」

「くっ……。覚えてろ！ おすすめ機種の間接連絡を忘れるな！」

「はいはい……」

女騎士みみたいな呻き声に捨て台詞、そしてちゃっかり自分の要望を言い放ちながら離脱する長門を、提督は苦笑いで見送るのだった。

☆

続いて扉をノックして、短い応答と共に入室して来たのは長門と同じく戦艦だった。

「提督、ちょっと良いかしら？」

「ビスマルクか。どうかしたか？」

ドイツ戦艦、ビスマルク。海外から派遣された頼もしい戦力である。

派遣当初はなんかちよつとやさぐれ気味だったりした彼女だが、最近は大分態度に余裕が出てきた。日本に馴染んだのだろう。

「相談があるのだけれど」

「俺に出来そうなことなら出来る限り力になるぞ」

慣れてきたとはいえ文化の違いなどで苦労しているはずだ。提督は珍しく、下心無しで発言した。

「そんな大げさに構えないでいいわよ。簡単なことだから」

「そ、そうか。で、なんだ？」

「美味しいレストランを教えて欲しいの」

「レストラン？　なんでまた？　故郷でも恋しくなつたか？」

日本にやって来て一年以上経過するビスマルクだが、遅いホームシックにでもなつたのだろうか。

ドイツ料理を出す店を脳内検索し始める提督。

その様子を見たビスマルクが、提督の勘違いを指摘する。

「違うわ、私じゃないわよ。今度イタリアの子が来たでしょう？　その子たち向けよ」

第十一号作戦の結果、鎮守府には新たにイタリア艦が加わっていた。

つまり、ビスマルクの要望は新人向けのイタリア料理店ということだ。

なんということだろうか、一時期やさぐれ気味だったビスマルクが、新人の海外艦娘に気遣いを見せている。

「感動的だ。あのビスマルクが海外派遣の先輩として色々気を使うなんて」

「私を何だと思ってるのよ……。こう見えて、慣れない土地で暮らす大変さはよくわかってるわ」

「説得力があるな。そうだな、イタリア料理の店だと……」

イタリア艦娘向けの店を考え始めた提督に対して、再びビスマルクが指摘する。

「は？ 何言ってるの提督？」

「？」

「私が教えて貰いたいのは日本食のレストランよ。イタリア料理の美味しい店なんて、わざわざ提督に聞きに来るわけじゃないじゃない」

意味がわからなかった。遠く離れた異国の地で故郷の料理を食べたくなる、という想定の話ではなかったのか。

「ど、どういふことだ？」

ビスマルクはやたらと上から目線で提督に諭すように話し始めた。

「私は新しく来たイタリアの子達に出来るだけ早く日本に慣れて貰いたいの。わかる？」

「はい」

「そのためには、まずは料理。美味しい日本食を食べて貰うことが近道だと思ったの。日々の食事が楽しみになるのはとても大事なことなの」

「わかります」

よくわかる。最近のビスマルクは鳳翔の店で日本食を思う存分食べている。同じドイツ艦のプリンツ・オイゲンがちよつと引く程だ。

「特にあの子達はイタリア艦だから、食事から入るのが一番の近道だと思った。つまりそういうことよ」

「よくわかりました」

わからない理屈ではないし、下手に反論すると面倒な相手なので、提督は素直に返事をした。

「よろしい。なら、提督お勧めのお店のリストを作つて渡しなさい」

「あ、明日まででいいですか？」

「十分よ。なかなか早いじゃない」

「ま、まあ、この辺の店ならそれなりに知ってるし」

「期待してるわ。ふふ、楽しみね」

絶対自分も美味しい飯を食べたいだけだと思いつつ、提督は去りゆくビスマルクを見送った。

☆

更にドアがノックされ、短い応答の後に艦娘が入ってきた。

「提督さん、ちよつといいかしら」

「なんだ、由良か。これまた珍しいな」

やってきたのは軽巡洋艦の由良だった。落ち着いていて、あまり主張の強くない彼女が執務室を訪れるのは珍しい。

「あ、お忙しいなら後でも」

「いや、休憩中だ。まあ、座ってくれ」

提督が促すと、由良は来客用の椅子に座った。

「失礼します」

「それで、何か相談か？」

話を促すと、由良は悩ましげな様子で切り出した。

「はい。こんなこと、提督さんに相談すべきじゃないかもしれないんだけど」

「確かに何でも力になれるわけではない。しかし、案外話だけでも気楽になるものだ。秘密は厳守すると約束する」

執務室に来るのは珍しい艦娘、深刻な態度。これはただごとではない。

そう判断した提督は真剣な面持ちで発言した。レアな光景だ。

「では……」

「うむ……………」

「……………どうすれば、もっと目立てるんでしょうか？」

「はい？」

「いえ。なんか私、艦隊の中で影が薄い気がして。軽巡洋艦だと川内型とか天龍型とか阿賀野型に話題を持っていかれると思うんです」

「むう……………」

気のせいじゃないか、と言い切りにくい話だった。由良の影が薄いとまでは言わないが、他の軽巡洋艦が個性派揃いなのは事実だ。

「えっと、そうだな、五十鈴みたいに改二が来れば」

「いつ来るのよ改二。提督さんの力で何とかならない？」

「すまん。それは俺の権限の範囲を超えている。……………そうだ、長良みたいに軽いイメチェンを」

「出来るんならやつてるわ」

「うーむ。てか、この前の大規模作戦で出番があつたじゃないか。龍驤と組むと進みやすくなるやつが」

「何言ってるのよ。それを知つてて最上型を使つたのが提督さんじゃない。それにきつと機会があつても鳥海さんと龍驤さんで組ませて出撃したに違いないわ」

「す、すまん……」

ちよつと否定できなかつた。特に後半など提督自身ちよつとだけ「そうかも」と思つてしまった。

これで納得して話を終わらせるわけにもいかないの、何とかすべく提督は話を続ける。

「その、なんだ、由良よ。今後、潜水艦隊撃破の任務があつたら優先的に出撃を考慮するというところでどうだ？」

凄く曖昧な発言になつた。

「なんか玉虫色な発言されてる気がするんだけど。頑張つて言葉を選びましたつて感じ」

しかも一瞬で見抜かれていた。

「編成は状況に応じて流動的に変化する、断言はちよつとできん」

「ふーん。そうなの？ てつきり趣味かと」

「こう見えて私情は挟まない……あまり」

「あまり……ねえ。いえ、いいのよ、私も提督さんを困らせたいわけじゃないんだし。氣を使わせてごめんなさい」

「どうやら由良も出撃に関して不満はあれど、提督の方針そのものに反対しているわけではないらしい。」

「いや、謝ることはない。うちも大所帯になったから色々行き届かないこともあるだろう。しかし、あれだ、由良よ」

「なによ」

「軽巡洋艦はまだマシンなんだぞ、駆逐艦とか目立つ目立たない以前の問題だ。改二が来たからといって目立てるとは限らない」

「……………」

少し考えた後、遠い目をして由良は言った。

「……確かに」

改二が来て目立つ駆逐艦、改二が来なくても目立つ駆逐艦、改二が来てもあんまり話題にならない駆逐艦。

人数が多いと、ちよつとくらい変わったことがあつたくらいでは目立てなかったりする

るのだ。

「軽巡は人数がそれほどいないからまだマシなのかしら」

どこか悟った表情をして、由良は部屋から出て行った。

「艦娘も色々と大変だな……」

来客の途絶えた執務室で、一人コーヒーを飲みながら、提督はそんなことを呟いた。

ちなみに、艦娘の相談が連続したおかげで提督の仕事はすっかり遅延して、球磨に滅茶苦茶怒られたのだった。

オタ提督と秘書艦の一日

「んあー。よく寝たクマー」

軽巡洋艦球磨の朝は早い。鎮守府の朝の号令、いわゆる総員起こしは秘書艦である彼女の担当だからだ。この日も、彼女はいつも通り爽やかに目覚めた。

「多摩、総員起こしの用意クマ」

同室の姉妹艦である多摩を起こしにかかる。多摩は眠たげな様子で顔をこすりながらも何とか起床。

「むうー、了解にや。今日は二人にや？」

「今日は二人で十分クマ」

短い確認のやりとりの後、二人は総員起こしの準備にかかった。

「ジャーン！ ジャーン！ ジャーン！」

さわやかな銅鑼の音が鎮守府の朝にこだまする。

人類の未来の為に戦う乙女たちが、今日も天使のような無垢な笑顔で、背の高い門をくぐり抜けていく。

汚れを知らない心身を包むのは鋼鉄の艦装。見敵必殺、サーチアンドデストロイ。深

海棲艦は許さないのがここでのたしなみ。

もちろん、総員起こしに気づかないなどといった、はしたない艦娘など存在しようはずもない。

月に一回くらいの割合で行われる、球磨型流総員起こしの光景である。たまにはサブライズが必要と考えた球磨が始めたもので、何となく定着してしまったイベントだ。

一度などはティンパニーを用意して球磨型全員でクレッシェンド（だんだん強く）をかけながら叩いて行進したこともある。遠雷かと思つた長門が出てきて怒られたりしたが、それも良い思い出だ。

今日鳴らしている銅鑼はオタ提督（以下、提督）がどこかからか持ってきた逸品だ。艦かで豪快な音色が鎮守府の朝を知らせる様子は、なかなか刺激的である。

「今日はクレームつかなそうクマ」

「良いことじゃ」

艦娘たちの目覚める気配を感じつつ行進する二人が、重巡察まで来た所で、それを止める人物がいた。

「待っていたぞ、球磨」

「那智さん、どうかしたクマ」

「クレームにや？」

二人の前に立ちふさがったのは妙高型重巡洋艦の那智だ。性格タイプとしては長門のようなクソ真面目に分類され、クレームをつけてきてもおかしくない。

「クレームではない。むしろ、それを使って頼まれて欲しいんだ」

「クマ？」

「にゃ？」

「こつちに来てくれ」

案内された先は、那智の部屋だった。

「那智さんの部屋がどうしたクマ？」

「あれを起こしてくれ」

「あれにゃ？」

部屋の中を見ると、那智の姉妹艦である重巡足柄が爆睡していた。それも床の上で。

「察するに、大分荒れたあと、泥酔してから睡眠、というところクマか」

「察しが良くて助かる。そのとおりだ」

「よくあることクマ」

「すまん……」

そう言つて謝る那智は、見ていて気の毒なほど、沈痛な表情をしていた。

「枕元にこれがあったにゃ」

足柄の周辺を漁っていた多摩が持ってきたのは、DVDのパッケージだった。

「これは、映画クマ？」

「うむ。昨夜、足柄がレンタルしてきたこの映画を見たのだが、酷い出来でな……」

「それで自棄酒して、この有り様にや？」

「面目ない」

「よっぽど酷い映画だったクマねえ……」

ちなみに足柄が借りてきた映画はクソ映画を量産することで有名な監督の作品だったりする。足柄が事前に提督に一言聞いていれば、この悲劇は回避できた可能性が高い。今となつては全てが手遅れだが。

「さて、事情もわかったことだし、いっちょやるクマ」

「やるにゃー！」

「よろしく頼む」

多摩が銅鑼を構え、球磨がバチを構えた。那智はそれを悠然と見守る。

ジャーン！ ジャーン！ ジャーン！

荘厳な銅鑼の音が室内に響き渡る。柵や窓ガラスがビリビリ震えるほどの音量だ。

物凄く五月蠅い。

すさまじい騒音で、爆睡中だった足柄も流石に目覚めた。

「う……ん……」

「動いたにや！」

「パワーをあげるクマ！」

「全力でいけ！」

更に高まる銅鑼の音。そのあまりの音量に室内に埃が舞う。

「ああもう！ うるさいわよ！」

跳ね起きた足柄が叫ぶと同時に、一際甲高い音を発して、銅鑼の音が止まった。

「いったあー……」

最後の一音は、足柄が銅鑼を殴って、破壊した音だった。

「ど、銅鑼が壊れたにや」

「大破クマ」

「おはよう足柄、気分はどうだ」

那智の問いに、泥酔のち爆睡してたとは思えない爽やかさで足柄は答えた。

「おはよう那智姉さん。あの音は球磨達だったのね。気分？ 寝てスッキリしたから悪

くはないけど……」

騒音に晒されたとは思えない回答である。

「足柄さん、手は大丈夫にや？」

「手？ えっと……なんかズキズキするんだけど……」

「これは、怪我してるクマね」

「小破といったところだな」

冷静に状況を観察した球磨と那智の判断で、足柄はそのままドックへ連れて行かれた。

☆

本日、理由あつて提督は休みである。そのため、秘書艦の球磨は基本的に一人で行動することになっていた。

時刻は昼、食事を済ませて業務に戻ろうとしたところで、珍しい光景に出くわした。

練習巡洋艦の香取と、響、雷、電の暁を除いた第六駆逐隊の面々がいた。不思議なことに、駆逐艦三人は死んだ目をしながら香取に連行されているのである。

「おや、香取さん、どうしたクマか？」

球磨の声に反応した香取は、駆逐艦達の様子とは裏腹に陽気に答えた。

「あら、球磨さん。ちょうど良かった。暁さんを見かけなかったかしら？」

「暁ならさつき走ってるのを見かけたクマが、どうかしたクマ？」

「どちらへ逃げたか教えて頂けます？ どうやらこの子たち、遠洋練習航海をお望みなようです」

香取の言葉を聞いた後、もう一度三人を見てみた。全員、小刻みに震えながら何かに絶望している。明らかに何かやらかした後だ。

「とてもそうは見えないクマ……」

「嬉しくて声も出ないんですよ」

香取の声から有無を言わせぬ迫力を感じたので、球磨はこれ以上追求するのをやめた。

「まあいいクマ。暁ならあっち行ったクマよ」

「ありがとうございます。それでは、お仕事の邪魔をして申し訳ありません」

「そんなに気にすることないクマよー」

香取と連行される駆逐艦三人が見えなくなるまで、球磨は見送った。

そして、

「それで、何をやったクマ」

すぐ側の部屋に入り、隠れていた暁に話しかける。

「そ、それが何が何だかわからないの。私、私……ほんと怖くて」

暁は泣きながら取り乱していた。

実は香取に遭遇する直前、この状態の彼女に球磨は遭遇していた。尋常ならざる様子だったので匿ってみたのだ。

香取はかなり怒っていた。あれをどうにかするには、事情を知っていないとどうしようもなさそうだ。

「泣いてても解決しないクマ。あれはちよつとやばいレベルで怒ってたクマ。妹達が危ないクマ。球磨も手伝ってやるから事情を話すクマ」

「グス……球磨さん、ありがとう。流石は秘書艦ね」

そう言いながら暁は泣き止んだ。少し落ち着いて来たらしい。

「それで、何があつたクマ？」

「それが、よくわからないの。みんなで一人前のレディの話をして、香取さんの話題になつたの」

「ふむふむ。確かに香取さんはそんな感じクマね」

「それでね、たまたま香取さんが通りかかったから、暁は言ったの」

「何を言ったクマ？」

話が核心に迫っている、そんな気がした。

「私、香取さんみたいな、立派な熟女になるわ！　って。そしたら鬼のような形相で襲いかかってきて……」

「……………」

「どうしたの、球磨さん？」

頭を抱える球磨に対して、暁は怪訝な顔で問いかけてきた。

全てを理解した球磨は、優しく教えてあげる。

「暁、今後そういう話をする時は、淑女、と言うクマ」

「? そうなの? あんまり変わらないんじゃない?」

「かなりの違いがあるクマ。まったく、しようがないクマねえ……」

事情は飲み込めた。大したことだが、大したことではなくて良かった。後は香取に説明して暁から謝罪させれば良いだろう。

「球磨さん、響達、本当に大丈夫かしら?」

「香取さんは鬼じゃないクマ。悪意が無かったことと、純粋な間違いだったことを話して謝れば許してくれるクマ。とはいえ、逃げた罰で遠洋練習航海を一回くらいするかもしれないクマけど」

球磨の言葉に、暁は反省する様子を見せながら答える。

「確かに、逃げたのは悪かったわ」

「訓練は悪いことじゃないから、一回くらい我慢するクマよ」

その後、何とか誤解を解いた後、遠洋練習航海に出発した香取と第六駆逐隊を見送つてから、球磨は業務に戻った。

☆

夜だ。球磨にとって、この日最大の仕事の時間がやって来た。

「さて、いよいよよこの仕事をする時が来てしまったクマ」

扉の前で眩く球磨。彼女は今、提督の私室の前にいる。

鎮守府の最高責任者である提督は長期休暇中である。直近の大規模作戦の際、休まず働いていた代休だ。

球磨や他の艦娘に業務を任せて連休に突入した後、初日に出かけて以来、提督の姿は目撃されていない。

休暇は明日まで。そして、休暇終了前日に、部屋に起こしに来て欲しいと、球磨は頼まれていた。

秘書艦である球磨ですら、連休中の提督のスケジュールは把握していない。プライベートシーは尊重するタイプだ。

「提督ー、いるクマカー」

返事がない。

「ていとくー！ いるクマカー!!」

やはり返事がない。

ドアの前で佇んでいると、話しかけてくる艦娘がいた。

「球磨さんじゃないか。何を騒いでいる？ 提督は休暇ではないのか？」

「磯風クマか。今日は提督を叩き起こす日クマ」

話しかけてきたのは駆逐艦の磯風だった。

「休日にもで秘書艦に仕事をさせるとは、意外と横暴だな」

「横暴じゃないクマ。連休に入ると提督は曜日の感覚がなくなるまで趣味に時間を費やすから、球磨が現実引き戻しに来る必要があるクマ」

「……なるほど。秘書艦も大変なのだな」

提督のスケジュールを把握していない球磨だが、提督がどういう状況になっているか大体想像はついている。

恐らく連休初日に出かけて入手した破廉恥な品物で、全力で人生を謳歌しているのだろう。自分の立場も現実も、忘れかけている可能性が非常に高い。

「ま、これも仕事クマ。しかし、困ったクマね」

「どうかしたのか？」

「返事がないクマ。日が暮れた後なら起きているはずクマが」

「……ふむ、不味いんじゃないか？ 遊びすぎで、そのまま倒れたとか。あの提督ならあり得ると思うんだが」

「……………」

否定できなかった。うっかり干からびていたりしたらコトだ。

表情に出ていたらしく、事態を察した磯風が言う。

「どうする、ドアをぶち抜くなら手伝うが？」

「いや、合鍵持つてるから大丈夫クマ」

プライバシーとか言っている場合ではないので、迷わず合鍵を使って、ドアを開けた。

「……提督、いるクマか？」

「司令、どこだ？」

部屋には電気がついていた。

室内は本棚を始めとした収納が非常に多いものの、小奇麗に整理されており、見通しは悪くない、

部屋の奥のテーブルの上にはペットボトルやカップ麺などの即席食品が散らかっている。

そのテーブルの辺りに、蠢くものがあった。

「……く、球磨か」

提督だった。

彼はテーブル近くで倒れていた。どうやら顔を上げる体力もないらしい。起き上がろうとする動作が邪悪なクリーチャーめいて不気味だった。

「提督！ 大丈夫クマ！」

「かなり、大丈夫じゃないぞ……」

「どうした司令！ なぜこんなことに！」

か細い声で提督は答えた。

「メ……」

「？」

「二日位、メシくわずに、水だけでずっとゲームしてたらこの状態に……」

「……………」

無言の球磨に対して磯風が即座に反応した。

「なるほど。つまり、司令は食事を所望ということだな！」

「……………たのむ」

「この私に任せておけ！」

短い応答の後、磯風は意気揚々と部屋を飛び出した。

部屋に残った球磨は、提督の側まで歩み寄り、呆れ顔で話しかける。

「提督、今、部屋を出て行ったのが誰かわかってるクマ？」

「いや、正直、顔を上げる体力も気力もなくてな。口調からするに長門か武蔵かと判断し

たんだが」

「今外に出て行ったのは磯風クマ」

「……………」

提督は無言だった。言葉の意味を噛み締めているらしい。

ちなみに、磯風は艦娘のなかではかなり料理が苦手な方である（オブラートに包んだ表現）。

「球磨、俺の休み、一日伸ばせないか？」

「駄目クマ。点滴してでも、ちゃんと仕事するクマよ」

提督の願いを、球磨は容赦なく切り捨てた。

その後、提督は磯風の料理を苦しみながら食べた後、翌日に栄養剤の点滴をした上で、強制的に職務に復帰した。

オタ提督と謎の建造物

「提督、これです」

「これか……」

オタ提督（以下、提督）は軽巡洋艦大淀と共に、ある場所にいた。

鎮守府内、改修工廠近く、主に資材置き場に使用されているはずの敷地である。

資材置き場であるはずのその場所には、何故か巨大な建造物が建築されていた。

頑張つて洋館を思わせる建築を目指したその建物には、看板に手書きで『ミステリーハウス』と書かれていた。

「大淀、これが何か説明できるか？」

「えっと、ミステリーハウスだそうです」

流石の大淀も説明できない。単純に看板を読むのが精一杯だ。

「それは俺でもわかる。作ったのはやはり明石さんか？」

「間違いないでしょう。この周辺の管理は、明石に任せてありますから」

まさかこんなものを作るとは、と苦悩をにじませつつ、大淀は言った。

明石というのは工作艦の艦娘で、鎮守府内の工廠を回している人物である。

「しかし、こんなものを作る予算と資材はどこから……。俺のチェック漏れか？」

「いえ、それはないでしょう。この建造物は近代化改修などで余った機材を組み合わせて作つてあるようですよ」

「なるほど。よく出来てるな」

よく見れば、建物のそこかしこに機銃やら砲塔やら、提督たちにとって見覚えのあるものが飛び出していた。

冷静に観察するとミステリーハウスより、簡易要塞といった方が適当な外見をしているように思えてきた。

「工廠の扱いは明石の自由にさせているとはいえ、まさかこんなものを作るとは……」

「自由すぎだろ……」

「申し訳ありません。私がしっかりしていないばかりに」

鎮守府内の立場の関係で大淀と明石はとても仲が良い。そして、大体において大淀が明石に迷惑をかけられている。

彼女もまた、苦勞人なのだ。

それを理解している提督に、彼女を責める気は無かった。眼鏡キャラだし。

「いや、大淀は悪くない。明石さんのやることにあまり気を配っていなかったのは俺も同じだ」

「ありがとうございます」

「さて、どうしたものか……」

建物をじっくり観察していると、いかにも正面玄関といった装いのゲートの他に、もう一つドアがあることに気づいた。

一般家庭でよく見かけるサイズのドアには、『提督用入り口』と投げやりに書かれたプレートが取り付けられている。

「なんで俺だけ特別な入り口があるんだ？」

「艦娘じゃないから、でしようか？」

とりあえず近づいて、軽くドアを開けて、中を覗く二人。

内部には、物騒なものがいっぱいだった。機銃、砲塔、魚雷に軍刀、どこから持ってきたのか巨大なプロペラやらスクリーンも見える。

「あまり平和的でないものが見えるのだが……」

「廃棄させた武装類や、船舶の資材でしょうか……。あ、思い出しました」

「なんだ？」

「この入り口の文字、夕張さんの字です」

「あいつか……」

夕張というのは軽巡洋艦で、色々あつて提督のことを蛇蝎の如く忌み嫌っている艦娘

だ。

明石と仲が良く、彼女とよく一緒に作業している姿をみかけるので、今回の件にも絡んでいるのだろう。

「提督、入ってみますか？」

「嫌だ。こっちは使用禁止だ。何をされるかわからん」

「ですね」

夕張は、たまに提督に対して冗談抜きの殺意を向けることがある。

流石に明石も一緒なのでやり過ぎることはないと思うが、万が一ということには十分に考えられた。

「提督、いかがいたしますか？」

「そうだな。非番で暇そうな奴を集めて、探索しよう。大淀にはいくつか頼みもある」

「了解しました」

そんなやり取りをしてから、二人は一度、この場を後にした。

☆

30分後、ミステリーハウスの前に、提督と大淀に集められた艦娘たちの姿があった。

航空戦艦、日向。

航空母艦、瑞鶴。

潜航輸送艇、まるゆ。

以上3名が、提督と大淀が声をかけてやって来てくれた、優しい艦娘達である。

「とりあえず近くにいた3人に声をかけてみたのだが」

「皆さん、お忙しい中、申し訳ありません」

「大丈夫よ。こつちもちよつと時間できちやつたところだから」

「私も問題ない。提督の頼みだからな」

「まるゆでお役にたてそうなことなら、がんばります」

「明石の作つた変な建造物を探検してくれ」という誘いに乗ってくれただけあって、3人とも友好的だ。

きっと、一緒にいた大淀が心底困つた顔をしていたのもこの態度の理由だろう。

これならいける。提督はそう思った。

「それで、私達は何をやるんだ？」

「話した通りだ。このミステリーハウスを攻略する」

「はあく。こんなものがあつたんですねえ。気付かなかつたです」

「お恥ずかしい。明石が勝手に作つたものでして……」

「なにやつてるのよ、あの人……」

「しかし、よく出来ているな……」

それぞれの反応を返す3名と謝罪する大淀。既に大淀がちよつと気の毒に見えてきた提督である。

「とりあえず、こんなものがあるなら調べなきゃならん」

「明石を見つけて、詳しいところを聞かなければなりません」

「あー、明石さん、この中にいるのね」

「これだけ大きい建物だと、探すのは大変そうですねえ」

「まあ、そうなるな」

一応、3人とも納得したらしい。それを確認した提督は、入り口に向かって歩き出す。ここのいうのは早めに済ませてしまった方がいい。

「念のため、気をつけていくぞ。まあ、艦装をフル装備、とまでは無くても良いだろうが」
ゲートを開け、中に入ると短い通路があり、また扉があつた。

流石に罠はないだろうと明石を信じて、扉を開ける。

すると、その先は小さな部屋になっていた。

「ここは何を目的とした部屋なのでしょう」

「ふむ。更衣室とかに似ているな」

部屋の中はロッカーが並んでおり、ここで着替えて下さい、と言わんばかりの作りに

なっていた。意図はわからないが。

「提督、こんなものが」

「なんだこりや、水鉄砲？」

ロツカーを漁っていた日向が見つけたのは大型タンク付きのちよつと良い感じの水鉄砲だった。

どういいうわけか、タンクの中には色水が充填されている。

「中に絵の具が入っているな」

「何よそれ、これで遊べってこと？ ミステリーハウスの要素はどこいったのよ」

「明石のことだから、作っているうちに忘れた可能性はあります」

「い、意外と適当な人ね……」

真面目な人間だったら、敷地内にこんな気合の入った違法建築はしない。常識の通用しない相手のことを考えるだけ無駄だろう。

「ともあれ、進むしか無い。日向、ドアの向こうから変な音は聞こえないか？」

「私にそういう技能はないのだが……。一応、明らかに不審な音はしないな」

日向に聞き耳の専門的な技能を期待していないが、艦娘の方が五感が鋭い。

とりあえずは安心だ。

一応水鉄砲を持って、全員で出発することにする。

「よし、いくぞ」

「あ、まるゆがあけます」

まるゆがドアを開けた。

ドアの向こうは広い部屋だった。

自然と先頭を切つて室内に入ったまるゆが、全身真っ青になった。

唐突すぎて理解が追いつかなかつたが、水鉄砲による射撃である。

「な、なんですかー、これ！ 隊長！ 隊長！」

「落ち着いてください、ただの絵の具です」

絵の具まみれになったまるゆを落ち着かせる大淀。

全員、素早く手近な物陰に隠れる。

「うっかり実弾とか飛んでこなくて良かったな。それはそれとしてだ、瑞鶴」

「なにかしら？」

「さつき、ちよつと時間できたところ、とか言つてたな」

「ええ、そうよ」

「それは、そこにいる加賀さんと関係があるのか？」

提督の指差した先、小さめの体育館くらいの広さがある部屋の中央に、サイドテールの人影があつた。

航空母艦、加賀だ。

ちなみに水鉄砲を持っており、更に言うとなんか怒っているように見えた。感情の起
伏がわかりにくい彼女には珍しいことだ。

加賀が口を開く。

「よく来たわね、五航戦……」

「あ、あんた、なんでここにいるのよ！」

「明石さんに教えて貰ったわ。ここにいれば貴方が来ると」

「加賀、一つ良いだろうか？」

なにやら言い争いを始めた加賀と瑞鶴に割って入ったのは日向だ。

「なにかしら」

「なんでそんなに怒っているんだ？」

口調に若干の怒りをにじませながら、加賀が答える。

「訓練の途中で、その五航戦が逃げ出したからよ」

なるほど、とその場の全員が状況を理解した。

「これは恐らく、瑞鶴が悪い。」

「あ、あんたがネチネチいつてくるからでしょ！」

「逆上して出て行ったのは貴方、だからこれはペナルティよ」

加賀は迷いなく提督たちに向かって水鉄砲を射撃。

「うわ、あぶね！」

逃げまわる提督たち。それほど真剣に狙っていないなかったのだろう、全員無事に回避できた。

「提督、そんなところにいると危ないわ」

散々撃つた後、しれつと言う加賀。

対して、提督は質問をする。確認したいことが出来たからだ。

「お、おう。つまりなんだ、加賀は瑞鶴をここに置いていけば、見逃してくれたりするの
か？」

「そうね。私に提督を攻撃する意志はないわ」

「まるゆはしっかりと攻撃されたのですが……」

「ごめんなさい。射ちやすい目標があったから、つい……」

本気の謝罪の加賀。凹むまるゆ。

その様子を気の毒に思っていたら、日向が話をすすめてくれた。

「なるほど、理解した。行こう、提督。ここは瑞鶴に任せるのが良いだろう」

「うむ。そうだな」

全員、同時に瑞鶴に手持ちの水鉄砲を預けた。

「ちよ、なによ！ 皆であの一航戦をやつつける流れにならないの!？」

持ちきれなくて足元に水鉄砲を並べながら叫ぶ瑞鶴。

対して、提督は肩に手をおいて、彼女を優しく諭す。

「加賀さんを怒らせたのはお前だ。そして、俺達は怒った加賀さんを相手にしたくない。わかるな？」

提督がそれだけ言うと、瑞鶴を置いて残り全員は歩き出した。

「さ、提督、行きましよう。明石を探さない」と

「そうだな」

「どこかで落ち着いて体を洗いたいですー」

「向こうの部屋に、シャワーがあったわ」

まるゆの言葉に反応した加賀が、出口を指差す。

こういう遊びをする以上、設備は揃えてくれているらしい。

しかし、シャワー完備とは、気合の入った建築である。暇だったのだろうか。

「それじゃあ、ごゆつくり」

「ええ、提督もお気をつけて」

「何い感じで私を置いていつてるのよ！ うわ！ 撃つてきた！ この！ この！」
戦いを始める2人を尻目に。4人はその場を脱出した。

☆

まるゆが体を洗って、次の部屋にやって来た。

次の部屋は、ガラクタだらけの迷路だった。

「なんだここは、倉庫か？」

「先程、順路という文字が見えましたが……」

「迷路みたいですねえ……」

「どうやら、そのつもりみたいだぞ」

楽しい迷路、と書かれたプレートを見つけて日向。

プレートには他にもいくつか書かれていた。

「運動不足にお悩みの方が体を動かせるように、あえて障害物を配置しています」

「頑張って障害物を動かしてね、ですか」

「運動不足って、そんなの鎮守府にいるのか？ 俺だつて散歩くらいしてるぞ……」

そうぼやく提督に対して、近くの障害物を頑張つて動かそうとしていたまるゆが言う。

「艦娘の装備の廃材ですね。隊長にはちよつと重すぎるかと」

「そうだな、提督が動かしていたら日が暮れるな」

軽々と障害物をいくつか動かしながら、日向がまるゆの発言を肯定した。流石戦艦、

力持ちだ。

「日向、軍刀は持ってきているな」

「うむ。念のため、これだけ持ってきた」

「頼む」

「まかせろ」

艦装の一部である、軍刀を抜いた日向。

彼女は鋭い目つきになると、手近な壁やガラクタを次々と斬り捨て始める。

艦娘が艦装を持った時、その破壊力は尋常のものではない。

軍刀にはありえない切れ味と破壊力で、日向を先頭に一行は迷路を力づくで進んでいく。

そもそも、提督に明石の用意したアトラクションをまともに攻略するつもりなどないのだ。

素人の作ったアトラクションは、ちゃんと攻略できる代物になっていないのか極めて怪しいのと、単純に面倒くさいのがその理由だ。

「提督、あちらに出口と思われる通路がありましたあー！」

斬り開かれた通路、ガラクタの隙間を覗きながら、まるゆが言った。

「でかした！ 日向、頼む！」

「まあ、そうなるな」

提督の声に答えて、一直線に進む日向。

「流石は日向さんですね、頼もしいです」

「声をかけて正解だったな」

感心する大淀に、同意する提督。ちよつと瑞雲にこだわりがあることを除けば、日向は意外と付き合いも良いし、頼もしい艦娘である。

しかし、そんな日向の動きが、突然止まった。

「くっ……」

軍刀を手に、苦悶の表情を浮かべる日向。

ただごとではないのは明らかだ。

「どうした!」

「すまない、提督。私では、これ以上進むことは出来ない」

「なんだと、どういうことだ!」

「これを見てくれ」

見ると、巨大な瑞雲の模型が道を塞いでいた。

「前に私が作って貰った巨大瑞雲の失敗作だろう……。これを斬ることは、私には……できない」

「まさか明石さん。この状況を見越して！」

「偶然だと思いますが……」

「どうしましょう。動きません」

一応、まるゆがどうかそうとするがびくともしない。壁代わりに置かれているもので、溶接くらいされていそうである。

だがしかし、この巨大瑞雲をどうにかすれば、このフロアを抜けられるのは確かなのだ。

「ふむ……。日向よ」

「なんだ、いくら提督と言えど聞けることと聞けないことが……」

「今度、扶桑から瑞雲12型を借りてきてやるから、なんとかしてくれ」

「まかせろ」

返事と同時に、日向はしめやかに道を切り開いてくれた。

☆

「すまない提督、私はこれを弔わなければならないんだ……」

瑞雲を自らの手で破壊した日向はそれなりに凹んだようで、ここから帰ることになった。

まあ、すでに十分活躍したし、これ以上付き合わせるのも申し訳ない。

「お、おう。それなら仕方ないな」

「来た道に戻れば出られるはずですから、お気をつけて」

「了解した。加賀と瑞鶴がまだやりあっていたら、ついでに回収しておくよ」

「お気をつけて〜」

とぼとぼと黄昏れた背中を見せる日向を見送った後、3人となった提督達は、次の部屋へと向かった。

☆

次の部屋は、妙に天井が高く、明るい部屋だった。

広さはさほどではなく、開放感がない、嫌な感じの場所である。

『ようこそ、提督と大淀とまるゆちちゃん』

部屋に入るなり、明石の声が響き渡った。

声だけとはいえ、ようやくラスボスの登場で、提督としてはちよつと安心した。

最悪なのは散々探しまわった後、間宮辺りで遭遇することだったのだが、それは回避できそうだった。

『さすがですね。嫌がらせだらけの提督用通路を使わず、艦娘用のルートを、こんなに早く攻略するなんて』

「やっぱり嫌がらせだったのかアレ。選ばなくて良かった……」

『今のところ、ここが最後の部屋になっています。楽しんでくださいね』
「楽しんでつて、おい、明石さん。話を」

『……………』

提督の問いかけに返事はなかった。

「話をする気はないようですね。困ったものです」

「この部屋は何なのでしょう？」

まるゆの問いに、提督は諦めたように答える。

「無駄に高い天井とか、この感じ、だいたい想像がつかない」

「さすがですねー。どんなことが起きるんですか？」

「多分、水攻めだな」

直後、天井のほうから大量の水の注入が開始した。

「あわわ。まるゆはともかく、お二人が大変です」

水の勢いに慌てるまるゆ。彼女はともかく、大淀と提督にとって非常に不味い事態である。

「大淀、大丈夫か？」

「はい。私は何とかなりますが、提督が……」

「多少は平気だが、天井近くまで水が貯まるなら、ちよつとマズイな」

「まるゆ！ で、出る方法を探しますよ！」

「頼んだ。大淀さん、最悪の時は頼む」

「了解です」

既に腰くらいまで溜まった水の中をまるゆが必死に脱出の手がかりはないか探し始める。

だがしかし、残念ながら、水かさは順調に増えて、提督と大淀は程なくして水に浮かび始めることになった。

まあ、ノーヒントでは仕方ない。

提督がそんな感想を抱きながら、徐々に迫ってくる天井を見つめていると、再び室内に明石の声が響いた。

『提督、楽しんで頂いていますか？』

「いや、ちよつと生命の危機を感じるんだが。脱出路がないし」

『？ あれ？ 提督の首くらいの高さで水が止まるはずなんですけど』

スピーカーの向こうから、驚いた様子で言ってくる明石。対して、大淀が冷たい声で指摘する。

「現在進行形でしつかりと水が注入されていますよ、明石」

『げ……』

「故障か……」

明石の反応に、溜息と共に諦めの呟きをする提督。

「何か手はないのですか？」

『え、えーと。あ、底の方に緊急排水のボタンがあります！ 部屋の真ん中辺りの床だけ、回せるようになってるの！』

「なんで底につけるんだ！ まるゆ！ 聞いたか！」

「はい！」

提督の声に答えたまるゆが、敬礼一つで即座に潜った。

戦闘能力に乏しい彼女だが、この場面ではとにかく頼もしい。

程なくして、仕事を完遂したまるゆのおかげで、部屋から水が排水され始めた。

☆

水攻めが最後の部屋というのは本当だったようで、排水された後、部屋の外に出るところが出来た。

びしょ濡れになった3人は、建物の外で一息ついていた。

「死ぬかと思っただぞ……。完全にデストラップじゃないか」

「申し訳ありません。明石が悪乗りして」

「まるゆのおかげで助かったよ」

「お役に立てて良かったです」

そんな事を話していると、建物から明石の声が響いて来た。どうやらこの違法建築、そこらじゅうにマイクとスピーカーを内蔵しているらしい。

『あー、皆さん、無事に脱出できたようで何よりです』

「ああ、何よりだ」

『提督、楽しんでいただけました？』

「途中まではな」

『お、大淀も楽しかった？』

「明石……」

怒りのオーラを立ち上らせながら大淀が言った。それを見たまるゆが怯える。マジギレだ。

「明石、違法建築物に関しては、貴方の管理内だから大目にみます」

『あ、はい』

「しかし、提督の命を危険に晒したことは許せません」

『す、すいません』

「許しません」

『え、えーと。大淀？』

明石の声には答えず、大淀はどこかと通信を始めた。もちろん、提督はそれを止めない。

「球磨さん。大淀です。明石以外の脱出は？ 確認ですか。では、手はず通り、お願いします」

それだけ言つて、大淀は通信を切つた。

『あの、何をしたの』

姿を見せない明石に答えたのは、提督だつた。

「球磨經由で、たけぞうがこの施設に向けて砲撃を開始する。なに、演習弾だから安全だ。死にはしない」

『え、ちよ……』

「提督、武蔵つてちゃんと呼んであげないとまた怒られますよ」

「いやー、怒るのが面白くてついな……」

「武蔵さん、気にしてましたよー？」

『ちよつと、3人とも！』

何やら明石が慌てているが、それを無視して和やかに話をする提督達。

『待つて！ 私まだこの中にいるのよ！』

もちろんそれは知っている。

だからこそ、3人はスピーカからの声を見無視しながら歩き始める。

もうすぐ46cm三連装砲（演習弾）の砲撃がここに届く、非常に危険だ。

「今回はまるゆに助けられたな。何かおごろう」

「いえ、当然のことでしたまでです！」

「提督、せっかくなのでから他の皆さんも誘いましょう」

「そうだな。着替えた後、間宮に集まるように連絡してくれ」

「了解です」

穏やかな笑みを浮かべた大淀は、鎮守府内にいる球磨に向かって通信を始めた。場合によっては、おごる人数が増えるかもしれないが、それも良いだろう。

一仕事を終えた提督は、穏やかな気持ちになっていた。

『ちよ、ちよっとー!!』

明石ごと砲撃で爆発する施設を背景に。提督達は和やかに立ち去るのだった。

オタ提督とお部屋訪問

ある日の鎮守府。

オタ提督（以下、提督）は秘書艦の球磨と共に、艦娘たちの寮の前にいた。

今日の業務は苦情の入っている艦娘の部屋を確認することである。

「これ、俺が一緒に行くことないんじゃないか？」

最初の目的地である駆逐艦寮に向かいながら、提督が言う。

苦情と言ってもどれも深刻なレベルではない。球磨なり大淀なりから注意すれば良い程度だ。提督がわざわざ出向くほどだとは思えなかった。

「それこそが狙いクマ。「きちんとしないと提督が来る」と皆が思うようにする作戦クマ」

提督の発言を予測していたかのように球磨が答えた。どうやら、提督の存在前提の仕事だったらしい。

「なるほど。なんか、俺だけ嫌われそうだな」

艦娘も軍人とはいえ年頃の娘さんだ。中年に片足突っ込んでいる提督に部屋を覗かれるのはさぞ嫌だろう。

「仕方ないクマ。誰だつて部屋にゴキブリが現れたら嫌だクマ」

「お、おう……」

あんまりな言い分に提督はそれだけ返すのが限界だった。

それからしばらくして、駆逐艦寮に近づいた辺りで、提督は口を開いた。

「……なあ、球磨。流石にゴキブリ扱いは傷つくんだが」

「申し訳ないクマ。つい勢いで言ってしまったクマ。反省するクマ」

球磨は素直に謝罪してくれた。

☆

「最初は秋雲の部屋か」

「たまに深夜作業の灯りが漏れたり、奇声が聞こえることがあるらしいクマ。あと、一部の駆逐艦を部屋に引き込んでることクマ」

資料を手に球磨が説明してくれる。

秋雲はイラストを描くことが好きな艦娘だ。ついでにいうと提督と仲良しのオタ仲間でもある。

そんな彼女はイベントで配布するための同人誌を描いていることが多い。

「それって……」

「心当たりがあるクマ？」

大有りだった。奇声も一部の駆逐艦が引き込まれるのも同人絡みに違いない。

「まあ、な。何はともあれ行ってみよう。秋雲は在室なんだな？」

「今日行く予定のところは全員在室になつてはるはずクマ」

「抜かり無いな」

そんなことを話しながら二人は秋雲の部屋に到着。

中に入ると、机に向かつて一心不乱に何かをしている秋雲の姿が目に入った。

間違いない、原稿中だ。

来客に気づいたららしい秋雲が提督たちの方を向いて、言った。

「お、こんにちは。どうしたの、珍しいじゃん」

いつものノリで挨拶してきた秋雲は、酷い有様だった。

目の下真つ黒、赤疲労どころではない憔悴しきった顔。

提督のよく知る人種の、よく見る状態である。

きつと、次のイベントが近いのだろう。

「あ、秋雲。どうしたクマ？」

若干引き気味の球磨。一方、提督の方は慣れた様子で秋雲に語りかける。

「締め切りが……近いのか」

「うん。そう……」

「提督、わかるクマか！」

「一応な」

今の問答で大体わかった。ついでに秋雲が描いている肌色成分多めの原稿も目に入った。良い感じだったので今度買うことを心に誓う。

原稿が球磨にバレると不味いので、提督は素早く秋雲に対してアイコンタクト。疲労状態にも関わらず、同族の秋雲は気づいてくれた。

迅速かつこっそりと肌色原稿を隠しつつ秋雲は言う。

「それで、二人とも何の用？ 見ての通り取り込み中なんだけど」

「深夜作業と騒音で苦情が出ている」

「え、マジで？ あちやー、それは悪いことしたな」

「何をやってるか知らないけど、気をつけるクマ」

「どうやら球磨は秋雲の原稿に気づかなかつたらしい。助かった。これは小さいが重要な勝利だ。」

「そうは言ってもなあ。単純に人手の問題だし。あ、そうだ。提督、手伝ってよ」

「無理だ」

即答だった。良い回答を期待していたらしい秋雲の顔が引きつる。

「え？　なんでよ、同類みたいなもんでしょ？」

「俺は消費型のオタクだからお前の作業を手伝うようなスキルはない」

「ああ……そういう話だったクマネ」

ここに来て、球磨もようやく秋雲の行動について見当がついたようだ。半目で提督と秋雲の二人を睨む。

「秋雲、それはあとどれくらいで終わる？」

球磨の視線を努めて無視しつつ、提督は聞く。

「あ、あとちよつと。今日中だね」

「そうか。次からこういう状況になりそうだったら俺に相談しろ。色々都合をつけるから」

「わ、わかった。ありがとう」

「ああ、頑張れよ」

そう言っつて、提督はどこから取り出したのか、レッドブルを机の上に置いた。

とりあえず、秋雲の部屋の問題は今日中に解決するものとして、提督と球磨の二人は部屋を出た。

「提督、どうしてあんなの持ってきてきたクマ？」

「秋雲の部屋と言われた段階で大体想像がついていたからな」

「わかってるなら最初から言うクマ。無駄骨クマ」

「念のために確認は必要だろう」

「まあ、わかる話クマ。別に女の子の部屋を見たいとか、そういう変態的な欲望からじゃないクマね？」

「お前、俺を何だと思ってるんだ……」

球磨の中で提督はどんな人物像になっているのだろうか。これまでのことがあるとはいえ、実像と大分離れている気がする。

そのうちしっかりと話さねばなるまい。提督はそう心の中で決めた。

「まあいい。駆逐艦察は無事解決だ。次はどこだ？」

「軽巡察クマ」

「軽巡か……」

「軽巡クマ……」

そう言って、二人共押し黙る。

軽巡察の問題は、詳しく確認するまでもないくらい、明らかだったからだ。

☆

軽巡察。言うまでもなく、軽巡洋艦の艦娘達が居住している施設である。

この施設における苦情の原因は、聞くまでもないくらいはつきりしていた。

川内型軽巡洋艦、一番艦、川内。

夜戦大好きな彼女は、夜になるとテンションゲージがマックスになり、物凄く騒ぐ。他の寮から苦情が出るほどにだ。

川内が艦隊にやって来て以来、多くの艦娘が彼女を注意した。しかし、どれも一時的な改善しか見られなかった。

この川内問題に対して、ついに提督が動く時がやって来たのだ。

提督と球磨の行動は早かった。

在室している川内を素早く物理的（椅子に縛り付けた）に確保。

室内に入って5分もせずには早業を成功させ、二人は川内を前に彼女の処遇について相談を始めていた。

「ちよつと、二人とも何するのさ！」

「夜になると騒がしいと苦情が来るクマ」

「それもひつきりなしにな」

「仕方ないじゃん！ 夜だよ！ 夜戦の時間なんだよ！」

開き直りやがった。

言葉が通じるのに会話のキャッチボールが出来そうにない。その事実には絶望しつつ提督は語りかける。

「川内、ここは鎮守府だ。戦場じゃない」

「何言ってるのさ提督！ 常在戦場って言うでしょ！」

「……駄目クマ。交渉の余地がないクマ」

「これ、いつそ香取さんに預けるとかじゃ駄目か？」

「実は前にそれをやったんだけど、一週間持たなかったクマ」

「そうか……」

「そりやそうさ！ いくら香取さんでも私の夜戦魂まで消すことはできないのさ！」

「……………」

ドヤ顔の川内。

それを呆れて見る二人。

仕方ないので、提督はいくつか考えておいた対策を披露することにする。

「いっそ、50デシベルあたりの音量で電流が流れる首輪を明石さんに作って貰って

……」

「そんなの川内と首輪の耐久勝負になるだけクマ」

「そうか、そうだな……。いや、いっそ夜になったら大破させて入渠という手も」

「それは名案かもしれないクマ」

「ちよつとちよつと、二人とも！」

話が不穏な方向に流れだしたのを察知した川内が割って入った。提督と球磨の目が本気なのに気づいたようだ。

「なんだ？　今、真面目な話をしているところだ」

「そうクマ。仕事の話クマ」

「私が夜になつてもちよつと静かにしてればいいんでしょ？　そんなの楽勝だよ！」

抗議する川内に対して、二人はノータイムで答える。

「いや、無理だろ」

「無理クマ」

「こいつ何言ってるんだ？　という表情だった。頭に來た川内は言う。

「く……この……つ。じゃあ、勝負よ！　賭けだよ賭け！」

「ほう、賭けとな」

「とりあえず私が一週間、夜に騒がしくしなかつたら勝ち！　そうしたら提督は一日私

のいうことを聞くこと！」

「いいクマよ」

「ちよ、球磨。即答はちよつと」

「球磨にデメリットがなければ問題ないクマ」

「どうやら提督にデメリットが発生していることは問題ないらしい。ひどい話だが、こ

の鎮守府ではよくある光景でもある。

こだわっても仕方ないところなので、提督は話を進める。

「まったく酷い秘書艦だ。それで、川内が負けた場合はどうするんだ？」

「もちろん！ 提督と球磨に一日こき使ってもらって構わない！ どうよ！」

「どうよ、と言われてもなあ。どうする？」

「いいんじゃないクマ？ どうせ勝てるクマ」

「確かにそうだな。よし、川内。その勝負のった」

提督と球磨は、ほぼノータイムで結論を出した。

それを見た川内はこめかみ辺りをピクピクさせていた。大分怒ってる感じだ。

「……二人とも、その目論見の甘さを後悔させてやるよ」

深い怒りと共に、川内はそう宣言した。

3日後、提督と球磨にこき使われる川内の姿があつたという。

☆

「次は戦艦寮か」

「なんでも夜になると騒がしいらしいクマ」

「戦艦でか？ 騒ぐやつの想像がつかん」

戦艦は性格的に大人といつてもいい艦娘ばかりの艦種だ。先程の川内のように大騒

ぎずする問題児の心当たりがなかった。

「たしかに不思議クマ。でも、それを確かめるのも仕事クマ」

「それもそうか」

苦情が出ているのは間違いない。勘違いとか、遊びに来た川内が騒いだとか、色々原因は考えられる。

ここはその辺りをはつきりさせておくべきだろう。

戦艦寮に入った二人が会ったのは、航空戦艦の伊勢だった。

「あら？ どうしたのさ、提督。珍しいじゃん」

「仕事だ。戦艦寮が夜間騒がしいと苦情が入っている」

「え、ほんと？」

「何か心当たりはないかクマ？」

「うーん、あそこかな？」

ちよつと考えながら、伊勢は寮の中の一室に案内してくれた。

案内された先で提督たちは驚いていた。

その部屋は小さめの教室くらいの広さだった。

絨毯を敷かれた室内には小洒落た椅子にテーブル、ティーセット。それらに合わせた感じのデザインの収納。更にはクッションやらぬいぐるみが積み上げられている。

恐らく雑談用の部屋だ。しかし、二人が驚いたポイントはこの部屋の設備ではなかった。

提督と球磨はこの施設の存在を把握していない。つまり、無断で作られた施設である。

「なんだここ？　こんな部屋あったか？」

「球磨も初めて見たクマ」

「ここは金剛さんなんか他の艦種の子とティータイムできるようにって、空き部屋を改装して、最近作った部屋なんだ」

「ふむ……」

「ほら、戦艦相手だと駆逐艦の子とかちよつと怯えちゃうでしょ？　だから、積極的に交流しなきゃねって話になってさ」

無断改装を提督が咎めると思ったのか、伊勢は擁護気味な話し方だった。恐らく、彼女もこの部屋をよく利用するのだろう。

「騒ぎの原因はここクマか」

「無許可だが、悪いことではないしなあ」

「でしよでしょ。だからさ、大目に見てくれると嬉しいんだけど……」

なんとか丸く収まりそうだ。安堵の表情で話す伊勢。

しかし、そこに割って入る艦娘がいた。

「提督！ 騙されています！」

「げっ、霧島！」

現れたのは金剛型戦艦の霧島だ。眼鏡をかけた頭脳派めいた戦艦娘である。

「霧島さん、どうしたクマ？」

「金剛姉様も関わっている手前、我慢していましたが、言うべきことは言っておくべきだと判断しました」

「言うべきこと？」

「見ていただければわかります」

言いながら室内に入ってきて、何やらごそごそしだす霧島。

「あ、ちよつと霧島！」

何故か慌てた様子の子の伊勢が止めにかかるが、その前に霧島は目的を達成していた。

「これを見てください」

霧島が指で指し示した先、ぬいぐるみの山の向こうに隠された棚があった。

棚の扉は開いており、そこには大人ならよく知っているものが並んでいた。

大量の酒瓶である。

「酒か……」

「お酒クマね」

「金剛姉様はティータイム用にこの部屋を改装したのですが、一部の艦娘がお酒を持ち込むようになっていました」

「一部の艦娘か」

一部の艦娘の一人である伊勢に視線が集中した。

「え、えーと……駆逐艦の子には飲ませてないよ?」

流星に言い訳不能なのは察しているらしく、それ以上の言い分はなかった。

「霧島さん、夜になると騒ぐこともあるクマ?」

「はい。長門さんがいない時などに」

「なるほどな」

「あの、提督。今後気をつけるからできれば穏便にー」

詳しい話に伊勢が割り込んで来ようとしたが、とりあえず全員スルーした。

深夜に飲酒。そんな某軽空母のような真似を許すわけにはいかない。

某軽空母は飲んでないと手が震えるから仕方ないと諦めているが、そんな痛ましい同類を増やすわけにはいかないのだ。

「この部屋は一時閉鎖だ。細かいことは大淀とチェックした後だな。球磨、酒は全て回収しろ」

「了解クマ」

「そんな！ 提督、お慈悲を！」

「勝手に酒飲んで騒いだんだ、慈悲はない」

「仕方ないクマ」

伊勢を無視して出て行く提督と球磨。

それを見ながら霧島が遠慮がちに口を開く。

「あの、提督。できれば昼間だけでも……」

「すぐには無理だが、大丈夫にする」

「安心しました。本当に閉鎖かと」

「お酒を持ち込んだ人が反省する程度の時間は欲しいクマ」

「それくらいなら。良い葉ですね」

膝から崩れ落ちる伊勢を尻目に、提督達は今後について細かく打ち合わせを始めるのだった。

一週間後。戦艦寮にティータイム用のラウンジが新設された。

☆

寮のクレーム処理という名のお部屋訪問。

二人は本日最後の目的地にやって来た。

すでに日は傾き始めている。意外と時間のかかる業務だった。

「さて、最後はこの部屋クマ」

「おい待て。俺の部屋じゃないか。何か問題あるのか」

よく知る自分の部屋の前に連れてこられた提督は、球磨に対して抗議の声をあげる。自分はクレームになるほどの問題を起こしていたろうか。

「大有りクマ。深夜に奇声、艦娘がゲームで入り浸って食事の時間に遅れる、早朝に奇声、とクレームだらけクマ」

「マジか。クレームになってたのか……」

真剣な表情の球磨。どうやら本物のクレームらしい。どうせなら自分の部屋だけ離れた場所におけば良かったと、提督は今更ながら後悔した。

「秘書艦として見逃せないクマね。えっと、提督のコレクションは燃えるゴミでいいクマ？」

容赦なく行動に移ろうとする球磨から本気を感じた提督は迷わず土下座した。

そして、必死の嘆願を開始する。

「防音対策と、艦娘の出入りを制限するから少し待ってくれませんか……」

「もう一息クマ。実は最近、娯楽室が欲しいという要望が多くて困ってるクマ」

「わかった。今度の会議で予算とってくるから」

「あと、そろそろ休みも欲しいクマ」

「タイミングを見て秘書艦のローテーションも検討します」

「それ以外にも……」

その後、提督は更にいくつかの条件を押し付けられてから、ようやく開放された。その頃には日はしっかりと暮れていた。

オタ提督と秋祭り

当たり前のことだが夏の後には、秋が来る。

秋の気配が濃厚になった鎮守府。その執務室で、オタ提督（以下、提督）は一人机に向かっていた。

「ふう、これで一通り終わったな」

言いながら、冷めたコーヒーを飲む。今日は球磨も大淀もない。一人だ。

「しつかり俺用の仕事を残して出張しやがって。全力を尽くしてしまったじゃないか」

大淀も球磨も出張だが、実に絶妙な量の仕事を残していつてくれた。手早く済ませてエロゲをやる暇もありはしない。

いつも通り執務室に来て、気づけばもう夕方になっていた。

「そういえば、腹が減ったな。今日は秋祭りをやっているはずだし、ちょうどいい……」
悪意ある仕事の残し方に対しムキになって仕事をしていたため、提督はろくに食事をとっていないかった。

タイミングの良いことに、今日は鎮守府の秋祭りである。

日頃の息抜きを兼ねて、鎮守府内でささやかながら祭りを開いているのだ。規模は小

さいが出店もでる。

全て艦娘の運営なのが心配だが、ここのとこ忙しかつたので全てを責任者の長門に任せてある。まあ、生真面目な彼女のことだから仕事に関しては信用できるはずだ。

「せっかくだし、間宮さんや鳳翔さんのところではなく、そちらに行くか」

たまには冒険も悪く無い。

そんなことを考えながら、提督は一人、執務室を出た。

★

「さて、今の俺の腹は何を求めている……。とりあえず一回りするか」

鎮守府の敷地内に設けられた神社。

そこまでの参道に設置された出店を眺めながら提督は歩く。

たこ焼き、焼きそば、わたあめ、卵焼き等々、無難な食品系は問題なく運営されているようだ。

食事の危険度が低いことを確認した提督は、この場で腹一杯になるまで食べることを決めた。普段調理しない艦娘の料理で胃を満たすのも悪く無いと思えたからだ。

「む。あの小屋はなんだ？ いや、見覚えがあるぞ。確か磯波の……」

通りから少し外れて設置されたプレハブ。提督の見覚え通り、それは普段、磯波が港で海産物を提供するのに使っている磯小屋だった。店内では海産物が楽しめる、鎮守府

の密かな名所だ。

「どうやら建物ごと祭りに出店して来たらしい。」

これは、食事処として申し分のない案件である。

「なんか嫌な予感がする……。とりあえず様子見と……」

そつと、窓から内部を覗いてみた。

「……………地獄か」

内部は既に、呑兵衛軽空母を中心とした地獄の宴会場と化していた。

「なるほど。ここは隔離施設だな。磯波には気の毒だが。よく考えられている」

あえてこの施設を持つてくることで、酒を飲んで暴れる艦娘を隔離する。それこそが

この磯波の磯小屋の目的だろう。長門の采配なら大したものだ。

そして、うっかり足を踏み入れなくて良かった。

「ここはスルーだな。む、今度はカレーの臭いが……」

空腹を刺激するスパイスの香りに誘われて、提督はふらふらと歩き出した。

★

「いらつしやいませえ、提督」

「ほう、大鯨のカレー屋か」

辿り着いた先は、ちよつと甘つたるい感じの独特の話し方をする、潜水母艦大鯨が運

営するカレーの屋台だった。

「カレーの屋台は抽選だったんですけど。運良く開けることになったんです。提督、お仕事は終わりですか？」

「ああ、腹が減ってな。一通り屋台を見て回っていたところだ」

「なるほど。それでは、一食いかがですか？」

大鯨は料理が上手い艦娘だが、鳳翔のように店舗を構えているわけではないので食べる機会は少ない。

これは貴重な機会だ。それに、カレーならば食事として申し分無い。大鯨カレーなら尚更だ。

「そうだな。一食頼む。他のところでも食べるつもりだから、ちよつと少なめでいいぞ」「わかりました。比叡さん。提督にカレーちよつと少なめでひとつお願ひしませう」

聞き捨てならない名前が出てきた。

「なつ。大鯨、なんといつた！」

「え？ 奥でカレーを作ってる比叡さんにお願ひしたんですけど」

「提督！ お仕事お疲れ様です！ 比叡のスペシャルカレー！ 気合！ 入れて！！ いきます!!!」

店舗の奥から元気いっぱいの声が聞こえてきた。戦艦比叡は料理ができないわけで

はないが、気合が入ると非常に良くないことになるケースが多い。

誤算だった。まさかここで比叡とは。

「大鯨……お前が作るんじゃないのか？　というか、作ってくれんのか？」

「大丈夫ですよお。ちゃーんと私がチェックしてからお出ししますから。提督の心配するようなことはありません」

提督の不安を察したらしい大鯨が、慈愛溢れる笑顔と共に言ってくれた。

心の底から安心できる発言である。

「そうか……助かった。女神よ……」

大鯨の笑顔に提督は涙ぐみながら心の底から感謝である。

感動していたら、比叡が気合を入れて作ったカレーを持ってきた。

「提督！　お待たせしました！　比叡カレーですー」

「お、おう」

テーブルに置かれた比叡カレー。これが大鯨カレーだったら完璧なのだが、そこは諦めて観察してみる。

ルーもご飯も見た目は普通だ。臭いも問題ない。その上で大鯨がチェックしているならば、安心して食べられるのではないかと思えた。

「提督、どうぞ召し上がってください」

「どうぞでー！」

大鯨と比叡、それぞれの笑顔に促される。

一応、心の中で無事を祈りながら、提督はカレーを一口食べてみた。

「む……普通に美味しいなこれ」

奇跡なのか、比叡の腕なのか、それとも大鯨の仕事の賜物なのか不明だが、比叡カレーは普通に美味しかった。

「だから、大丈夫だって言ったじゃないですかあ」

「おかわりもありますよー！」

「あ、いや。他のところでも食べたいからおかわりはいいや。でもほんと美味しいなこれ」

言いながら提督はどんどんカレーを口に運んだ。こういう場所でなければ、おかわりしたいレベルの美味しさだ。比叡カレーの名前で鎮守府内の店舗にメニューがあれば注文しかねない。

程なくして、提督は比叡カレーを完食した。

「ありがとうございますました〜」

「ありがとうございます！」

提督は満足感と共に、二人に見送られて店を出た。最初の食事としては悪くなかった。ちよつと不安だった出店の食べ歩きだが、滑り出しは上々といえよう。

「今日はいいい日だ。もう少し食べよう」

祭り特有のちよつと浮かれた空気を感じながら、提督は次の店を求めて歩き出した。

★

次に目に止まったのは海産物を焼いて提供している屋台だった。

店の食材は、先ほど見た磯波の店と同じに見える。

「なんだこの屋台は？ 磯波の店と同じに見えるが」

「いらつしゃい、提督。僕達の店によるこそ」

「先に磯波ちゃんのところを見たのね。ここは支店みたいなものよ」

屋台を運営していたのは戦艦の扶桑と駆逐艦の時雨だった。

扶桑の方はちよつと不幸なのとシスコン気味の妹がいるのが玉に瑕な艦娘。時雨の方は雪風のように幸運艦と呼ばれている。どちらも落ち着いた性格の艦娘で、仲が良いらしく鎮守府内でも一緒にいることが多い。

「支店？」

「ほら。磯波のところは、ああなるだろうから……」

「同じ店をもう一軒出せと長門さんが言ったのよ」

「なるほど、長門は上手くやってるな。それで、調理はどちらがするんだ？」

提督は気になっていたことがあった。

この店は、生の海産物を扱っている。

それを調理するのが幸運艦である時雨なのか、不幸艦である扶桑なのか。そこはかなり重要な点である。

「もちろん、二人で調理してるよ」

「せっかくだから提督にも何かご用意したいと思うのですが」

上目遣いで扶桑が言ってきた。これは断るのは難しい雰囲気だ。

正直、食べるのは問題ない。しかし、調理は出来れば時雨にお願いしたいのが本音だ。あと、牡蠣は避けたい。

「お、おう。そうだな、適当に。出来れば時雨に……」

そこまで言つて、提督は気づいた。

物陰からこちらを見ている存在がいた。

扶桑の妹艦である、山城だ。凄い目でこちらを見ている。怖い。

うっかり扶桑を傷つけるようなことを言ったら、大変なことになるだろう。

「提督？　どうかしましたか？」

「何でもない。そ、そうだな。適当にお勧めを頼む」

「わかった。大丈夫、食べ物を取扱う店だからちゃんと気をつけているさ」

時雨がそう言いながら、提督に向かって柔らかな笑みを向けた。どうやら、こちらの心情は理解されていたらしい。

その後、二人の艦娘が手際よく調理した海産物を、提督は存分に楽しんだ。

★

「うっぷ。食べ過ぎた。いや、味はいいんだが。しかし、なんか、不味いぞ」

扶桑達の店を出た後、提督はあることに気づいた。

胃が重い。かなり危険な気がする不快感だ。

もしかしたら比叡カレーが今になって効いてきたのだろうか。あるいは扶桑の手料理が悪かったのか。それぞれ大鯨と時雨のおかげで致命傷には至っていないだけで、胃に物凄い負荷がかかっているように感じる。

「もしかしたら遅効性だったか、両方とも……。ともかく、救護所に……」

提督は直感的な身体の危険信号には素直に従う主義である。

自分の助かる道を求めて。ふらふらとした足取りで、彼は神社の方に向かって行った。

★

幸いなことに、提督は無事に救護所に辿りつけた。

テントの中に入った瞬間に倒れこんだが、状況的にはギリギリ間に合ったと言えよ

う。

「提督、大丈夫か。少し胃をやられているそうだが」

ベッドで横になっていると、秋祭りの責任者である戦艦長門がやってきた。ちなみに何故かナース服姿だ。

「おう。長門か。大丈夫じゃないが大丈夫だ。あとなんでナース服なんだ」

「陸奥の提案だ。救護所ならこの格好が最適と言われてな」

「そうか、陸奥は良い仕事をするな」

あまり細かいことをいう元気もないので適当な感想を言う提督。実際、長門のナース姿は様になっていた。調子が良ければ写真の一枚も撮りたいくらいだ。

「そうだろうとも。しかし、胃薬は切らしてないな、今運んでもらっているところだ」

「助かる。ところで、今回の出店の人員を配置したのは長門だったな？」

「うむ。責任者は私だ」

「もう少しどうにかならなかつたのか……」

提督は恨みがましい声音で言った。

一部の店に根本的な人選の問題を感じずにはいられない配置だ。物事には適材適所というものがある。それがわからない長門ではないだろうに。

「提督よ、あれでも頑張ったのだ。最初は比叡と磯風がカレーで、扶桑姉妹が海産物担当

だったところを、なんとかこの状況にしたんだぞ」

「マジか」

「マジだ。それでも提督に負担をかけてしまったのは申し訳ないと思うが……」

「いや、いい。むしろ助かった。ありがとう。俺だったら、止められなかったかもしれない」

どうやら長門に命を救われたことを理解した提督は、素直に礼を言った。

養生してくれ、と言って長門が去ると、すぐに見飽きた艦娘がやって来た。

「お、いたいたクマ」

秘書艦の軽巡洋艦、球磨だった。浴衣姿などところを見ると、祭を楽しんでから来たらしい。

「比叡さんのカレーを食べたと聞いたクマ。こんなことだろうと思ったクマ。ほら、葉クマよ」

「助かる……」

祭を堪能した後に葉を届けに来た秘書艦を咎めることも無く、提督は品物を受け取った。

単純に、段々体調が悪くなってきていて、そんな元気もなくなっているのだ。

「原因は比叡のカレーだけじゃないが、まあ、損害としては低いほうだ」

言いながら薬を飲む。あとはこのままベッドで休んでいれば持ち直すだろう。

こんな状態になったことを除けば、悪くない祭だった。来年もすることがあれば、食事関係だけは絶対にチエツクしよう。

疲労と体調不良でまどろむ意識の中、提督はそんなことを考える。

「ところで、磯風が提督が寝込んでると聞いて、お粥を作ろうとしてるんだけど、どうするクマ？」

「止めてくれ。お願いだから」

とりあえず、その後は球磨のおかげで、本格的に寝込まずに済んだ。

オタ提督と謹賀新年

「帰ってきたぞ……秋雲」

「そうだね提督。私達は帰ってきた」

元旦。鎮守府の入り口にてオタ提督（以下、提督）と駆逐艦の秋雲は深い感慨と共に語り合っていた。

大荷物と共に帰ってきた二人は、共に疲労を滲ませながらも、ギラギラとしたオーラを放っている。

この二人、コミケ帰りである。

「三日間、ご苦労だった。部屋に戻って休むとしよう」

「そうだね。無理矢理時間を作ったから、明日からずっと仕事だしね」

「深海棲艦が大人しくしてくれていて助かった。大規模作戦で頑張った甲斐があったな」

「全くだねえ。さ、部屋に行こう」

昨年秋からの大規模作戦の成果と、コミケに行きたい提督の欲望を原動力とした仕事ぶりのおかげで、深海棲艦の活動は大分収まっていた。

おかげで、今年は提督も年末三日間の祭典に参加出来たというわけだ。

「少し休んだら初詣だな。忙しいことだ」

「普通に休んでればそうでもなかったんだけどねえ」

予定通りなら鎮守府内の神社では秋祭りと同じく賑やかな正月が始まっている。形だけでも顔を出しておく必要があるだろう。

疲れと充実感の伴った足取りで鎮守府内に足を踏み入れると、こちらに接近する影があった。

黒髪の少女。服装から駆逐艦、黒潮であることがわかった。

「提督、待っとったで！」

「なんだ黒潮。俺は部屋に……」

「明けましておめでとさん。今年もよろしゅうな！」

「お、おう。今年もよろしく」

快活な関西弁の挨拶に戸惑いながらも提督は答える。

黒潮の愛想が良いのも元気なものもいつものことだが、鎮守府の入り口で会ったことが解せない。

今日は元旦、自室とか、神社とか、そちらにいるほうがよっぽど自然だ。

「ほんでな。ほんでな」

「な、なんだ？ もったいぶって」

「この前聞いたんやけど。今の時代のお年玉について……」

「なっ……」

提督は絶句した。お年玉、正月に大人から子供に配る現金的なアレだ。一説によると現金を配るのが定着したのは最近で、昔はもつと別の形だったという。

幸い、艦娘達が持っている常識では昔のお年玉だったため、提督はあえてその辺の現代の風習を説明していなかった。

艦娘たちが現代風お年玉を所望した場合、提督の財布にダメージどころでは済まないからだ。

そして今、恐れていた自体が進行していた。

冷や汗をかく提督に向かって、ニヤリと笑いながら黒潮が言う。

「教わったからには、頂きに来ないなあ、と思てな」

「まさか、鎮守府の全員が知ってるのか？」

「まあ、大体。それに、提督がこっそりお金貯めてることも知つとるよ？」

「どうやら手遅れなようだ。新年早々、疲れているのにかんりのピンチだ。」

しかし、こっそり貯めているお金というのは覚えが無い。

「いや、こっそり貯めてる金とやらはマジで覚えがないんだが」

「ホンマにー？　こういう時のためじゃないかって聞いたでー」

黒潮も不思議そうな顔をしていた。誰に聞いたのか知らないが、提督にお年玉用の貯金など存在しない。

「正直、そんな金はないぞ。てか、鎮守府に何人艦娘がいると思ってるんだ、お年玉は流石に無理だ……」

「もう遅いで提督。正月になったから皆、血眼になって提督探し始めてるで」

「なんだと……」

愕然とする提督。どうしよう、病気になったことにして逃げようか、そんなことが頭をよぎる。

その時、提督を救う者の声が聞こえた。

「あ、提督！　帰ったクマね！　とりあえずこっちに来るクマ！」

「球磨か！　助かった！」

見れば、秘書艦の球磨が物陰から提督を手招きしていた。どうやら状況も把握しているらしい。球磨は提督に対する敬意はないが、こういう時におかしなことをしない艦娘、信用できる。

「秋雲！　後を頼む！」

「あ、提督！　ちよつと待ちい！」

「はいはい。黒潮ー、荷物持つてくんないー?」

「ちよ、秋雲!」

秋雲が黒潮を抑え。提督は球磨と共に逃走。

華麗なコンビネーションで、提督はこの場を脱出した。

★

提督と球磨の二人は鎮守府の裏手を駆けていた。

提督には球磨の行き先はわからないが、彼女には明確な目的地があるようだった。

「球磨! どういうことだ! あと、荷物と疲労で大分辛いです……」

「おっと、提督がコミケ帰りだつてことを忘れてたクマ。荷物を貸すクマ!」

色々厳しいことを伝えると球磨が荷物を持つてくれた。

身軽になった状態で走りながら、再び提督と球磨は会話をする。

「それで、どういうことだ! 鎮守府内で現代のお年玉の風習が知られてしまったみたいだが」

「その通りクマ! 大体の艦娘が提督から現金が貰えると勘違いしてるクマよ!」

由々しき自体だ。そんなことをしたら貯蓄の中身が大変なことになる。提督業の給料が悪いわけではないし、提督に貯金がないわけでもないが、お年玉×100以上は出費として痛すぎる。

「あ、提督はっけーん！」

「うお、那珂ちゃん！」

いきなり目の前に軽巡洋艦の那珂が現れた。恐らく、お年玉目当てに提督求めて、鎮守府内を探しまわっていた手合だ。

「提督！　那珂ちゃんは勘違いしてるタイプクマ！」

「やはりか！」

「明けておめでとう！　そして、お年玉ちょうだい！　それで新しい衣装を作るの
おおおお!!」

ポーズ付きで迫ってくる那珂ちゃん。器用だが、怖い。

「球磨！　なんとかならんか！」

「任せるクマ！　那珂ちゃん、後ろに怒った神通がいるクマよ！」

「ひっ！　神通ちゃん違うの、これは……て、いない？」

びくん、と痙攣気味に反応してから後ろを振り向く那珂。勿論、球磨の発言は嘘だ。だが、十分な効果を発揮した。

この隙を見逃す提督と球磨ではなかった。二人は事前に打ち合わせていたかのような動きで、全力で逃走を敢行した。

「ちよつと二人とも、ずるいよー！」

那珂ちゃんの抗議に、二人が返事をする事はなかった。

★

とりあえず、提督と球磨は屋内に逃げ切ることが出来た。

球磨に案内された先は戦艦寮。金剛姉妹がサロンに使っている部屋だった。

「提督、無事に逃げ切れたようので何よりネー」

「ああ、球磨のおかげだな」

「こう見えても優秀クマ」

室内では戦艦金剛がお茶の準備をして待っていた。どうやら、球磨と事前に打ち合わせられていたらしい。

道すがら球磨から聞いたのだが、どうやら提督からお年玉をせしめようとしているのは、駆逐艦を中心とした艦娘らしい。

艦娘の殆どが敵に回ったわけではないと知り、提督は心底安心した。

「ここなら駆逐艦の子はまず近寄らないから大丈夫デース。とりあえず、ティータイムですネー」

「ようやく一息つけそうだ。しかし、自分の部屋に帰りたいな」

「この状況が落ち着くまで難しいと思うクマ」

「一応聞くが、戦艦の連中はお年玉がどうこう言わないのか？」

「戦艦の艦娘はみんな立派なレディだから、そんなこと言わないから安心ヨー」

屈託の無い笑顔で答える金剛。いつも通りだ、嘘をついているようには見えない」

「そうか、安心したよ。とすると、やはり問題は駆逐艦か……」

「一番多い艦種クマね。お年玉を配るのは論外クマ」

「手っ取り早いのは俺にそんな金は無いと切つて捨てることだな。事実だし」

「でも、何故か提督がお年玉用に貯めこんでると勘違いしてるクマねえ」

「まったく、わけがわからん」

提督がお年玉用に金を貯めている。

その噂が流れた根拠が不明すぎた。そんなものはないというのに。

どこから発生した噂なのか、見当もつかない。

「その件ですが、提案がありマース」

「ほう？」

「良ければ、私が提督に迷惑をかけるなど駆逐艦を叱つて、何とか事態を解決します

ヨー」

手際よく紅茶の準備をしながら金剛はそう言った。

「たしかに、金剛さんが本気で怒れば駆逐艦も納得するしかないクマ」

「しかし、金剛が無駄に駆逐艦から不興を買うことにならないか？」

大型艦の艦娘から真面目に説教をしてくれれば、祭り気分で浮かれている駆逐艦共が大人しくなる可能性は高い。

駆逐艦からの金剛の評価が犠牲になるというデメリットが気になるが、魅力的な提案だった。

「そこはそれ、取引ネ！ 提督が私と二人っきりのデイナーに行ってくれるなら……。勿論泊まりも……」

金剛が目をギラギラさせながら言い出した。やばいマジだ。流石英国生まれ、しっかり自分のメリットを確保しに来ている。

「よし。休憩終了。行くぞ球磨」

「わかったクマ」

「ちよ、話はまだ終わって無いデース！」

この場に留まるのは危険と判断した提督と球磨は、再び逃走を開始するのだった。

★

鎮守府内をどうにかこうにか逃げ回った提督と球磨は、執務室に辿り着いた。

ちなみに執務室はノーマークだった。新年早々、提督が仕事をするとは誰も思っていなかったらしい。

「危なかった。危うく金剛の策にはまるところだった」

「多分、一緒に夕飯食べただけでとんでもない話になるクマね……」

鎮守府の艦娘人口が増えたためか、最近の金剛は割と手段を選ばなくなりつつある。提督としては好かれるのは嬉しいが、ちよつと怖い。

「しかし、黒潮を見る限り、駆逐艦は俺がかなりの貯蓄をしてると思つていろいろだが」「誰かが提督のへそくりのことを話して回つたみたいクマ」

「なんだと。青葉か？ いや、つーか、そもそもへそくりなんて覚えがない。ああ、いや、予備費があつたか」

「多分そのことクマ」

走り回つて血の巡りがよくなったのか、ようやく提督は一つの可能性に思い至つた。

黒潮が言つていた提督の貯金というのは、予備費のことではないだろうか。

これは提督と大淀が大規模作戦時に使うために最近準備した予算で、今のところ手を付けられていない。

相応の金額ではあるが、提督が個人的に使える金ではない。

疑問としては、提督と大淀しか知らないはずのこの予算のことが、どこから漏れたかということだが。

「つまり球磨よ。黒潮は俺と大淀が密かに作つた予算のことを知つたということだな」

「そうクマね」

「あの予算については俺と大淀しか知らないはずだ。駆逐艦には漏れような情報ないんだが」

「きつと、青葉あたりがすつば抜いたクマよ」

「なあ、球磨」

提督はゆつくりと、確認するための口調で問いかけた。

「そんな機密性の高い情報でも、秘書艦なら閲覧できるなあ、と思うんだが」

「勘のいい提督は嫌いクマよ」

わざわざどつかで聞いたような台詞と共に、球磨は肯定した。

今回のお年玉騒動の仕掛け人は、球磨だ。

「目的はなんだ？ お年玉か？」

「そんなもんじゃないクマ。ちよつと提督が困ってるところを解決して、個人的に謝礼を貰えないかと思っただけクマ」

「もつと酷いじゃねえか」

「いやあ、ここまでの騒ぎになるとは思ってたなかったクマ」

反省の色無しといった様子で、球磨は言った。

それを見て、提督の腹は決まった。今回はこいつに責任を取らせよう。

「……施設の拡充か宴会でケリがつくように話をつけてくれるなら、不問にするぞ？」

「何を言ってるクマ。状況的には提督の方が不利……」

状況というのは駆逐艦が提督に金があると信じ込んでいることだろう。だがしかし、そんなことは問題ではない。

球磨の勘違いということで火消しでもさせればいいのだ。「提督にそんな金はない」という事実が知れ渡ることになるかもしれないが、まあ、その点は仕方ないだろう。

そんなわけで、提督はこの場にいないがこの件で一番怒るであろう人物の名前を出して、球磨を無理矢理動かすことにした。

「大淀に言うぞ」

「球磨は有能クマ。任せるクマ」

即答だった。大淀は怒るとマジで怖いのだ。

その後、球磨が鎮守府内の館内放送で謝罪を流したりして、なんとか状況は解決した。

オタ提督と夜の見回り

「さて、見回りの時間だな」

日付が変わる頃、執務室でコーヒーを飲みながら、オタ提督（以下、提督）は厳かに宣言した。

鎮守府の夜間見回りは提督や一部の艦娘の当番業務であり、今日は提督が当番の日だった。

「行くとするか……」

手元の書類に目を通してから、見回り用のライトを手に取り、執務室の外へと向かう。最初に向かう先は、軽巡察。

長い夜の始まりだ。

☆☆☆

提督が夜の見回りで一番最初に軽巡察に向かったのは理由がある。

夜になると騒がしい艦娘がそこにいるからだ。

軽巡洋艦川内。

これまでの再三の注意とお仕置きにも関わらず、彼女にはあまり反省が見られない。

正直、もう面倒くさいから放置したいという意見もあるのだが、規律の問題なのでそうはいかない。

川内が夜戦に出撃していない時は、当番は真つ先に釘を差しに向かう、今も昔も変わらない光景である。

提督が軽巡察に近づくと、叫び声が聞こえてきた。「夜戦！ 夜戦！」と狂ったように連呼するその声は、間違いなく川内のものだ。

「チイ、もう発作が始まってやがる。早く止めないと……」

早く止めないと他の艦娘たちが抗議に現れて大事になるかもしれない。下手をすれば戦闘だ。それだけは避けなければならぬ。

提督は珍しく使命感を燃やしつつ、早足で現場に向かう。

その途中、寮の目の前で、白い影が目に入った。

慎重にライトを向けてみる。

「む……響か。驚いたぞ」

「あまり驚いているようには見えないけどね。こんばんは、司令官」

そこにいたのは駆逐艦の響だった。練度が上がって全身真つ白のヴェールヌイとなつているのだが、「呼びにくいから」という理由で鎮守府では響の名前のまま呼ばれている。

「たまたま叫ばなかったただけだ。こんなところで何をしている？ 駆逐艦寮は向こうだぞ」

実際、幽霊でも出たかと思つてかなりビビつた提督である。場所柄、幽霊の一つや二つ、発生してもおかしくない。

「私はあまりにも騒がしい軽巡洋艦に抗議に来たのさ」

言いながら、響はポケットから怪しげな錠剤を出してみせた。

「あの、響さん。それは何でしょう？」

錠剤から不穏な気配を感じた提督。何故か自然と敬語になった。

質問に対して響は真顔で答える。

「……静かにさせる、お薬さ」

やばい。この人滅茶苦茶怒ってる。

提督はそう直感した。どうやら川内は連日の騒音で、怒らせたら不味い子の逆鱗に触れてしまったらしい。

これは止めねば。最悪、川内が文字通りの廃人にされる。

「響、それを使う必要はない」

「なんでだい？ こいつを使えば、とても静かになるんだよ」

「大丈夫だ。俺がこれから川内をきつちり叱つてやるから。大丈夫だ」

安心感を出すために2回大丈夫と言ったが、言ってる本人は気が気でない。鎮守府で事件を起こすわけにはいかない。

「本当かい？ 川内さんは言ってる聞く人じゃないと思うけれど」

「俺を誰だと思ってる。この鎮守府の提督だぞ。やるときはやる」

「……わかった、司令官を信じるよ」

しばし考えた後、ポケットに薬剤を戻しながら、響はそう言った。

「他の艦娘に迷惑をかけてしまつてすまないな」

「まったくだよ。司令官が止めなかったらソ連式の手段で静かにさせてたところさ」

「ソ連式って……」

その薬剤を没収した上で響を捕まえるべきかどうか、そんな考えが提督の脳裏に浮かぶ。

そんな提督の思考に気づいたのか、響が笑顔で言った。

「大丈夫、危険な薬品じゃない。天然由来の成分さ」

まるで安心できない回答だった。

「響さん、あまり極端な手段は控えて頂きたいのですが」

「わかつてる。川内さんに伝えておいてね。もう少し静かにしてくれないと、そのうち粛清されちゃうよって」

「肝に銘じておきます」

提督の言葉に満足気に頷きながら、響は駆逐艦寮へと去って行った。

見送りながら、提督は思った。響は怒らせないようにしよう、と。

ちなみにその後、川内は過去最高レベルで提督に説教をされた上で、しばらく遠征を申し付けられた。

その光景を目撃した艦娘は「まるで提督が何かに怯えているみたいでした」と語ったと言う。

☆☆☆

軽巡察の用件を終えた提督が次に向かったのは、演習場方面である。演習場は広いこともあり、余計なイタズラを目論む艦娘が少なくない。見回りが必要だ。

ライト片手に海沿いを歩いていると、灯りの下に座り込んでいる影が目に入った。

「あれは……赤城か？」

海を見ながら座り込んでいるのは航空母艦赤城だった。

鎮守府における空母の代表格ともいえる彼女が、こんな深夜に何をしているのだろうか。

少し観察して、提督は気づいた。

「牛丼を……食っている？」

赤城は一人で海を見ながら牛丼を食べていた、それも悲しそうに。いつたいたいということだろう、不気味な光景に困惑する提督だが、あることに気づいて全てを理解した。

「あれは、某牛丼店のテイクアウト……っ」

少し前、鎮守府と某牛丼店のコラボレーション企画があった。

牛丼とは豪快にかきこむ食事だ。そうなるとコンビニコラボの時と違って、大食漢の艦娘がキャンペーンに駆り出させると多くの者が想像していた。

大食漢の艦娘といえば赤城だ。自他共に認めるところである。

きつと彼女は、牛丼店コラボに自分の出番があると思っていたのだろう。

だが、現実にはそうはならなかった。

牛丼店とのコラボに選ばれたのは、割といつもメンバーだったのである。

今、赤城は一人で、自分がコラボに選ばれなかった寂しさを噛み締めているのだ。牛丼を食べながら。

「……は異常なしだな……」

傷心の艦娘を見逃す情けが、提督にも存在した。

☆☆☆

「さて、気を取り直して……つと」

言いながら振り返った時、演習場に強烈な光の帯が見えた。

「あれは神通の夜間訓練か……」

近づいて見れば、神通が探照灯をつけながら、駆逐艦達へ猛烈な訓練を施していた。

この鎮守府の神通は駆逐艦がゲロを吐いても止まらない鬼教官である。提督がうっかり艦娘だったら即日死んでいると思うレベルの訓練を行う、恐ろしい存在。

正直、気の毒だ。そんな思いで訓練風景をしばらく見つけていたが、あることに気づき、慌てて視線を外した。

提督に気づいた神通が「提督がいらつしやっていますね。皆さん奮起しましょう」とか言つて、訓練のレベルが跳ね上がりかねない。

「……も異常無しと。さて、あとは……」

そう言つて演習場を離れようとしたところで、爆音が響いた。

「な、なんだ!」

音の方を見る。場所は演習場の敷地内だが、海ではなく陸の方、グラウンドになつて
いる箇所から光の帯が見えた。

音と光、その2つから、提督は即座に原因を把握した。

「……、今度は那珂ちゃんか!」

この音と光は、那珂ちゃんの夜間ライブだ。

走って現場に行くと、グラウンドのど真ん中に簡易ステージとスピーカー、それに探照灯を設置した那珂ちゃんが歌って踊っていた。

音に反応した駆逐艦がすでにサイリウムを握りしめて周囲に集まり始めている。すごい練度だ。

「川内に神通に那珂ちゃんに、川内型は夜になるとおかしくなるな……」

ある意味、姉妹艦らしくはある。にわかにも熱を帯び始めたライブ会場を見ながら、そんな感想が浮かぶ。

「……いやまて、神通の夜間演習はともかく、このライブは計画されてたか？」

那珂ちゃんのライブは規模にもよるがそれなりに機材を使う。故に事前申請は必須だ。

少なくとも、今日この時間のライブについて、提督が許可を出した覚えはなかった。

携帯を取り出して、秘書艦に連絡をする。優秀な秘書艦は数コールで電話に出た。

「球磨、俺だ。この時間に那珂ちゃんのライブは計画されていたか？」

「そんな予定はないクマ。今起きている騒ぎはゲリラライブになるクマ」

「……やはりか。すぐにこちらに人を回してくれ。あと、念のため大淀にも連絡を」

「那珂ちゃんを支援してる子がいるクマね。多分、ファンクラブの駆逐艦クマ」

「わかっているなら話は早い。駆逐艦の逃走経路を塞ぐのも忘れるな」

申請なしのイベントを見過ごしたとあつては鎮守府の権威に関わる。最悪、那珂ちゃんのアイドル活動停止まである。

ここは提督として徹底した行動が必要な場面だ。

「了解クマ。提督はしばらくそこで曲を聞いているフリでもしてるクマ」

「任せろ。得意技だ」

そう言つて、提督は懐からサイリウムを取り出した。

サイリウムの扱いなら、鎮守府の誰よりも熟知している。この場に溶け込んで、相手の油断を誘うことなど容易い。

十分後、鎮守府内で前例がないレベルの大捕り物が始まった。

☆☆☆

午前二時。那珂ちゃんゲリラライブ事件の関係者を一通り捕縛したら、そんな時間になつた。

鎮守府内を駆けまわつて疲れた提督とまだまだ元気な球磨は執務室に帰還した。

提督はソファアに腰掛け、球磨はお茶の準備などを始める。

「疲れた……」

「お疲れ様クマ。もう交代の時間だから提督は休むといいクマ」

「うむ。有り難い……。一服したら、部屋に帰るかな……。！」

球磨から交代を告げられた提督は、意外にも元氣そうな返事をした。

それを不審に思つた球磨が問いかける。

「提督、なんか妙に元氣クマね」

「うむ。新しく発売したエロゲが楽しみでな。寝る前にやると決めていた」

この提督ならよくある発言だ。趣味の時間になつた瞬間、体力が回復するのもオタクならよくあることだ。

「そうクマか。趣味があるのは良いことクマ。ほどほどにするクマよ」

「うむ」

話しながら球磨がテーブルにお茶を置いた。リラックス系のハーブティーだ。金剛あたりの手配したものだろう。

ハーブの香りを楽しみつつ、提督は語る。

「しかし、楽しみにしていたゲームを前にすると若い頃の情熱が蘇ってしまったな」

「エロゲじゃなければもうちよつと肯定的になるんだけどクマ」

「個人的な楽しみだ……。迷惑はかけて……。なんかいきなり眠くなつて来たぞ」

お茶を少し飲んだ提督がそんなことを言い出した。

思つたより早く効いたクマ、と眩きながら球磨が答える。

「ただでさえ疲れてる提督が睡眠不足になったら困るから、一服盛らせてもらったクマ。響に感謝クマ」

「なんだと……」

さらつとんでもないこと言いやがる。だが、眠気が凄い。抗えない。

よりによって響の薬とは、これがソ連の力……。

抗いがたい眠気の中で、色々考えながら、提督は精一杯言葉を絞り出そうとする。

「くそ、エロゲが……」

そう言いながら、提督はソファに倒れこんだ。そのまま安眠に突入。

「よし、寝たクマね」

完全に眠っている。その点を確認した球磨は、提督を軽々と持ち上げた。お姫様抱っこだ。

「やれやれ、疲れてるのに無理しようとするからクマ」

薬は入れたが、ごく少量だし、弱いものだ。提督が疲れている時用にと用意されているものである。

つまるところ、提督は仕事でそれなりにお疲れだったわけである。日中の執務の上に、先ほどの大捕り物が相当効いたのだろう。

「趣味の時間は持たせてあげたいけど、提督に寝込まれたりすると本当に困るクマよ」

趣味の時間が削られてしまうのは申し訳ないとは思いますが、そこは我慢して貰うしかない。

なんだかんだで提督に何かあると鎮守府が機能不全に陥る可能性が高い。故に、提督の休養はとても重要なのだ。

幸せそうに熟睡する提督を運びながら、自分にしか聞こえない声で、球磨は言う。

「そのうち、球磨達が提督にいくらでも趣味の時間を作れるようにしてみせるから、今は大人しく休むクマー」

オタ提督と艦娘たち

駆逐艦吹雪。吹雪型一番艦にして、鎮守府の最古参にして、初代秘書艦である。

オタ提督（以下、提督）と共に鎮守府で長い期間を過ごして彼女にとつて、ある問題が生じていた。

鎮守府内の空気が妙なのだ。なんというか、誰もが浮き足立っている。

原因ははっきりしている、提督だ。

提督の様子がおかしいのだ。いや、様子がおかしいのはいつものことだが、なんというか、質が違うのだ。

最近の提督は、何やら真面目ぶった顔をして良く外出する。戻ってくるといつも通り奇行に入りつつも、たまに深刻な顔をしたりする。

目撃されるのは鎮守府のそこかしこ。当然、艦娘も提督の常ならぬ姿を目にするわけである。

あの提督がおかしい。おかしいのはいつものことだが、異常なおかしさだ。

そんなことがあって、提督はじめ、鎮守府全体が何だか変な雰囲気なのである。

流石に気になったので提督に直接聞いてみたが「何でもない」みたいな回答だった、嘘

だと思う。ちなみに一緒にいる秘書艦に聞いても「知らないクマ」とのこと。

提督はともかく、球磨の方は本当に知らない様子だった。

このままではいけない。

鎮守府内の変な雰囲気を打開する術はないかと、吹雪は相談できそうな艦娘のところに行くことにした。

最初に行ったのは食堂だ。

そこには戦艦金剛がいた。気さくで話しやすく、年長者らしくアドバイスをしてくれる。こういう時、頼りになる存在である。

中に入ると金剛が手招きした。向かいの席に座ると、周囲の艦娘が聞き耳を立てているのを感じる。皆、吹雪が何故ここに来たか気づいているのだろう。

「ブツキー、ここに来たのは提督の件ですね？」

「あ、はい、そうです。やっぱりおかしいですよね」

私物の紅茶セットを使って、お茶を用意してくれる金剛。いつも通りの陽気さだが、雰囲気に気遣いを感じる。

「それで、提督の落ち着きがない原因はわかったんですか？」

「司令官に落ち着きが無いのはいつものことだと思えますが……」

「そういう意味じゃないヨ。わかってるでシヨ」

咎める金剛に、苦笑しながら吹雪が答える。

「直接聞いてみたんですが、「まだ話せない。悪いことじゃない」の一点張りです。ああ見えて、仕事に関する口は硬い人ですから……」

「ガツデム。提督でそれなら、球磨は？ 吹雪なら何か教えてくれるでしょう？」

「いえ、よく知らないそうです」

「大淀は？」

「聞けると思いますか？」

軽巡洋艦大淀。秘書艦の補助みたいなことをしている艦娘であり、事務能力の高さから、下手をすると秘書艦以上の情報を持っていてもおかしくない。

しかし、なんとなく怖い人物である。あと、秘密は絶対に喋らないタイプでもある。……大淀から聞き出すのは、ちょっと勇気がいる行為すぎますネ。ともあれ、秘書艦にも伝えられないようなことが進行中ってことですカー」

「そうですね。大規模作戦前という雰囲気ではありませんし、何が起きているのかわかりません」

「ふふふ、これはアレだよ。アレ」

「あれ？」

いきなりニヤニヤしながら金剛は言い放った。それも大声で。

「ケツコンデース！ ケツコンカツコガチ！ 提督もいい歳だから身を固める覚悟を決めたのでしよう！ 相手は勿論、私ネー！」

「いえ、それはないと思います」

即答だった。紅茶を口にしながら、あくまでも冷静に吹雪は金剛の妄言を否定した。

「ブツキー、なんでまた即答デスカ！ まさか、貴方……」

なんか驚愕している金剛。何を考えているのかわからないが、吹雪はあくまでも冷静に答える。

「いえ、別に私が相手とかではなく、司令官が本当に結婚するならわざわざ隠したりしないでしょうし、そこかしこで兆候があると思うんです。式の準備を相談するとか。あの人、自分の情報に関しては脇が甘いですし」

過去のことを思い出しながら吹雪は答える。提督は自分のことは話したがらないように、必要があればベラベラ話す。たまに必要がなくてもベラベラ話したりもする。おかげで古参の艦娘は提督の出身地などに無駄に詳しくなったりもするのだ。

「さ、流石は初代秘書艦ですねー。説得力がありマース。それじゃあ、結局提督は何をやってるんデショー」

「それがわからないんですよねえ……」

吹雪はため息を一つ。同時に、聞き耳を立てていた一同もため息をついた。

☆☆☆

収穫無しで食堂を出た吹雪が、次に向かったのは工廠だった。

目的としている相手は軽巡洋艦夕張だ。彼女はなんだかんだで提督と仲が良い（と吹雪は思っている）ので相談するべきだろうという判断したのだ。そして、工廠なら明石経由で変わった情報が入っていてもおかしくない。その辺りも期待しての行動選択である。

工廠にある夕張に部屋にやってくると、彼女は何やら作っているところだった。

中を見ると、小さな神社といった感じのものが室内に完成していた。

吹雪に気づかないまま、その社の前で夕張は厳かに宣言する。

「……完成、したわ」

夕張は感動に打ち震えていた。渾身の作品らしい。

感動の瞬間に悪いと思いつつも、話を進めないといけなかったので声をかけることにする。

「あの、夕張さん？」

「あら、吹雪じゃない。どうしたの？」

ようやく気づいてくれた夕張。（提督以外には）いつも通りの気さくな感じで反応してくれた。

「ちよつとお話に。というか、なんですそれ？ 社？」

「これは、こう使うのよ」

言いながら夕張は部屋の隅からダンボールを持ち出して来た。

嚴重に梱包されたそれから出てきたのは見たことの無い機械だった。

黒っぽくて、古い感じの。恐らくゲーム機だろうか。

「なんですか、それ？」

「これは、ご神体よ」

「ご神体？ その社のですか？ 機械に見えますけど」

「またの名をメガドライブ。セガの魂が形になった名機よ。これをご神体とすることで私の信仰はようやくスタートする」

「はあ……」

わけがわからないのでスルーすることにした。オタクの妄言に付き合うと酷い目にあうと、吹雪は経験上よく知っていた。

「個人的なことだから吹雪ちゃんにはわからなくていいの。それより、お話って何かしら？」

「司令官のことです」

「チツ……」

一瞬で、空気が凍った。夕張の目が爆雷ソナーガン積みで潜水艦を前にした時みたいになった。怖い。

「あのアホのことなら、吹雪ちゃんが一番良く知ってるでしょ？ 付き合い長いし」いきなり投げやりな態度になる夕張。この人、割と本気で提督を嫌っている時があるなあ、と思いつつ話をする。

「そ、そんなことないですよ。最近はあまり話す時間もとれませんし、すごく忙しそうで」

「……そういえば、なんか浮足立ってるわね。私への嫌がらせも完全に無くなったし」今気づいたという風に言う夕張。どうやら、何かしら事情を知っているようには見えない。

「その様子だと、夕張さんが何か知ってるわけではないんですね」

「知るわけじゃないでしょ。ああ、明石さんから何か聞いてると思ったのかしら？ あの人も多分知らないわよ。秘書艦と大淀はどうなのよ？」

「球磨さんも何も聞いてないそうです。大淀さんはちよつと怖くて」

「なるほどねー。ま、大淀さんは知ってても教えてくれないでしょうね。えーと、そうだ。鳳翔さんには聞いてみた？」

意外な名前が出てきた。軽空母鳳翔は鎮守府内で居酒屋を運営しており、たまに提督

が出入りしている。

鎮守府のおかんと言われる彼女になら、提督がポロつと情報を漏らしている可能性は十分にある。

「鳳翔さんですか。それは盲点でした。提督、たまに鳳翔さんのところに行ってますもんね」

「私たちには話せないようなことを話してる可能性はあると思うわよー」

「そうですね。行ってみます」

我が意を得たりとばかりに、部屋を出て行く吹雪。

それを見送って、夕張は一人呟く。

「ま、吹雪ちゃんがどうしてもって言えば、教えてくれると思うけどね。あのアホは甘いから」

とりあえず、夕張は社にご神体の設置をする作業に入った。早くこの場を清めたくて仕方ないのだ。そう、SEGAのために。

☆☆☆

居酒屋鳳翔の営業は夜がメインだが、ランチタイムもやっている。

幸い、まだ開いている時間帯だったので、鳳翔に会うことが出来た。

「いらっしやい、吹雪さん」

「こんにちは。鳳翔さん。あ、長門さん、こんにちは。お昼ですか?」

「先ほど食べ終わったところだ。それと、少し世間話をな」

カウンター席には戦艦長門が座っていた。彼女はたまにここでランチを食べることがある。

「あの。お邪魔ですか?」

「そんなことはないわよ。吹雪さんも、提督のことで話があるのでしょう?」

カウンターにお茶とお菓子を用意しながら、席に誘う鳳翔。どうやらここに来た理由はばれているようだった。

「私も? 長門さんも提督のことを話してたんですか?」

「うむ。最近の奴は何やら浮足立っているからな。鳳翔さんなら何か知らないかと思っただのだ。その様子だと、吹雪も同じ用件だったようだな」

「ええ、まあ。司令官の様子がおかしいのは確かなんですが、誰も理由を知らないみたいで」

カウンターに座り出されたお茶を飲みながら言う吹雪。ちなみに出されたお茶菓子は間宮羊羹だった。

吹雪たちの会話にくすくす笑いながら鳳翔が反応した。

「皆に心配されて、提督は幸せ者ですね」

「む、無闇に心配させる提督にも問題がある」

「怪しい動きは良くしますけれど、今回みたいのは初めてなので、ちよつと心配で」

むつとして言う長門に、不安そうに答える吹雪。

鳳翔はおかんの呼び名にふさわしい微笑と共に二人に言う。

「残念ながら、私も提督から何かを聞いているわけではありません。お二人が知らないようなことを、私が知っているなんてことはありませんよ」

「そうですか……」

「案外、出世する話でも出ているのかもしれないな。提督は上層部と仲が良いみたいだし」
「……あり得なくはないですね」

提督は鎮守府のために、上層部に取り入っていた。それが仇になったのかもしれない。
い。

出世は良いことだと思うが、提督が鎮守府に居なくなったらどうなるのだろうか。あまり意識しなかった状況に、吹雪は漠然とした不安を覚える。

その表情に気づいたのか、鳳翔がフォローしてくれた。

「大丈夫ですよ、吹雪さん。あの人は事案になるようなことはしても、本当に困った事件は起こさなかつたでしょう」

その通りだった。あの人はギリギリ信用できる人だ。かなりギリギリだが。

「ありがとうございます。鳳翔さん、長門さん。とりあえず、司令官が話すのを待とうと思えます」

「うむ、何か困ったら相談するといい」

「また遊びに来てね」

実質的な収穫はなかったが、精神的な収穫を得て、吹雪は鳳翔の店を出た。

☆☆☆

駆逐艦寮に戻ってきた吹雪は、庭で深雪、白雪、初雪の三人と話していた。

「結局、司令官から話すのを待つことにしたんだね」

「うん、話さないのには理由があると思うし」

「めんどくせーな。直接聞けばいいだろ」

「司令官、意外と口が堅いから教えられないことなら、教えてくれないと思う」

吹雪型のいつもの仲間とそんな会話をしていると、話しかけてくる声があった。

「いたいた。提督、吹雪がいたクマよ」

「おお、ここにいたか」

声の主は二人。どちらもよく知る人物だった。

見れば、提督と秘書艦がこちらに向かってきていた。

何か用だろうか、呼び出しせずに二人が直接やって来るのは珍しい。

「し、司令官。どうしたんですか？」

突然の来訪に驚く吹雪。対して、提督はいつになく真剣な顔つきだった。

「吹雪、大事な話がある。聞いてくれ」

「ふえつ、大事な話ですか？　ここでですか？」

大事な話し。この男から個人的にされるそんな話題は数少ない。まさか、金剛の言っていた結婚（ガチ）か、などということが脳裏をよぎる。

なんとなく、周囲の仲間達も「吹雪なら、あるいは……」みたいな顔をしている。同じような妄想をしたらしい。

流石にいきなり結婚（ガチ）はないにしても、吹雪個人に対する真剣な話であるのは間違いない様子。ただならぬ状況である。

「あの、司令官。他の場所で……」

「ここで十分だ」

はつきりとした口調で言う提督。やはり、顔つきも口調も真剣だ。更に、少し緊張しているようにも見える。

注目する吹雪型。期待するな、期待するなと自分に言い聞かせつつも、何かを期待してしまふ吹雪。

ゆつくりとした動作で、提督が懐から何かを取り出す。サイズ的に良い感じ。いや、

まさか、いやそんな。

「見てくれ、俺が学生の頃から発売を待っていたライトノベルの最終巻がついに発売したんだ。この喜び、吹雪ならわかるだろう……」

懐から取り出した文庫本片手に、喜色満面で提督は語りだした。

「死ねばいいのに……」

怒りを通り越して、感情を失った顔で、吹雪が握り拳を振りかぶった。

☆☆☆

結果として、吹雪が心に傷を負った一件で、提督の落ち着きが無い騒動は幕を閉じた。

別に提督はライトノベルの件だけでそわそわしていたわけではなかった。

「心配をかけていたようだから」と前置きした上で、ついに事情を話してくれたのだ。話の内容は、この戦いについてだった。

艦娘達の戦いは無駄では無かった。

度重なる深海棲艦との戦い、その棲家への攻撃。

自分達が勝っているのか負けているのか、それすらも判然としない戦いの日々。だが、そうではなかった。

人類が深海棲艦相手に勝利を重ねたのは無駄ではなかった。

あの日、吹雪にぶつ飛ばされた後、提督は教えてくれた。

「太平洋の向こうの艦隊と連携し、深海棲艦を殲滅にかかろ」

鎮守府の人員は再編成され、静かな海を手に入れるための戦いは次の段階に入る。

つまりは、そういうことだった。

そして、その前準備として、吹雪達は南に向かうことになったのだ。

☆☆☆

「少しずつ、人が増えて来ましたね」

「賑やかになるのは良いことネー。準備で忙しくて出撃できませんですけどネー」

「準備が整えば、きつと忙しくなりますよ」

「私達の頑張りで平和が近づくなら、望むところデースー！」

胸を張って豪語する金剛。

とある南の島。建設中の泊地、鎮守府と比べるとかなり簡素な執務室から海を眺めながら、吹雪と金剛はそんな会話をしていた。

大規模な人員の再編成の結果、吹雪と金剛は新たに作られる泊地にやってきた。

二人の他にいるのは駆逐艦と軽空母が数名に夕張と、まだまだ小さな基地である。

人も物も、全てこれからの場所。

まるで、提督と吹雪が来たばかりの頃の鎮守府のような場所だった。

「ところで、吹雪。時間の方はどうですか？」

金剛に言われて吹雪は時計をチェック。

予定されていた時刻が近づきつつあることに気づく。

「あ、そろそろですね。迎えに行かないと」

「オッケー！ 先に行ってるデース！」

「金剛さん！ もう、私達も仕事があるんですよ」

素早くドアから出て行った金剛に吹雪は抗議する。しかし、彼女は物凄い速さで建物を出て、港に向かってしまった。

「まったく、自分に素直なんだから……」

呆れながら、窓の外、港の方を見ると、一隻の船が入ってこようとしていた。

港に入ってきた船には、この泊地の指揮官となる人物が乗っている。

その功績を認められて出世した上での後方勤務を蹴って、わざわざ最前線の基地にやって来るかなりのアホだ。

周囲の人間からは相当言われたらしい。わざわざ前線に出るなんて、正気ではないと。

しかし、本人はそんなことよりも、アニメの録画を気にしているに違いないと吹雪は確信していた。そういう人なのだ。

艦娘としての吹雪の目には、その船を護衛している艦娘達もよく見えた。

旗艦は軽巡洋艦。球磨型の一番艦だ。どうやら、彼女もここに来ることが出来たらしい。きっと、やってくるなり、そのまま執務室を仕事場にするのだろう。

あの二人がいるのだから、そのうちこの基地は、以前の鎮守府のように賑やかになるかもしれない。

そんなことを考えながら、港に船が着いたのを確認した吹雪は、館内マイクのスイッチを入れる。

皆に伝えなければならぬ。新しい戦いが始まったことを。

「提督が鎮守府に着任しました。これより、艦隊の指揮を執ります」

オタ提督と瑞雲祭り

かつてのこの島を知る人たちは、口々にこう言う。

「鎮守府が出来て、提督が来て。別世界になった」

元々は艦娘も鎮守府も無く、深海棲艦に怯えて暮らすだけだった島。

そんな島に、艦娘が来て、鎮守府が出来て、劇的に変わった。

海は安全に、人と物は沢山来て、賑やかになった。

鎮守府は少しづつ大きくなり、艦娘も珍しい存在ではなくなった。

それらは全て、一人の男の手腕だと言われている。

鎮守府の最高責任者、提督。

この島の鎮守府にいるその男は、オタ提督と呼ばれていた。

○○○

「なんか、おかしいな」

鎮守府の司令室から南の島の海を眺めながら、オタ提督は呟いた。

机の上には麦茶とエロゲ雑誌、そしてタブレットPC。どれも本土から取り寄せた貴重品である。この僻地にもインターネットも最近ようやく開通した。鎮守府の文明開

化に提督と艦娘達は宴を開いて喜んだものだ。

提督がこの島にやってきて、そこその時間が流れていた。当初は本土に比べて慎ましすぎる施設だったこの鎮守府も、幾度かの作戦と設備増強を経て、かなりの規模になっていた。

当然、鎮守府の要たる艦娘もかなり増えているのだが。

「妙に静かだな……。もつと賑やかなはずなんだが」

この日の鎮守府は静かすぎた。

常ならば出撃、演習、遠征、その他諸々の任務で艦娘が忙しく働いており、賑やかな場所だ。

これは何かある。

事実確認のため、提督が秘書艦の球磨を呼ぼうと思ったその時だった。

「大変だクマー！」

秘書艦が扉を勢いよく開けて入ってきた。口調に似合わず冷静な彼女らしからぬ様子で、提督の目の前にやってくる。

「そんなに慌てて何があった。いや、確かに鎮守府の様子はおかしいが……」

「こ、これを読むクマー！ 大変な事態だクマー！」

そういつて球磨が提督に渡したのは一通の手紙だった。

既に開封済みの中身を見ると、見事な達筆で簡素な文章が綴られていた。

『かねてから要望していた「瑞雲祭り」の企画にゴーサインが出たので本土に帰ります。また、瑞雲祭り成功のために、人員も少し借り受けます。大丈夫、少しくらい人手が少なくても提督なら出来る。』

瑞雲を信じる。

瑞雲魂と共にある伊勢型航空戦艦 日向』

最初から最後までわけのわからない手紙だった。

「なんだこりゃ。わけがわからねえよ……」

「本土に問い合わせたけど、その手紙の通りらしいクマ。日向さん達がテーマパークを乗っ取る形で瑞雲を展示したりとやりたい放題するらしいクマ」

「マジかよ。凄い時代だな。って、鎮守府が静かなのは日向のせいか！ 誰がいなくなっただけだ！」

瑞雲祭りとやらは気になるが、それ以上に鎮守府の戦力が問題だ。瑞雲が絡んだ日向は何をするかわからない。

「五航戦に大井と北上、あと第七駆逐隊と明石さん、金剛さん達も全員いないクマ」

「主力がごっそり抜けてるじゃねえか……」

「あ、あと鹿島さんもないクマ。最近、ようやくこつちに帰ってきたクマのに」

「あいつ、もう本土の鎮守府勤務でいいんじゃないかねえかな……」

練習巡洋艦の鹿島はその外見からか人気のある艦娘だ。おかげでコンビニやら何やらのイベントで殆ど本土にいる。

一応、所属はこの鎮守府なのだが、殆ど意味がない。わざわざ南の島に返ってくるのが気の毒な程だ。

「と、とにかく現状の戦力を確認だ！　こんな時に攻め込まれたらたまらん！」
「了解クマー！」

二人は慌てて執務室を飛び出した。

○○○

一時間後、執務室に戻った提督と球磨は軽く絶望していた。

「伊勢と鈴谷と熊野もいないじゃねえか。あと一航戦……」

「鎮守府の戦力が半減どころの話じゃないクマ。それと、他の鎮守府からも何人か持つてかかてるみたいクマ」

「日向のやつ、本気だな……」

何が彼女をそこまでさせるのか。瑞雲か。全てはあの水上偵察機のためか。

「どうするクマ？　戦艦と空母無しは不味いクマよ？」

日向の連れ去った戦力は鎮守府の全戦艦と空母が含まれていた。多少の戦力ダウン

なら持ちこたえる自信がある提督でも、これは辛い。

「こうなったら……。本土に行つて無理矢理連れ戻す」

「やはり……。それしかないクマか」

「ああ、俺が本土にいつて話をつけてくるから、ここは任せた。なに、すぐに帰つて……。」「何言つてるクマ。行くのは球磨に決まつてるクマ」

二人の間に電撃が走つた。

南の島の鎮守府は便利になりつつあるとはいえ、本土に比べれば不便だ。

そして、最前線の提督と秘書艦という立場上、二人とも本土の土は滅多に踏めない。

仕事であると同時に、これは貴重なチャンスでもあるのだ。アレとかそれとか、二人とも本土に色々と用件が溜まつている。

特にサブカル関係の供給の少ない提督にとつては死活問題である。あまりの供給不足で、最近など夕張と仲良くなりつつあるくらいだったのだから。

「いいか球磨。このような重大事には提督自ら事にあたるべきだ。そうすることで、迅速に物事が解決する。優秀な君ならわかるだろう?」

「提督は鎮守府のみならず、この地方の要クマ。いなくなるだけで士気に関わるし、戦力が減つた今こそやり手と評判の手腕を発揮する局面クマ。ここは秘書艦に全てを任せるのが最良クマ」

「……………」

双方睨み合い譲らない。気心の知れた二人である。妥協の余地が無いのは明らかだった。

「話し合いは無駄……か」

「先に港に着いた方が勝つくマね……」

一瞬で勝負の内容が決まった。

先に港に到着した方が本土行きの船に乗れる。

提督と艦娘、身体能力の差はある。

しかし、オタ提督にその常識が通用するとは限らない。

どちらが勝つかわからない。順当な勝負である。

「……………」

互いに様子を見る提督と球磨。一触即発の空気が執務室内に満ちる。

その時、戦場のような緊張感を打ち砕くものがあつた。

「大変です！」

室内への新たな来訪者である。

ノックも無く入ってきたのは、駆逐艦吹雪。日向に連れ去られず残っていた彼女は、

物凄く慌てていた。

「え、あ、なんです、この空気？ 喧嘩ですか？」

「いや、違う。大したことじゃない」

「よくあることクマ。それで、何が起きたクマ？」

彼女を見るなり、いつもの態度に戻る二人。切り替えの速さは流石だった。

「えっと、港に本土からの援軍が来ました。雲龍さんとか、扶桑さんとか。あと、手紙です。大淀さんから」

そう言つて、吹雪は一通の手紙を渡してきた。こちらは日向からのものと違い、未開封である。

「大淀か。事態を察して、援軍を寄越してくれたんだらうな……」

「流石は大淀さんだクマ」

二人とも喜んでいるが目は笑っていない。貴重な本土行きを逃したのだから当然だ。

「それで、なんて書いてあるクマか？」

「待て。今開ける。ああ、吹雪も一緒に読むか？」

机からペーパーナイフを取り出して、提督は封筒を開封する。

几帳面さが滲み出ている文字で書かれた手紙は、次のような内容だった。

『日向さんが企画したイベントで人員不足が起きているでしょうから、増援を送ります。』

しばらくその戦力で運用してください。

P.S. 本土に行きたいですが、現状難しいです。あと、鎮守府のネットでアダルトコンテンツをダウンロードするのは自重してください。そろそろ問題になります。

大淀』

事務的ながら個人的な警告までしてくれる親切さが有り難い、実に大淀らしい一通だった。

「残念だな。本土行きは無しだ」

丁寧の手紙を折りたたみながら、提督は震え声で言った。

「最近、夜になるとネットが重くなるのは提督が原因だったクマか……」

「提督、後でちよつとお話しませんか？」

半目で睨む二人の艦娘から目を逸らしながら、提督は呟いた。

「瑞雲祭りか……。何だか俺も行きたくなくなってきたな」